
吸血魔王と赤血魔神

美平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血魔王と赤血魔神

【Nコード】

N0191T

【作者名】

美平

【あらすじ】

殺されてしまった俺「葉月零花」（はづき ゼレカ）は自称神？からチート能力？を与えられ、異世界に転生させられた。辿り着いた場所は魔界。^{ニンプルケティック}イロイロな事情が重なり、俺は《赤血魔神》として勇者とか賢者とかその他とかと闘う羽目に。しかし、（キラーン！）自称神？から与えられたチートで闘う、基本ほのぼの・コメディー・その他諸々が入り乱れるストーリー！。初めての執筆なので、生暖かく読んでやって下さい。

始まりの会話（前書き）

初投稿です。

誤字・脱字・変な言い回し等ありましたら、教えてください。

始まりの会話

世界が見える

真っ黒な世界

黒くてドロドロしたその世界

さっきまで俺が居たあの場所

俺は世界に絶望した

何故絶望したのか、それは簡単なこと

俺の大事な人、守りたかった人、愛する人その全てを俺の目の
前で……

『殺された』

「!!」

不意に聴こえた声。しかし、その声は俺のよく聴く声

『何時までそこにいるつもりだ』

また聴こえた？響いた？いいか。そんな事

『お前は死んだ』

・・・知っている。俺が臨んだ事だ

『・・・悔しく無いか？目の前で殺された事を。これ以上だれも殺させたく無いか？』

「・・・ああ。」これが死後の世界での残留思念でも、おれはそう願う

『なら、その願い叶えてやる』

光に包まれる俺の身体

行き着く場所は何処だろう・・・

仕事（前書き）

初めてなのでペースが掴めません。
とりあえずメインヒロインが出てきます。

仕事

——此処は魔王城。幾千、幾万の悪魔達の住む城。

此処は魔王城の正門。魔王城の城下街の防壁のようなもの。

「おい、みるよ！あれ！」「あれは！」

「勇者の下僕の 세인트ペガシスじゃないか！」

「に、に、逃げろー！」

そう言つて、一人が放つた一言が混乱を招いた。しかし、

「騒ぐなつて。俺だよ、俺」

そう言つて 세인트ペガシス 普通の馬の三倍程ある体に羽を生やしている の体が徐に動く と一人の少年が姿を表した。

「何だ、ゼレカか。」

「驚かせやがつて。」

口々にいう皆に俺は、

「おいおい、悪魔がそれでいいのか？」

などと、解りきつた答えしかかえつてこない質問をした。

「いいんだよ、俺達は。元々戦闘用悪魔じゃないんだから。」

(ほら、やつぱり)

「まあいいや。それよりも「そんなことより、流石ゼレカだ。あの 세인트ペガシスを一人で殺つちまうなんてな！」

「いや、だからそんな事より「そうだぜ！やつぱりお前は《赤血魔

神》だぜ！」

・・・ 凶られたかのように喋るな皆。まあ、そろそろ・・・

「ゼレカー！ー！！！」

ほら、来た

「ゼレカあいたかったです」

コイツはこの国の姫 『エレスナーグ』 本当はもっと長い名前なのだが、あった時にそう呼べと命令いわれた。これでもこの国の吸血魔王なのだ。姫なのに魔王？ そんな事は気にしちゃいけないぜ

「？さっきから何を言ってるの？」

「いや、なんでもないさ。それよりも倒してきたよ、君の為に」

「／／いやだ、ゼレカ。私の為なんて」

　　というかお前宛ての依頼を俺がこなしたただけなんだかな・

「それよりも早く帰ろうよ」

「わかったわかった。エレスナーグ」

「もう、ゼレカの意地悪」 「はいはい。・・・エレス」

仕事（後書き）

「どうも～作者の代弁者のディーンです。

「・・・ゼレカです。」

デ「元気が無いなー、ゼレカ」

ゼ「元気もなにもほとんどできてないだろ？」

デ「まあ・・・それは・・・僕のせいなんですけどね」

ゼ「エレスの紹介もほとんどしてないしな」

デ「それは次回ということだ」

ゼ「まあいいや・・・このお話を読んでいただいた皆さん、ありがとうございました。感想やこのダメ作者への不満などございましたら、遠慮なく書いてやって下さい。」

城(までの)(一時)前書き)

GWが終わってしまいましたね。

・・・これから学校が再び始まりますが、最低五十話は毎日更新したいです。

城(までの)一時

今、俺とエレスは城に戻ってきた。本当はエレスは城で待っている筈だったのだが、さっきの台詞をみれば分かるように待っていていられなかったらしい。

「むう。待ちくたびれたよ」

「その台詞。此処に来るまで三十回は聞いた」

「それだけ待ってたの」

「ふふっ」

俺が言うのもなんだが、エレスはとても可愛い。水色がかかった髪が腰辺りまで伸び、紅く光る瞳が存在感をだしている。

・・・瞳が紅いのは悪魔・吸血鬼等の特徴らしい。背は俺より頭一個分ぐらい小さい。

「ゼレカ。ゼレカの高さからみた世界って、どんな感じ？」

「ん。確か俺の身長が169?だから、エレスよりも高い目線かな」

おおーっと。つい説明口調になってしまったぜ

「?あんまりわからないよ」

「つまりこんなかんじ」

俺は後ろからエレスを抱き上げる。

「えっ？あっ、ひぁ！」

「あー。いきなりでわるかったな」

「抱き上げるなら一言いってよ」

「ふふっ。ゴメンゴメン」

そういつて肩に座らせた。改めて抱き上げてみると、羽のように軽い。

「わぁー！これがゼレカのみてる世界なんだー！」

「喜んでいただけで光栄です。エレスナーグ様」

いつものように悪戯心がでてきたので、意地悪してみる。

「もう、ゼレカ。エレスって呼んでっいつもいっててるでしょ。ゼレカの意地悪」

ふふっ、やっぱり予想通りの反応。

気づいているかもしれないが、エレスは俺に『エレスナーグ』と呼ばれる事を嫌っている。嫌いというか、俺だけの特別な呼び方で呼んで欲しいらしい。

「やっぱり予想通りだった。」

「やっぱりって、もうー！」

「君をみていると、悪戯心が刺激されるからね」

「ゼレカ!!」

「何? エレス」

「そう呼んでくれる方が、やっぱり嬉しい」

なーんて言ってる間に玉座の間に着くころだ

「遅いですよ、ゼレカさん」

『!?!?』

おおっと、やっぱり。ん? 今のは誰かって? それは次回明らかにかに!
!

城(までの)一時(後書き)

デ「いやー、ほのぼの甘甘してますねーゼレカさん」

ゼ「今回は予告通りエレスの紹介をしてたな」

デ「裏話はこれから本編の方ではらしていききたいと思っております」

ゼ「・・・最初の会話の全貌も明らかにしないとイケないしな」

デ「？最初の会話？ナンノコト？」

ゼ「忘れてたな」

デ「いやっ、そんなっ、忘れてたなんて。ちゃんとこれから暴露されますよー」

ゼ「どうだか」

デ「そんなことより、次回はもう一人のメインヒロインがでてきます！」

ゼ「お前があと一人で、メインヒロインをだすのをやめるとは思えないけどな」

デ「まあそれは、作者のみぞ知るといふことで」

ゼ「結局お前だろ！！それとタイトルにもあるんだから、俺の能りよK」

デ「それでは、また次回」

ゼ「聞けー！ー！！」

城での一時（前書き）

いやー、まだ慣れないのでタイトルとサブタイトルを間違えて入力して、その度にタイトル変更しています。

城での一時

「ソルーティア」

俺は目の前の女性へと言った。こいつはソルーティア。エレスの使い魔だが、エレスを『主人』というよりも『妹』の様に扱っている。当の本人も『下僕』ではなく『姉』と思っている。・・・なんでこんなことを言うかと今と、基本姉妹（兄弟もそうだが）は同じ様に扱って欲しいのだ。つまり・・・

「ゼレカ。貴方は何度言ったら分かるの？私のことは・・・」

「OK、OK。俺がわるかったって、ソル」

『妹』であるエレスを特別な呼び方で呼ぶ様に、自分も特別に呼んで欲しいということ。まあ、この時も悪戯心が芽生えたからなのであるが、前に一度からかいすぎたところ『地獄（此処は魔界であるが）』のような目にあわされた。・・・あれは辛かった。まさか

「ゼレカ。何を考えているのかなあー？私に教えて欲しいわー」

「いえ。なんでもありません」

心を読まれたあー！！

毎度毎度のことながら不思議だ。心の中なんて読めるものなのか？

「ソル」。どうしたの？」

「エレス！！怪我とかしなかった？」

「うん！大丈夫だよ」

「それならよかったわ」

「！ソっ、ソル。くっ、苦しい」

目の前でおきてるやり取りをみていると、本当の姉妹のようだ。ソルも髪の色が水色で、紅い瞳だから一見するとどっちがどっちか分からない。決定的な違いは、身長と髪の長さ。身長は俺よりも少し小さいぐらいで、髪は後ろで結んでいるエレスとは違いそのまま垂らしているだけである。

「それはそうとソル、何か用があったんじゃないのか？」

「それは今のであらかたかたずきました」

エレスを弄るのが、大半かよ。

「ただ残りの用事が、『この城下街に向かってくる、魔物及び人間達の排除』というのを貴方に伝えることでした」

「ふーん。って、おい！明らかそっちのほうがでかい用事だろ！」

「何を言ってるんですか！エレスを弄る方が重要ですよ！」

「わかった、わかったから。だったらさっさと片付けてくる」

「ゼレカ！！また行っちゃうの！？」

「すぐ戻ってくるさ。だから大人しく待ってて」

「・・・本当に、本当にすぐだよ?」

「ああ。かえってきたら、エレスの大好きな『あれ』を飲ませてあげるから」

「本当!! だったら尚更早くかえってきてよ」

「もちろん。じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

「気をつけて」

「ああ」

そういって俺は走り出した。

城での一時（後書き）

デ「とりあえずのメインヒロインはできましたね」

ゼ「俺は『とりあえず』という言葉が気になるんだが」

デ「そんなことはいいじゃないですか。次回はゼレカが楽しみにしていた『戦闘シーン』なんですから」

ゼ「さらりと『さん』をとったな……。まあ、やっと俺の能力が明らかになるな」

デ「とは言っても半分ぐらいしか力をださせないけどな」

ゼ「！！もう半分もだすのか！？ちゃんと後々のこと考えてるよな？」

デ「多分考えてると思いますよ。『作者』が」

ゼ「だから、それはお前だろ」

デ「・・・俺としては戦闘の後が一番書きたいんだけどな」

ゼ「何か言ったか？」

デ「いえいえ。なにも」

ゼ「とりあえずは次回から戦闘が始まるので、宜しければ読んでやってください。・・・やっぱり気になる。おい作者」

デ「それではまた次回」

ゼ「逃げやがったな！あの野郎！！」

攻攻戦（前書き）

GW疲れなのか、体調を崩してしまいました。それでも更新は続けます。

『^{までの}城一時の』の前書きで「最低五十話は毎日更新したい」と書いたんですが、「最低五十話ぐらいまでは、毎日更新したい」の間違いでした。

毎日五十話ってプロ並のペースですよ。時間があつたらそっちの方も修正します。

間違えてしまったことをお詫び申し上げます。

攻攻戦

「……………それにしても、毎回毎回この量の魔物を仲間にしてるってのは一種の才能であり、俺達にとっては厄介極まりない災厄だぜ」
なんてことを目の前の魔物の、そのまえにいる『人間』達に言った。

ああ、早く城に戻ってエレスに『あれ』を飲ませたいな―
……………さて。そろそろ片付けるか。

「覚悟しろ！悪魔め！」

おおー。威勢のいい剣使いだな。

「ちよつとー！油断しないでよ」

魔法使い（メイジ）にみえるが賢者だと思う。

魔法使いと賢者は放出してる魔力が若干違うからな。

「二人とも。目の前の敵から目を離すな」

ふーん。この魔法剣士が司令塔か。

「うるせーな！そんなことは言われなくてもわかってるよ」

「覚悟してもらおうわよ、魔王ー！」

…………… why? 今何か聞き間違えかもしれないけど、おかしい言葉が聞こえた？

「……………おい、人間ども」

ちよつと声色を低くしてみました

「何だ？魔王」

……やっぱり、俺を魔王って言った。聞き間違えじゃなかったな。

「クククつ。俺が魔王か。残念ながら俺は魔王じゃない」

「「「！！？」「」」

つまるところ、俺はRPGラスボス前の中ボスってことだ。

「ただどチートを標準装備してます。謝る気はないけど、ゴメンなさい」

「くつ、まだこんな奴がいたなんて」「命ごいは済んだか？」

そうやって俺は魔力を右手に集中させ、棒のような細長い槍を創った。

『深淵の槍』
ランサー・ソロ・ダーク

俺はその槍を人間達の後ろにいた魔物達に投げた。

「「「！！！」」

「なっ！」

俺の投げた槍の周りにいた魔物達が一瞬で消えた。

消えたわけじゃないんだけど。

「そつ、そんな馬鹿な!!」

「魔物達の数は千体はいた筈だぞ！」

説明ご苦労

簡単に言うと、人間達の後ろにいた魔物達はあと四百体程になって
いた。

消したわけじゃなく、正確には『浄化』したんだ。

これである魔物達、はまた俺達に従ってくれるだろう。

「皆、距離をとれ。いつも通りにやればこんな……や……つ……」

…

ゴキッ!!

長々喋ってる間に一気に近づき、頭を持って首の骨を折った。

「アイザック!!」

「よくもあいつを!!」

そんなことはお構いなしに俺はアイザックと呼ばれた魔法剣士の血
を抜き、瓶に詰めた。

「何をしてる!! やめる!!」

さて、血を全部抜き採ったから……

「そんなに返してほしければ、返してやる」

白く、冷たくなった身体を放り投げた。

「遅い」

投げつけた後に、自称神にえられた能力の一つ、『想像創造』をつかい一本の『刀』を創った。

『黒刀・鎌鍵』

鎌のような形状をした刀。

その刀で魔物達を斬りつけた。「いくぞ。『命刈り（ブレスキラート）』！」

周りにいた魔物達はみるみる黒い液体をまき散らす。

ある物は、頭をとばしても向かってくる。

ある物は、肉片になるまで暴れる。

「はははっ、はははっ、ハーハーハっ！」

生きてるものを刈り取る刀

「なっ、何だコイツ!？」

「ばっ、化け物!！」

……………おおーっと、危ない危ない。つい狂っちゃった。

「それじゃあそろそろ、魔王様の為に死んでもらおうか」

「いつ、嫌っー!！」

「助けてくれー！」

「……見苦しい」

そう言つて、刀を振るつた

ザシュ！！

「さーつてと、服が赤くなつたけど戻るか」服だけじゃなく髪も赤いけど早くエレスに会いたいから、おとす前に先に会おうかな

浮かれた足どりで城に帰るのが自分でもわかつた。

俺が後にした場所には生き物が残ることはなかつた。

攻攻戦（後書き）

デ「改めて、作者の代弁者のディンです」

ゼ「本当に改めてだな。何かあったのか？」

デ「いや〜なんとなくもう一度いつとこうと思って
ゼ「そうか」

デ「ところで、戦闘のほうはどうでした？ゼレカさん」

ゼ「あれで半分もだしきったのか？俺はまだまだ半分もだしてなかつたけど」

デ「まあ、これからチート能力もばんばんだそうと思うのでガンバツて」

ゼ「武器想像もそうだけど、魔力を……魔法なんかの技を使いたいぜ」

デ「さて 次回はいよいよ俺が書きたかった話だ」

ゼ「……ちなみにきくが、どんな内容だ？」

デ「……ガンバレっ、ゼレカ」

ゼ「何が!？」

ぼんっ

デ「身体、大事にしるよ」ゼ「何故肩を叩いた。それに身体って…」

デ「それと、後書きと本編の方を少しだけ変えました」

幸福物質（前書き）

今回は早く書きたかった話です

本当はもっとピンクムードにしたかったんですが、自分の文才のなさが災いして温めになりました。

それでも一応ピンクです。

苦手な方は御注意ください

幸福物質

とりあえず今、俺は城の中に戻ってきた。

服は魔物の血が、髪は人間達の血で真っ赤になっている。

その格好のまま俺は玉座の間に来た。

理由は簡単。早くエレスに会いたかったからだ。

そして、俺は、扉に手をかけた。

「ただいま」

「ゼレカ〜!!」

「つと。待たせちゃったね」

「もつと早く帰ってくると思ったのに〜」

「ゴメンごめん」

「ゼレカ。早く〜」

？俺はなんのことが分からなかった。が、

「ああー。でも、シャワーを浴びてからね」

「シャワー浴びるの？だったら私も…」

「却下」

「即答!?!」

「いや、普通にまずいだろ。一緒は」

「ムウ」。大丈夫だよ」

「はいはい。とりあえずシャワー浴てくるから」

「あつ、ゼレカ!?!」

ガチャン

エレスが何か言い終わる前に俺は扉を閉めた。

ドアの中

「ふふふ。ゼレカ、覚悟してなさい」

ドアの外

ゾクゾク!?!

今何か悪寒がした……気がする。

「……さっさと入ってくるか」

今おもえば、この時に対処しておくべきだった

脱衣所

此処は魔界だけど、血のシャワーがでるわけでも、マグマの湯舟でもない。

俺が創ったんだが、普通の露天風呂と大差ない。

その露天風呂がエレスヤソルにも人気だったという、ある意味衝撃だった事実。

なーんて思いながらコートを洗濯し、扉を開ける。

カラカラ

扉を閉めて、身体についた魔物の体液と髪についた人間の体液を洗いながす。

鏡をみると俺の髪が黒ずんだ赤から、漆黒に戻っていた。

チャポン

「ふうー」

湯舟に入ると、つい声がでちまう。これはこの世界にくるまで、つまり殺されるまえからのことである。

それにしても戦闘のあとの風呂は気持ちいい。

チャポン

……………今の音は？もしかしなくても……………

「ゼレカ あんまり遅いから入っちゃった」

……予想的中

「遅いって、入ってからまだ十分もたつてないだろ？」

「？なんで後ろ向いてるの」

「なんでもなにも、タオルまいてないだろ」

「ふふふ、何言ってるの。ちゃんとまいてるよ？ゼレカのエッチ」

「！……」

落ち着け。落ち着け俺。ここで洗濯をミスったら………つて選択をミスってる！？

「それよりゼレカ。ここは温泉だから、ここのが飲みやすいよ」

「ああつ、それもそうか」

振り向いて『あれ』を飲ませる準備をした。

少し鼓動が高まったきがする。

本当にタオルをまいていた

「ゼレカ、顔が赤くなってるよ？」

「／／／何でもない」

そして、おれは……自分の指の皮膚を歯で噛み切った。その指をエレスの口に運んだ。

「はむっ」

「!!、くっ」

「チュツ、ハア、チュツ、ンツ」

血を吸われてる時は、痛みを抑える為に快楽成分の含まれた唾液をだしているらしい。

その結果が今の状況

普通の露天風呂で今みたいなカップルがいたら、まず間違いなくピシクなことをしていると思われる。

「クチュ、ズチュ、ハア」

吸血鬼にとって人間の血は最高の代物だから、血を飲んでる時はずっとも恍惚している表情だ。

「クチュ、……ゼレカ。もう止まっひゃよ」

「あつ、エレス飲み過ぎだよ」

「ゼレカの血だから、ツク残しなくなかったノ」

酔って潤んだ瞳。そしてここは露天風呂。もちろんのこと、入浴中なので（タオルはあるが）お互いにもきていない。

……理性が音をたてて崩れるかもしれないが、

「だからって酔うまで飲まなくても……」

……それ程俺が好きならいいかな。

「俺もエレスのことが好きだよ」

「ふえ！？」

そうして、俺はエレスと唇を重ねた

「チュク、ズルツ、ン」

「ぜっぜレカ！？今、わっ、私ゼレカと……。キュルーン／／／」

「おおっと」

倒れる前にエレスを抱えた

……抱えた？

今改めて自分のおかれた状況を確認する

……どうすることもできなくね？

仕方がない。あんまりやりたくない手段だけど……

とりあえず、自分で手ぬぐいを創って、目隠しをした。

非常事態だから目隠しなんてしなくてもいいかと思ったが、本人の了解も得ないでみるのはまずい。

……エレスが起きてたら俺の目隠しをとってるだろうが、それでも了解をとらないことには自分からはしない……と思う。

理性が崩れなければな

その格好のままエレスの身体を拭く。

……今の自分を客観的にみると自分に、『どんなプレイだ!!』とツッコミたくなる。

自分の身体も拭き、新しい服を創造する。後は……

「おい、ソル。エレスのことを頼みたい……」

「はいっ!! わかりました!!」

言い終わるか、終わらないかの速さで来た。これで大丈夫だろ。

「ああ、エレス。今の貴方はなんて可愛いらしいのー 服を着たら私の部屋に行ってあーんなことや、こーんなことをしましょ」

……これはこれで別の問題が発生しそうだけど、勝手に入ってきたってことで

「それとゼレカー。明日にでも戦いの報告をしてもらいたいんですが」

「それなら今……」

「『明日』お願いします」

「……はい!?!」

なんだ！？今の！恐怖以上の何かだ。

……ごめんエレス。明日また血飲ませてあげるから。

そのまま俺は部屋に戻った

幸福物質（後書き）

デ「書きたかった話がやっと書けました」

ゼ「遺言は一文だけゆるしてやる」

デ「ちょっと、ゼレカさん、穏便にいきましょうよ。お

ゼ「一文おわったな。『斬刀狩り』！」

デ「おっと。危ない危ない」

ゼ「ちつ。弱点を知ってたか」

デ「もちろん。真上までは居合がとどかない」

ゼ「まあいいさ。それより、こんな調子でいいのか？」

デ「そういうと思ってゲストをつれてきた」

ゼ「ゲスト？」

デ「エレスナーグさんです」

エ「こんにちわ」

ゼ「！！エレス……」

エ「ゼレカ。あのタイミングで好きって言うてくれるなんて……私

嬉しいです」

ゼ「そっそうか／＼」

エ「でも、あのままもつと『楽しい』ことができたらよかったのに」

ゼ（はははっ。それはそれで俺が困る）

デ「ふふふっ」

ゼ（ゾクっ！）

デ「エレスナーグさん。その願い叶えて差し上げましょう」

エ「本当につー！！」

ゼ「まてっ。本編でそんなことやっていいと思ってるのか！！」

デ「確かに、『本編では』そんなことはまずい」

エ「そうなんですか？」

デ「だがっ！！『後書きなら』何をやっても許される。何故か？それは、『俺が作者だから』だー！！」

エ「すごいです〜！！ディンさん」

ゼ「ちよっ、待ったー！！」

デ「なんだ今更。せいぜい『遺言』とか言ったこと、後悔するがい」

ゼ「なっ!?!」

デ「エレスさんは、どんな罰が……間違えた。どんなことがしたい？」

エ「私はとことんゼレカを弄びたいです、ディンさん!?!」

デ「クククっ。とことん弄ぶかつ。なら『チート能力封印して、女性化』がいいかな」

ゼ「考え直せディン、エレス!?!それにいつのまにか仲良くなってるし」

デ「さうで（黒笑い）次回の後書きが楽しみだなあー」

エ「私も楽しみになってきました」

ゼ「……………俺は今すぐ『明日』を壊したいぜ。俺から全てを奪ったアイツに」

デ「シリアスモードになっても、無駄だぞ」

ゼ「ちっ」

デ「それでは……………」

デ・エ「次回へー」

ゼ「次回よ。こないでくれ!?!」

泡沫会話（前書き）

今回はシリアスです。

そして予告通り後書きで『罰』をやります!!

泡沫会話

「ふう」

俺は風呂から戻ってベッドにのった。

ベッドの上からみる天井は、何かを錯覚させる。

「今日もいろんなことがあったな」

そういつて、俺は目を閉じた。

……………「う」は……………。

ああ、……………あれか……………。
いつもの……………『夢』。

「よう、ゼレカ」

こいつが俺にチート能力を与え、黄泉がえらせた自称『神』

「おい、その呼び方をするな。俺のことは『マムート』と呼べとい
つたろ」

……神であるのかなのか、俺の心をよめるらしい。……そんなことよ
り。

「何か用があつて現れたんじゃないのか？」

「ああ、そうだ」

「だったら早く用件を言え」

「……お前の気持ちが変わってないか、聞きにきた」

「なんだ、そんなことか。『俺は友人と恋人を目の前で殺され、俺
を殺した奴を許さない』ってことだろ」

「気持ちは変わってないようだな。『あの時』よりも正確に受け答
えができてるな」

「当たり前だ。『あの時』は事件の直後だったからな。……今とは
違う」

「気持ちが変わってないようで、俺は嬉しいようで悲しいがな」

「黄泉がえらせてもらった時は驚いたが、今となつては普通のこと
だ」

「そつといえば、お前魔界にきてどのくらい経つた？」

「確か一ヶ月くらいだ」

「……そうか。魔界と下界じゃ時間の速さも違うからな。下界で
は四ヶ月ぐらいに相当する時間だぞ」

「やっぱりそんなぐらいか」

「時間も伝えたいし、お前が何か聞きたいことがなければ俺は帰るぞ？」

聞きたいことか。なら……

「俺の能力をもう一度確認させてくれ」

「お前の能力か。わかった。

まず一つが『身体能力向上』。これは下界の時のお前よりもいろいろな面で、身体能力が上がっている。

二つ目が『肉体変化』。これは魔力やその属性を付加する能力……というより改造のようなものだ。魔力は魔王や天使よりも上。属性は使い放題だ。

この二つはお前を魔界におとす前に施した能力。『魔神』となったお前の基礎能力のようなものだな。

そして三つ目が『想像創造』。お前が『想像』したものを瞬時に『創造』する力だ。……ただし、生き物を創造することはできない。食糧なんかは大丈夫みたいだが」

みてたのかよ……

「俺は神だからな」

また心をよまれた

「ま、そんな説明でいいや」

「そうか」

「最後にもうひとつ。お前はなんで、俺を黄泉がえらせた？」

「……………それか。それは俺にもよくわからん。別に俺が殺したわけでもないし、お前を黄泉がえらせるように言われたわけでもない。ただ、昔の自分をみているようだったから、かな」

「……………わかった。それだけきければ十分だ」

「なら、俺はもう帰る」

「ああ。……………またな」

「用があつたら現れるからな」

そう言って、マムートは消え俺の意識は闇に溶けた

泡沫会話（後書き）

デ「さーあーやってまいりました！お待ちかねの後書きタイムです」

エ「うみゅ〜。ディンさん、私今回出番無かったですよ！」

デ「ごめんごめんエレスさん。こちら辺でゼレカの目的と能力説明があつたほうがいいと思って」

エ「まあ、後書きで沢山出番があるから良いですけど。次回は私が出番を増やしてください！！」

デ「もつちろん！！明日はエレスさん視点で始まりますから」

エ「そうなんですか！わぁー、明日が楽しみです〜」

デ「それよりも、予告通り。あれを始めません？」

エ「そうですね〜！！それが楽しみだったんですから」

デ「ゼレカの奴はまだ本編と違っていているから、今の内に部屋に侵入してきな。ああそうそう、これも持って行って」

エ「これは？」

デ「通信機のような物だよ。これで合図するから」

エ「わかりました」

デ（ゼレカ。覚悟しろ）

ゼレカの部屋

エ「ゼレカ」

ゼ「どうした？エレス」

エ「部屋入ってもいい？」

ゼ「いいよ」

ベツトに腰掛けるエレス

エ「ゼレカも隣に座って」

ゼ「はいはい」

ゼ「やっぱり、エレスはおすのが好きだな。自分がおしに弱いのは気づいてないみたいだけど」

デ「エレス。もういいよ」

ゼ「？あのバカ作者の声かしたきがしたけど」

エ「！！！！覚悟して下さい。ゼレカちゃん」

ゼ「わぁっと。いきなり押し倒すなって。……ゼレカ『ちゃん』？まさか！！」

エ「もう気づいたんですか？…遅いですけど」

ゼ「なんかやたら身体が軽いし、胸も少し重いよっな……」

デ（それが女体化です）

ゼ「シリアスだからすっかり忘れてたぜ」

エ「それでは早速脱いでもらいましょう」

ゼ「ちょっと、まつ……！？」

エ「むう〜。ゼレカちゃんの胸、ソルより小さいけどそれでも私より大きい」

ゼ「いや、俺男だから胸があっても嬉しくないし」

エ「……………かぶっ」

ゼ「！！エっエレス。まつ、だっ…ダメだっ…………。」

エ「ジュール、…………ぬぶ、はっ…………ジュール」

ゼ「なんかっ…………、いつもとはっ…………、違う…感じ」

エ「ジュール、…………ゼレカちゃん…………可愛い声です、」

ゼ「本当につ、…………エレスは…………おすのが…………好きだな」

エ「そろそろ…………限界ですっ…！」

ゼ「！！まつ、エレス…！」

デ「エレスさんが限界をむかえられた為、ゼレカの無事を祈りつつ
祈らないように終わります。後日談は次回の後書きに載せますの
で」

会話の外（前書き）

今回はエレス視点で書いてみました。

前話の現実でおこっていることですので、お間違いなく。

会話の外

私は今ゼレカの部屋にむかっていた。

昨日、ゼレカに血をのませてもらってからの記憶が無いのはなんでもか分からないけど。

／／それに、その時のことを思いだそうとすると恥ずかしいなる。

そんなことを考えてる内にゼレカの部屋についた。

コンコン

いちおうノックを試してみる

「……………返事が無い。ただの魔神のようだ」

……………自分でもわけがわからないことを言った。

いわなきゃいけない気がしたから。

扉をあける。

ギョッ

ゼレカはベットの上にいる

「ゼレカ。もう朝だよ」

私はゼレカの上で足とか腕を踏まないように、ひざまずいた。

……上からゼレカの顔をまじまじと見つめている。
漆黒のような髪が首の付け根までのびて、今はみえないけど緑と黒の瞳が妖しく魅える。

「……うにゅ／＼／／」

改めてみると顔が赤くなりそう。

今へんな声でちゃった…。

はっ！！

そっそうだ！

「ぜ〜れ〜カ！！早く起きてよ！」

自分が何をしにきたのか思い出した。

「お〜い？ゼレカ？」

何をしても起きない。

「むにゅ〜。……そっか。何をしても起きないなら……。」

私は、ゼレカの口に私の口を重ねた。

「……はぁん……ジュル……っんふ……」

私、ゼレカとキスしてる。

「……グチュ……ふっ……」

.....

キス！？わっ私が！？えっ、えーと！？

「きっキュルーン／／／」

そこで私の意識が途切れた

会話の外（後書き）

ゼ「……………あれ？俺なにしてたんだっけ」

デ「しりたいかな？ゼレカ」

ゼ「ああ。お前がいるから『後書き』ってのは分かるが」

デ「昨日、『後書き』で何してたかな？」

ゼ「昨日？確か……………あつ！！」

デ「思い出したようだな」

ゼ「……………ああ。思い出した。とりあえず刺されとK……」

デ「その格好でそれをいう？」

ゼ「ああ？身体は元に戻って……………」

デ「戻ってるな。身体は」

ゼ「！？なんで何も着てない！？」

デ「思い出してないのか」

エ「はあくむ。あれ？おはようゼレカ。それとディンさんも」

ゼ「！？ちよつ、エレス！！なんで何も着てないんだ！？」

エ「何いつてるの？ゼレカ。昨日はあんなに《自主規制》したのに」

ゼ「いやっ、それはともかく……」

エ「朝から『18歳未満禁止』するの？私は準備してるけど」

ゼ「はあ！？何言ってる……」

エ「(キラーン)それでは……」

ぴとっ

エ「……柔らかくない」

ゼ「もう戻ってるよ」

エ「……え？……それじゃあ……／／／／……」

ゼ「どうした？エレス？」

エ「……二人とも、出てて……」

ゼ「ちよっ、何が……」

エ「いいから出てて……」

部屋の外

ゼ「イテッ！いきなり魔王の力で放り出さなくても」

デ「俺途中から空気だった」

ゼ「確かにな。にしても、突然なんだ？こいつはともかく、俺は昨日散々果てさせたる」

デ「うわー。こいついきなりなんてことを。マジでうわー」

ゼ「うるせえ」

デ「エレスはおすのが好きだから、おされるのは嫌いなんだぞ」

ゼ「つまり、昨日は俺が『女』だったから大丈夫だったのか？」

デ「当たり前だろ。男女と女の子同士は違うんだぜ。……………俺もお前も覚悟したほうがいいかもな」

ゼ「あつ？なんでだ」

デ「そんな気がするだけ。それよりも、次回またお会いしましょう」

ゼ「いきなりしめやがった。まあいいか。感想・誤字脱字・不満・リクエスト等がございましたら遠慮なくかいてやって下さい。それではっ」

部屋の中

エ「もうっ。ゼレカのっ、バカ」

会話の後の後（前書き）

毎日更新してますが、なかなか話が進まない今日この頃です。

前話の後のゼレカ視点です

会話の後の後

「……………ん？」

マムートと会って、目が覚めたみたいだ。

それにしても、やたら右腕に違和感を感じる。

右腕に目をやる。

「すう……………すう……………」

エレスがいた……………いた！？おっ落ち着け、O T I T U K E 俺。

あああ、やっぱり錯乱してる……………混乱？そんなことはいい！！

気を落ち着ける。

「ふう」

……………やっと冷静になった

あれこれ考えても始まらないから、エレスが起きるまで待つ。

「……………」

エレスは俺の右腕を枕にして寝てる。

気持ち良さそう顔してる。

「……………」

どれくらい経ったか分からない。それだけ、眺めているんだろう。

「……………」

このまま眺めてたら……………理性が破壊されそう。

よし。後十分で起きなければk…

「ん……………つにゅ？」

……………馬鹿なこと考えてる間に起きた。

「おはよう。エレス」

「あ、おはよう〜」

「エレス、君はどうして俺の部屋で寝てたんだ？」

「え？それは……………」

(ぼっ／＼／＼)

「何故に顔が赤くなる？」

「なっ……………なんでもない！」

「そっ、そうなんだ!？」

「そうなの。あっ……………それより、ソルがよんでたよ」

「ソルが?……………ああ。だいたいわかった。それじゃ、行こうか」

「うん!」

「……」

「……？」

「……」

「ねえゼレカ、行かないの？」

「行くよ。……着替えてからね」

「じゃあ早く着替えなよ」

「……わかってて言うてる？」

「何を？」

「着替えられないだろ、君がいたら」

「昨日、一緒にお風呂入ったのに？」

「……／＼それとこれとは別だろ」

「大丈夫だよ」（黒笑）

「……わかった……っというと思ったか!!」

「!!」

そういつて、エレスを部屋の外にだした。

「ちょ、ゼレカ!?!なんで!?!」

「なんでもなにも、君の前で着替えたら後ろから襲うだろ！」

「もちろんでしょ……！」

「ほら、みる！すぐ着替えるから、そこで待ってる……！」

「むう……」

部屋の中

俺はエレスに聞こえないように言った。

「……………はぁー。全く、無防備なんだから。俺以外にはこんなことすんなよ」

会話の後の後（後書き）

デ「人は何かを捨てなくちゃ、生きられないの？」

ゼ「……………なんだ、突然？」

デ「いやー、今日買ったゲームを遊んでたらメモリーがいつぱいだつたから」

ゼ「そりゃ、画像やらビデオやらアップデートデータがあんだけありゃ、容量もいつぱいだろ」

デ「いつの世も、用意周到な奴が生き残るのさ」

ゼ「つまり新しいメモリーを買ってあつたと」

デ「全部あてんなよ！！もれなく全問正解だ！」

ゼ「なんとなく分かるんだから、しょうがないだろ？」

デ「いいけどさっ」

ゼ「だいたいなんだ？その名言？みたいなのは」

デ「即興で思いついた」

ゼ「……………そうですか」

デ「そんなことより、今日下校中に雨が降ってて考えついたことが

ある」

ゼ「なんだ？」

デ「Yシャツ着て雨に濡れると、すっごい透ける」

ゼ「それが？」

デ「『後書き』か『本編』でお前とエレスにやらせてみよつと考えた！」

ゼ「何言ってるやがる!?!」

デ「あつ、エレスと『ゼレカちゃん』でもいいよ」

ゼ「……止まれないなら、壊せばいい。それが壊れた玩具の処理方法だ」

デ「言ってるわからなきゃ力づくで、ってことか」

ゼ「そういつことだ」

デ「じゃ近い内にどっちかでやろうかな」

ゼ「壊れるっ!」

仕事報告（前書き）

たまには、パソコンで書いてみようかと思う今日この頃です。

仕事報告

今、玉座の間にきている。

俺が着替えるから部屋の外にだしていたエレスが魔王の力で部屋をぶち破ったり、「着替えが終わった」と言ったら「じゃあまた脱いで」とか言われたりしたが、まあなんとか玉座の間に着いた。

……つくづくエレスはおすのが好きだっと思った。

っと、そんなことより

「やっと来てくれましたか、ゼレカ」

「ああ悪い悪い。いろいろとあったからな」

「それより……」

「昨日の報告だろ？」

「…話が早く助かります。では、昨日葬ったのは？」

「セントペガサス 一匹

下界に毒された魔物 三千匹

勇者と思わしき人間 三人

……かな」

「ペガサスの方は昨夜の内に毒しましたし、人間は消滅を確認しましたが……」

「魔物は全て『浄化』した」

「そうですか……。わかりました」

「ああ、後、人間から採取した『血液』を一瓶」

「……。それで、どうするのです?」

「……ぷっ!ハハハハハっ!ソっ、ソル!今の瞳の動き方!ハハハっ!」

「ノノノほん。ゼレカ、笑いすぎですよ」

「ハハハっ、わっ、わるい。……。ごほっ……。ふう、落ち着いた。ああ。好きにしていよ」

「そうですか。では、私が飲ませて頂きましょう」

「じゃあ報告はこのぐらいで大丈夫か?」

「大丈夫ですよ……」

ん?今の間が気になるけど、

「なら……。っほっ」と

そういつて、異空間から瓶を取り出した。

「では……」

「仕事。今日無かったよな?」

「ありませんよ」

「なら、久々にエレス連れて城下街にでも行くかな」

「それでは、エレスに『何かあったら、直ぐに私をよんでね』とお伝え下さい」

「……………相変わらずエレスに対しては言葉遣いが違うな」

「伝えとくさ」

「……………それと。ゼレカもお気をつけて……………」

「……………ああ」

今、一瞬ソルの表情が変わった気がした。

そして玉座の間を後にした

玉座の間

「……………たまには貴方の血を飲ませてくれてもいいじゃない」

仕事報告（後書き）

ゼ「海に行きたい」

デ「……………どうした？突然」

ゼ「なんか無性に海に行きたいんだ」

デ「失恋？」

ゼ「今日もエレスといろいろしてた」

デ「嫉妬？」

ゼ「ソルには微笑まれた」

デ「ストレス？」

ゼ「髪質も変わってない」

デ「んー……………何だろ？」

ゼ「……………山の頂上でもいいかも」

デ「山！？」

ゼ「何だろ」

デ「あー、なんとなく分かる気がする」

ゼ「分かったか？」

デ「……………熱い！」

ゼ「……………あー……………」

デ「今日はいつもの調子がでないな」

ゼ「そうだな」

デ「それにしても……………」

ゼ・デ『熱いー』

下界も魔界も似た様な場所（前書き）

今朝起きたら、肩甲骨が悲鳴をあげていました。

昨日の運動が原因みたいです。

……体、鍛えようかな……。

下界も魔界も似た様な場所

「エレス。今日ってなにもなかったっけ？」

「んーと……なにもない筈だよ」

「なら、久しぶりに城下街でも行かないか？」

「それはつまり、『デート』ってこと!？」

……そうは言っていないけど

「まあ、街の中を一緒歩いたり、買い物をしたりするわけだからそういう言い方もしくはないな」

「……ホントに!! だったら今から着替えてくる!」

「じゃあ、用意が終わったら門のところで」

「うん!」

エレスは目を輝かせながら走って行った。

俺も、着替えてこようかな

……ん?今の格好?紫の長袖に黒と赤のロングコート、黒を基調とした赤と青が入り混じったボトムに黒の靴。

全身暗い色のファッションはどう考えても『デート』には不釣り合いだ。

魔界でも暗い色が好きって奴は思った程いないらしいからな。

「とりあえず、部屋に行くか」

俺の部屋

クローゼットから適当に服をだしている。

……なかなかデートって感じの服が見当たらない。

今着ているのは如何にも魔王とかの服だからな。俺は魔神だけど…。

とはいつたって、別に城下街に知らない奴が沢山いるってわけでもない。

いつも狩りが終わって帰る時に会うからな。

「おっ……あつたあつた」

なんて考えてたら下界にいた時に……つまり、俺がまだ死ぬ前にいた場所（人間界）で着ていた服があつた。

赤いチェックの上着に黒い長ズボン、銀色のスニーカー、それと鎖の腕輪。

「これならいつもよりは、ましだろ」

上着の下はいつもの長袖を着て、準備完了。

「さっさと門で待ってるか」

俺はそう言い、門へ向かった。

終焉の門

「……………エレス、どんな服で来るかな……………」

いつものエレスの服は赤と青のローブを白いキャミソールの上に着て、下は少し長めの青いミニスカート。『ローブを着ていても、スカートまで長くないローブなのは、かわいいから』だそうだ。

「……………それにしても遅いな……………」

……………この後俺は少しだけ、意識を闇に沈めた。

下界も魔界も似た様な場所（後書き）

デ「眠いです」

ゼ「いきなりだな、おい」

デ「最近ゼレカをいじくる気力も無いんだよな」

ゼ「それは俺にとっては良いことだ」

デ「明日は眠くてもゼレカをいじくりまわすので、今日はいじくるのはやめときまーす」

ゼ「なに宣言してんだ!」

デ「ではこの辺りで、お休みなさい」

ゼ「おい、デイン」

デ「…ZZZ…ZZZ…」

ゼ「マジで寝てやがる…」

城下街でのデート（前書き）

今回はいつもより長めです
いろいろと疲れました。

城下街でのデート

三時間後

「……………」

意識を闇から引き上げた。

寝てる間に来たかと思ったが、気配も物音も立てず来るはずが無いからまだ悩んでいると思う。

「……………もう少し待って来なければ、様子見に行こう」

再び意識を沈めた。

……………更に二時間後

「……………寝てるのか？」

流石に心配になったから様子を見るに…

「おまたせ」

……………やっと来たか。

「待った？」

『凄く待った』

と言いたいところだが、

「いや。俺も今来たところ」

……このセリフは最早デフォルトだ。

「！」

改めて見ると……／／／ヤバイ。今のエレスの格好、凄くカワイイ。ピンクのパーカーに赤いチェックのミニスカート。そしていつもはただ垂らしているだけの髪を右に結んでいる。

「／／／」

「どうしたの？あつ、もしかしていつもとぜんぜん違っから見とれてるの？」

「……否定はしない／／／」

「じゅひゅ 早く行こうよ」

「ああ」

自分がどれだけ待ったかなんて、忘れた。

城下街

「久しぶりだな」

「うん！」

なんて言ったけど、俺は昨日来たばかりだ。

「何処に行く？」

「んーと……まような〜」

「だったら、ギルドにでも顔出す？」

「ギルドにならー昨日いったばかりだよ」

「……………ん？」

「あっ！……………なんでもない……………」

「……………なら、服でも見に行く？」

「うん！じゃあそつする」

服屋『地獄の衣』

「いらっしゃっ！？エレスナーグさんとゼレカさんじゃないですか

！……」

「おう。久しぶり、ミラル」

「しばらくぶり」

「なんだ！前もって連絡してくればよかったじゃないですか」

「いや、今日たまたま仕事が無かったから城下街に行こうって事になっただけから」

「いわゆる『デート』ってわけ」

「デートですか。それで城下をぶらついてるんですね」

「ミラルは、彼をつくらないの？」

「……おいおい。」

「いやあ、私にはそんな人できませんよ」

そう言ってるわりにはよく告白されるじゃないか。

「あっ！それで用事のほうは？」

「新しい服でも見ようかと思ってな」

「ゼレカさんのですか？」

「いや、エレスの」

「そうですか。では、こちらの棚です」

「エレス、どんな服が良い？」

「ローブかキャミ」

またピンポイントな注文で……。

「ローブだったらこのちょっと短めので、キャミソールだったらリボンが着いてるのかな」

「ん〜……ローブは色がそんなにすぎじゃない。あつても、キヤミは色も好き」

「じゃあキヤミソールだけ買うか」

「そうする」

城下街

「次はどうする?」

「おそろいのアクセサリが欲しいから装飾店に行きたい」

「装飾屋か……。だったら」

装飾屋『魅惑の小物』カラン

店のベルが店内に響いた。

「どうも!『魅惑の……』ってエレスナーグとゼレカじゃねえか」

「おう、アレク」

「こんにちは」

……アレクもミラルも基本エレスに『様』を付けて呼ばない。

理由はエレスが『様』付けで呼ばれたくないからだ。

魔王としての器が高いから、ってわけではないと本人は言ってるが、十分だと思う。

「ほお、お二人さん。もしかしてデートかい」

「うん！デートの真っ最中」

「それはそれは。好きだけ見ていってくれよ」

「揃いのアクセサリーか。どんなのがいいかな……」

「やっぱりおそろいの物は恋人同士は持たなきゃね」

「／／恋人つて……」

「あっ！このイヤリング。ゼレカにあうと思うよ」

それは『羽』がモチーフの緑のイヤリングだった。

「ん？……ああ、良いんじゃないか。だったら、同じデザインのペンダントがいいと思うな」

そういつて同じく、『羽』がモチーフの緑のペンダントを差し出した。

「わあ〜！！すてき！うん、これにする！」

「決まったみたいだな」

「ああ、イヤリングとペンダントにする」

「分かった。包装するか？」

「いやこのまま着けるからいいや」

城下街

このイヤリングは耳に穴をあけなくても大丈夫らしい

「ふっふ。にあう？」

「似合うぜ」

「／／ありがとう。ゼレカもすてきだよ」

「これはどうも。……さて、このあとはスイーツ店にでも行くのが普通だけど……」

「どうしたの？」

「……人気の無い所に行こう」

「? いいけど」

路地裏

「何しに来たかわかる？」

「わかんないよ」

「……つまり、じじいじいよ」

そういって、俺はエレスの口に自分の口を重ねた。

「!?!」

「……ふっ……んっ……クチュ……ジュル……」

「んっ……ふああ〜」

口を重ねる前に唇を少し切っておいたから、程良く血が出る。

「クチュ……んっ……はっ」

「ん?もう出ないみたいだな」

「……いきなり……」

「君にとっては俺の血は最高のスイーツだろ」

「ノノノ……一言言ってくればいいのに」

「サプライズがあつたほうが面白いからな。っと……もうこんな時間か。じゃあそろそろ帰るか」

「……ノノノありがとう」

エレスが小さい声で何かを言ったが、聞こえなかった
「ん?」

「なんでもない。また来ようね」

「ああ、また暇な時にでも来ような」

そして俺達は城下街を後に、城の帰路についた。

城下街でのデート（後書き）

デ「どうもー」

ゼ「復活したのか……」

デ「復活もなにも、あんなことがあって寝てられるかー」

ゼ「何があつた」

デ「PV 8000

ユニークPV 2000 突破!!

これが寝てられるかー」

ゼ「そうか。それは嬉しいことだな。今まで読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。これからも何とぞよろしくお願ひします」

デ「それを記念して次回は特別企画をやるつもりです」

ゼ「特別企画？」

デ「はい。なので次回は本編をやめて外伝にします」

ゼ「……嫌な予感しかしないが……」

デ「というわけで次回、お楽しみに」

外伝というか企画『記念話』（前書き）

デ「今回はggaggdになりました」

ゼ「收拾がつかなかったじゃねえか！」

デ「ほのほのあまあまggaggdしてます」

外伝といつか企画『記念話』

「いや、外伝ですねゼレカさん」

「おいてめえ、何出てきてんだよ」

「ちつつち。今回は本編が後書きの様なもんだから、俺が出てきても大丈夫なのだ」

「はあーあ、でだ Dein。記念って何をする気だ？」

「……すみません。何も考えていません」

「おい!!」

「仕方ないので一服してお開きということ。ゼレカは何がいい？」

「……レモネードで」

「OKOK。それじゃあとつぞ」

「ふん」

ゴク、ゴク

ニヤ（黒笑）

「ん？何だ!？」

ポン

「……大成功！」

「ゴホツゴホツ、おいディ……ン？なんでそんなに身長が高くなってやがる！」

「あはははー、俺が高くなったんじゃないやなくてお前が小さくなったんだよー」

「ああ？俺が小さくなった？……マジだ」

「それでは改めまして『記念』に『ゼレカを幼児化してみよう！』を始めました」

「この野郎さつきは何もねえって言うてただろ！」

「そーんな、俺が忘れてたと思った？」

「ちっ」

「でもこの提案はとある人が『ゼレカが私より頭ひとつ分くらい大きいから、逆転したい』って言ったから決めただけだ」

「……誰かはすぐ分かった」

「それじゃあ覚悟を決めたってことですね」

「待つ、だれがそん……」

「じゃあエレスさん、後はどうぞ」

「お疲れさまです、デインさん」

「エレス！いつの間に」

「はじめから居たけど？」

「俺の後ろに隠れてた」

「……………全く気付かなかった」

「ゼーレカ」

そういつてエレスは俺に飛び付いた。

……………後ろには『何故か』ベッドがあった。

なのでそのままエレスに押し倒される形で、ベッドに倒れた。

「！……………おいおい、いきなりだな」

「えへへ、だってゼレカがこんなに小さいなんて、なんか『弄りがい』がありそうだから……………」

「……………は？」

「いつも私が弄ろうとすると逆に弄られるから、いつか逆転さたいとおもって」

「え？あの、エレスさん……………」

「ああ、今のゼレカに『エレスさん』なんてよばれたら弄らないわけには……………」

しまった！逆効果か！

「まあとりあえず、弄ろうか！」

「いや、それなら元の身体に戻ってから幾らでもできるし」

「元に戻ったら私より大きくなるでしょ？」

「もちろん！」

「だから今じゃなきゃだめなの」

（くっ、こうなったら『力を解放』して…）

（あっちなみにゼレカ、俺まだこの部屋に居るから）

（デイン！お前まだ居たのか！）

（当たり前だろ。もしお前が逃げ出そうとしたらその身体のまま女性化させるからな）

（それなんて拷問！！）

（ほら覚悟決めろ、ハツキ。）

（なんで名字でよんだ？）（文字だけだからわかんないだろ）

（そんな理由かよ！）

「さあ〜ゼレカ。っと、まちがえた。ハツキ、おとなしくしててね」

「今は子供だ」

ガシッ

「……………なっ!？」

「今のあなたは力も子供並だから、こうやって力づくで押さえ付けることもできるんだよ」

今の状況

幼児化して、エレスにベッドの上で片手首を押さえ付けられてる

……………うん、これが逆だったら俺は凄く嬉しい。

「んっ」

いきなりキスされた。

確かにここまで強引じゃないが、俺もしている。

「ぶはっ」

「もう息があがってるよ、ハツキ。肺まで小さくなってるから?」

「多分な……………」

「手だつて足だつてこんなに小さい」

「いつもより二回りも小さえからだろ」

「つまり、いつもと逆ってこと」

「力で押し負ける程差があったとは……驚きだ……っ!？」

「ふふふ、ホントだ。こんなとこまで小さい」

「どこ触って!？」

「どこって、背中」

「ノノノいやそうじゃなくって、いきなり服の中に手入れるから……」

「いつもみてたあなたの大きな背中」

「大きいといっても、俺と同じ身長 of 奴の中では俺は肩幅が狭いぞ」

「そうじゃなくって、私を守ってくれる時のあなたはそれだけカッ

「コイってこと」

「いつもそういうこと言う時は赤くなってるのにな」

「だって今は私が弄ってるから」

「……くっ、忘れてると思ってのに覚えてたか」

「ふふふ、どこまで小さくなったかたしかめてあげる」

「いっいやあ、そんなこと確かめなくても、ってまったまった」

「大丈夫。怖がらなくてもいいよ」

「その割には目が狂った感じだけど」

「ふふふ」

その後俺とエレスは時間を忘れて（忘れさせられて）《自主規制》
をやって（やらされて）いた……

「俺？ずっと居たけど空気だった」

外伝というか企画『記念話』（後書き）

デ「どうでした？ゼレカさん」

ゼ「どうもこうも大変だったんだぞ！あの後…」

デ「いってもどうせ伏せ字になるからいいよ」

ゼ「まったく。……でもエレスが楽しそうだったな」

エ「私はもっと弄りたかったけど」

ゼ「いや、マジでもう『ハヅキ』にならないことを願う」

デ「ゼレカ」

ゼ「あ？どうした…」

バシャーン

ゼ「……………」

エ「水びたしになったね」

ゼ「まさか……………」

デ「安心しろ。『幼児化』じゃないから」

エ「『女体化』ですよね」

デ「もちろん」

零「貴様！！」

エ「零花。そんなかつこうで暴れるとさらに服が透けるよ」

零「……漢字表記なのは女体化したからですね、わかります」

デ「さつさと風呂に入っごい。もちろんエレスと一緒に」

零「まで、話会おう」

エ「早く行こう、零花ちゃん」

零「まっ……」

デ「がんばってねー」

休息後の仕事（前書き）

今日某雑誌を買ったら、とても僕好みの漫画が二つあったので、「たまには買ってみるもんだな」と思いました。

休息後の仕事

城に帰って来た俺達は玉座の間にいる。

「おかえりーエレス！怪我しなかった？」

「ただいま〜ソル」

……おかしいな。俺はそこまで信頼されて無いのか？

「お風呂に行きましょう」

「うん！」

考えてる内に会話が凄いとこまですすんだな。

「あっそうだ、ゼレカ。机の上の報告書よんでおいてね」

……今のエレスみたいな口調は疑いたくなるかもしれないが、間違
いなくソルである。

エレスと話してる時に誰かと話すと、そのままの口調で話すからな。

「はいよ」

「じゃ、行きましょう」

二人はこの城にもともとあった風呂ではなく、俺が創った露天風呂
に行った。

「……確認しとくか」

そういつて、机の報告書に目をやる。

「なにになに……『ナブラート村の影』か……」

概要はこうだ……ナブラート村で、度々おきる事件の元凶を退治してほしい。

ナブラート村はここ、『ニブル城』から徒歩で三日、飛んで一日の場所だ。

「……『テレポート』で行くか」

テレポートは闇と光と土と時が混ざった魔法だ。普通に習得しようとするはただの悪魔が三十年間修業して覚える魔法だ。

「さてと……場所を固定して」

そして俺は跳んだ。

ナブラート村

「よつと」

ナブラート村に着いたが、別に変わったところはない。

「おい。誰かいないか」

「……どなたですかな？」

「俺は城からの使い魔だ」

……一応身分は隠しておく

前にゼレカと名乗って切り掛かられたから、その用心というわけだ。

「おお、よく来て下さいました。失礼ですが、あなたの所属は？」

「衛生部隊第二所属アルト・シャートです」

……全て嘘

「衛生部隊の方でしたか。それならよかったです……」

「怪我人ですか？」

「いえ……それなら『喰らいやすい』からな！」

……『魔喰』か」

「なに……！」

「そうか……ナブラートの陰つてのはお前達か」

「くっ……何者だ！」

「ただのしがない『衛生兵』だよ」

「くそお！」

「『秘剣・十刃の舞』クロスブレード」

……さてと、まだ生き残りがいないか調べるか。

まだ気付かれてないみたいだし。

「おい、城からの使いで来た者だが……」

「グア！」

「ギエ！」

そういうと五匹の魔喰が出てきた。

「……面倒だな」

武器を『創造』してまっている。

「『電撃の槍』」
ショックロー

向かってきた奴に槍を向けている。
ただそれだけでいい。

「ギエエ」

向けるだけで槍が勝手に放電してくれる。

俺は黒焦げの『何か』に槍をむけて、

「お前達、こつなりたくなければ目的を言え」

「ぐをおー！」

……どつやら言葉が通じないみたいだ。

「『無双乱舞』派手に消し飛べ」

目の前の奴らを消し飛ばした。

……

「いない！！だれも！」

わざと大声で言った。

「てあー！」

誰かが斬りかかってきた。

「覚悟しろ、魔喰！」

「生き残りか？」

「そうだ。だったらなんだ？」

「背後注意」

「え？」

俺はそいつの後ろを指す。

「ぐをおー！」

「しまっ……」

「『ライトニング
雷の舞』」

「ギエエ」

「うん。反応速度、気配察知、筋も悪くない」

「あんたは……」

「俺はゼレカ。城の使いだ」

「城の奴か……ならよかった」

「お前の他に生存者は？」

「……おれの知り合いが……一人」
「そいつだけか？」

「ああ」「だったらそいつ連れてこの村から出るぞ」

「……助けられるよな？」

「どうした、突然」

「いや……なんでもない。場所は愚者の祭壇だ」

「ああ、あの地下の」

愚者の祭壇

「……シエイド？」

「マリーナ……」

「よかった……無事だったんだ……そっちの人は？」

「ただの城の使いだ。…それより、何があったか教えてくれないか？」

「そうだったな。俺はシェイド、こっちはマリーナ」

「……よろしく」

「どうも」

「それで……村の奴が突然魔喰になっちまったんだ。俺はマリーナを連れて逃げようとしたんだが、何分あいつらの数の多さと強さがない……、それでこの祭壇に隠れたってことだ」

「……ちがう……よ。突然じゃ……なくて、少しずつ……入れ……代わってた」

「無理に喋るな」

「……ごめん」

「……マリーナ、少し手をかしてくれないか？」

「……はい」

「……」

やっぱり、徐々に魔力が吸われてってる。

このままじゃまずいな……。

「……」

「おい、ゼレカ！何してんだ」

「早くこっから出るぞ。このままだったらこの娘は死ぬ」

「！！なにいつて……」

「祭壇に魔力を吸われてってる。ここに長くいたから、もう魔力が枯れけてる」

「そっ…そんな！」

「落ち着け。まだ間に合う」

「……何か…来る」

「！」

「ああ、漸く出やがった。シェイド、マリーナ連れてこっから逃げろ」

「分かった。あんたは？」

「俺はこいつ倒したら行く……と言いたいが、この大きさは……」

ゴゴゴ、ゴゴゴ

「なんだ！？地震？」

「シェイド！マリーナ連れて俺に捕まれ！」

「分かった」

「『テレポート』」

ナブラート村上空

「見てみる」

「！あれは……」

「あの村全てが魔喰だったんだ」

「そうだったのか」

「……………」

こいつ……

「シエイド。降りたら少し遠くまで逃げろ」

シエイドを地上に降ろした

「下から見るとさらにでけえな……………」

「ぐもももー！……！」

「勝てっかな？」

俺は嬉々として武器を創造した。

休息後の仕事（後書き）

デ「（読書中）」

ゼ「静かだと思ったら雑誌読んでたのか」

デ「もう三回目だけだな」

ゼ「はえーよ。もらったのってさっきじゃねえか」

デ「……久しぶりに読んだら新しいのが増えてた」

ゼ「お前は単行本派だからな。たまにしか本誌買ってないから、新しい漫画だつて増えてるだろ」

デ「その新しい漫画で二つ程俺好みのがあった。……早く単行本発売されないかな」

ゼ「さつきまで『今日の後書きは補足でもしようかな』って言うてたくせに」

デ「あっそうだ。そういえば今回つかった技の紹介しないと」

ゼ「……忘れてたのかよ」デ「（読書中）」

ゼ「馬鹿が逃避して読書してるみたいだから、また次回会おう」

デ「言い忘れたけど、本編と後書きを少し変えましたので」

常闇の炎（前書き）

多分、次の話までナブラート村編をやります。

戦闘シーン、楽しいけど難しいです。

常闇の炎

……改めて見るとでかいなー

あの村は直径二百メートルぐらいで、今俺の前にいる魔喰が口を開けた状態でスタンバってたみたいだからとんでもなく大きい。

緑の皮膚、紫色のぼつぼつ、短い足で四足歩行。おまけに目がカメレオンみたい。……総合すると口が裂けている巨大カメレオンだな。

「ぶつー!!」

おもわず吹き出した。

「キエエエエエー!!」

「うるせえな」

剣に炎の魔力を注ぎ込む。

「『バーニングインパクト 焰の一撃』」

その剣を目玉に向かって投げつける。

ブシュ、ベチャベチャ

「アアアアアアアアア!」

目玉までは届かなかったけど、顎から左の目の下までえぐれ緑の体液が大量に流れでた。

「……キモチ悪い。一体どれくらいの奴らを喰ったら気が済むんだ？」

マリーナとシェイド以外の村の奴は喰ったみたいだから…

「あの二人。逃げられたかな？」

俺はゼレカに言われた通り逃げている。地震の後、村がカメレオンモドキの化け物になったが、こっちに気付いた様子はない。

「……シェイド……あの人は……」

「ゼレカはあいつを倒したら来るって」

「……あの魔喰……は……弱点を……壊さないと倒せない」

「何だって！なら早くゼレカに……」

そういつて振り向いたら、カメレオンモドキの触手が無数に迫っていた。

「斬っても斬っても死なないな」

カメレオンは右後足と左前足が無く、胴体は緑の皮膚が更に緑になり、顔は至る箇所に傷がある。

……やったのは俺だけど

「ウヲエ？ニア、グワァー！！」

「なんだ？」

紫のぼつぼつから触手が生えている。

それを後ろに……

「まさか！！」

マリーナとシエイドか！

「させるかよ！テレポート！」

二人の場所に跳んだ。

「くっ、ここまでか。ならマリーナだけでも、『静寂の壁』！！」

「……しっシエイド！無茶はっ！！」

「駄目ならお前だけでも！」

「シエイドー！！！！」

ザシユ

「……生きてる?」

「危ない危ない。まさかこっちを狙うとはな……侮ってたぜ」

「ゼレカ!どうやって……」

「説明は後。今はコイツを……どうするか!」

剣に力を込めて触手をぶった斬る。

「なかなか死んでくれないからなあ」

「……祭壇だ」

「何が?」

「そいつの弱点。さっきの祭壇だ」

「……成る程、やっぱりか。あそこが一番魔力の変動があったからな」

「気付いていたの?」

「マリーナ!? 身体、大丈夫なのか?」

「えっ……うん。治ってるみたい」

「あー、さっき俺が魔力を流し込んだからな。でも俺の魔力……属性はあわせただけ、だからあんまり無茶はしないほうがいい」

「あつ、ありがとう」

「なに、お安い御用ですよ。それからシェイド、さっきの魔法で守っておけ」

「ああ……」

「敵からじゃない。俺から、な」

「え？」

「テレポート」

ヒュン

タツ

「さーてと。祭壇だったけな」

カメレオンの中の祭壇にテレポートした。

「んー、まとめて吹っ飛ばせばいいか。……ん？」

足を止めて『それ』を見る

「……祭壇の下……腕輪かな？」

銀色の腕輪が祭壇の下にあった。

「持って帰っても大丈夫だろ。それに、俺の記憶違いでなければこれは……」

「ギエエエエエオオ！」

「うるさくなつたな。じゃ、片付けるか」

右掌に闇と炎の魔力を溜める。この技は俺のお気に入り技に入る程の威力だからな……。

自分の回りには光と水の壁を展開する。

「《全てを包む闇よ、炎の如く侵略し如何なる敵をも焼き尽くせ》、魔力解放32%。『常闇の炎』シエノサイドダウン！！！」

たまには詠唱もやってみようと思つて詠んでみた。

……実際、詠唱すると威力も増すしね

荒野

「あつ、おい」

「跳んじゃたね」

「ああ。それよりも本当に大丈夫なのかマリーナ？」

「ええ。あの人に分けてもらった魔力があるから、なんの不調も無くなつたわ」

「そうか、なら良かった」

「キエエエエエオオ！」

「くっ、また触手が！」

そう思つて、壁に注いだ魔力を最大にした。

「あ？え？お、お？」

「なんだ？」

「なにかあつたのかな？」

カッ！！

次の瞬間、カメレオンモドキの体が爆発した。

祭壇

俺は『常闇の炎』を回りに散らした。

この真っ黒い炎は俺の意志を確認するまで増え、燃やしつづける。消えても消えてもすぐ増える、本当に『炎の様に侵略する闇』だ。

カッ！！

そして、こいつの体が爆発した。

「……やり過ぎたかな？」

あの二人まで吹っ飛んでなきやいいけど。

「テレポート」

シュッ

荒野

「けほっ、けほっ」

「ゴホッゴホッ」

カメレオンモドキの体が爆発したら、後には何も残っていなかった。

あの巨大な体が吹き飛んだことは一目瞭然だ。

それに、俺の『静寂の壁』まで無くなってる。俺はまだこの魔法を解いていない筈だが、それすらも無い。

「……………ここまでだとは」

シュッ

そんなことを考えてたら、そいつが戻って来た。

常闇の炎（後書き）

ゼ「なあエレス、何を真剣にやってるんだ？」

エ「料理」

ゼ「……何を作っていらっしやるので？」

エ「こっちは『地獄魚のムニエル』で、そっちは『針山草と苦隋のソテー』。で、今作ってるのが『鬼土牛のステーキ』だよ」

ゼ「……名前がやばい」

エ「え？魔界では結構有名な料理だけど？」

ゼ「まあそうだと思うよ。魔界だし」

エ「でもゼレカが作ってくれる料理もおいしいよね」

ゼ「ん、確かに作ると皆食べてくれるな。下界の料理だけど、味覚は悪魔も人も変わらないみたいだな」

エ「私もゼレカの料理好きだよ」

ゼ「それはどうもありがとう。……それよりも、さっきの『地獄魚のムニエル』が暴れ出してるぞ」

エ「あれ？おかしいな。作り方まちがえたかな？」

ゼ「作り方間違えて暴れるもんなのか」

部屋の外

「デ」という具合にはのぼのぼしてましたーって「ヤド」

契約（前書き）

眠いです。

それに試験一週間前です。

……大変です。

契約

「やれやれ、おもわずはしやぎすぎたな。まさかここら辺一帯を焼き尽くしていたとはな」

『……………』

「ん？その何か言いたそうな目はなんだ」

「どんたけの魔力をつかつたんだよ！！カメレオンモドキがいた場所がえぐれてるじゃないか！」

「それは魔力を込めすぎたから。あの場所は『光の安息地』^{プレスタイン}を張っておいたから、修復作用が発動して元通りだ。……………ちなみに『光の安息地』をつかつたから俺は無傷であり、この衝撃も和らいだつてわけ」

「…………俺の『静寂の壁』は一点に集中すればたいいの魔法は掻き消せる盾だぜ。それを和らいだ余波を防いだけだけでも消えるなんて……………」

「あの、まだ貴方のお名前を聞いていなかったのですが」

「そうか、まだ名乗ってなかったっけ。俺はゼレカ、衛生兵兼空撃隊隊長『夢幻のゼレカ』だ」

「やはり……………」

「何がやはりなんだ？」

「ほら、昨日セントペガサスを一人で倒した…」

「あー、あれがお前だったのか」

「まあな。それはそうと二つ程確認しておきたいんだがいいか？」

「？」

「いいですよ」

「一つ目は帰る場所。ナブラート村に帰るなり修復するけど、村のやつらは全員いないだろ？」

「そのことでしたら、どの道一度『ニブル城下街』に戻ろと思いません。魔喰が出たので、両親に伝えようと思うので」

「そうか。だったら、俺が帰る時に一緒に送っていくから」

「ありがとうございます」

「いやいいって。二つ目はシェイド。お前に兄弟っている？」

「シェイド……」

「……構わないよ。ああ、いるさ。でも俺は…」

「『召喚魔獣』だっていうんだろ？」

「！？」

「お前、それをどこで！？」

「初めに気付いたのは俺が『他に誰か生存者はいるか?』って聞いた時に、お前は悩んでいた。あれはマリーナを自分の何なのか考えていたから。二回目は、祭壇にいた時、普通の悪魔なら分かる魔力の変動が分からなかったこと。魔獣なら自分の魔力の流れしか分からないからな」

「……流石だぜ。それでさっきの質問の答えだが、弟がいる。あいつはまだ誰とも契約していない『白紙の召喚獣』ノーブリストだ。今は行方不明になってるさ」

「そうか。シエイド、お前の召喚色は銀色か?」

「みでの通り銀色の髪、白い眼おまけに小柄と純正の銀色だよ」

「私が契約者になったのも、私の属性が光と水だからよ」

「……やっぱりか」

「やっぱり?」

「ああ、祭壇に行った時にマリーナから流れでてた魔力の一部がおかしな方向に流れてたからな」

「私の魔力が?」

「あの祭壇は悪魔の魔力を吸収するためにつくられた物、つまり『魔獣契約者』の力……君を封じるための物ってこと」

「話が見えねえな。それと俺の弟と何の関係が……」

「まだ分からない？簡単に言うと、あの祭壇は『魔獣契約者』を封じるための物なのにその魔力の一部がへんな方向に注がれるってこと」

「なんのために？」

「そこでさっきカメレオンを仕留める時に見つけたこの銀色の腕輪」

「！？そつ、それは！？」

「私の指輪と、同じ！？」

「多分、これはお前の弟だと思っ」

「そっか……。生きてたか……」

「この腕輪はお前が持っていたら？」

「いや、ゼレカ。あんたがこいつの主になってくれ」

「……いいのか？」

「あんたなら、こいつを悪いようにはしないだろ？」

「……分かった。じゃ、さっさと契約するか」

「……ありがとう」

シェイドが言ったことは気にしないでおく。

「『我、汝の力を求める者なり。血に刻まれし盟約に従い、顕現せよ。』

『

シュワシュワ

光を放ち、腕輪から何かが現れる。

「我が名は『アルフォート』。汝が……などと、今更だな。腕輪から先の顛末を観ていたので、大方の事情は掴めた」

「……フォート、もういなくなつたかと心配したぜ」

「私もです、兄上。再び出会えた事を感謝します」

「……良かった、良かったねシエイド！」

「ああ、これで俺の役目はマリーナと一緒にいることだけだ」

「我を呼び出し者よ。汝は我と契約するか？」

「当然だ」

「ならば名を」

「…俺の名はゼレカ」

「あい分かった。我が主、ゼレカよ」

シユン

「腕輪に戻つたな」

「外で活動しない時は違う形になる。それが俺達だ」

「なら、契約も終わったし城下街に戻るか」

「シエイド、指輪に戻つて。また城下街に着いたら呼ぶから」

「そうだったな。今はゼレカの魔力だから魔力を使えないな」

「……うん」

「分かった。……ゼレカ弟の事もマリーナの事もありがとな。感謝しても仕切れないぜ」

「俺は当然の事をしたただけだ。それに今生の別れってわけでもないだろ？」

「……ああ！じゃあな」

シユン

シェイドが消えた。

「じゃ、掴まってね」

「はい」

「テレポート」

城下街に跳んだ。

契約（後書き）

デ「いろいろとあれでしたね、前は」

ゼ「そういえばお前、前回いなかったな」

デ「最後ちらつと出てたけど」

ゼ「そうだったか？」

デ「そんなことより！次回はゼレカが修羅場を経験します。あっ、本編でね」

ゼ「さらつと犯行予告流すな」

デ「ゼレカとエレスさんの出会いを今日考えていたんですが、それは絶好のタイミングで書きたいと思います！！」

ゼ「あー、あれね。うんうん」

デ「後は補足で『人物&技&場所紹介』オリジナルも後書き風にやらないとなあ」

ゼ「どのタイミングで」

デ「考え中です」

ゼ「……ふう。明日は修羅場、か」

仕事の後の騒動・前編（前書き）

ヒヤッホー

………すみません、何かテンション高いです。

仕事の後の騒動・前編

「じゃあな。たまには城に……って、ガードが堅いな。こっちから行くかもしれない」

「はい！シエイドと二人で楽しみに待ってます」

城下街に着いたので、マリリーナと別れて城に戻る。

マリリーナの両親は二日前に違う街へ行ったから、連絡だけしてこの街へ残るらしい。

「さあーと、エレスにはれない内に帰るか」

俺が城を飛び出してから、まだ一時間も経っていないだからばれずに済むだろ。

ニブル城・自室

「『報告書』ナブラート村の陰』は多数の魔喰とダミ魔喰カメレオンによる事件であった。生存者は一名。全ての魔喰とダミ魔喰を浄化した後、生存者を城下街に避難させた』と、こんなもんかな」

生存者をマリリーナだけにしたのは、彼女の力を公にしない為。ばれるとイロイロ面倒なことがあるからだ。

「ソルに渡してくるか」

って、俺独り言多いなあ

玉座の間

「ソル、報告書を……ってあれ？居ない」

だったらエレスの部屋か？

エレスの部屋

コンコン

「エレス、居る？」

……静かだ

「……まさか……」

露天風呂

「……まさか……な」

ドアに手を掛けた

ガチャ

……スゲー静かだけど、服とかあるしなあ

コンコン

「二人とも居る？」

冷静に声をかけた様に見えるが、内心ドキドキもんだぜ。これが俺でなければ八つ裂きクラスの罰だ

「……………エレス？ソル？」

……………おかしい。話声どころか、水の動く音すらしない。

「……………」

意を決して扉をひく

カラカラ

バタン

「……………予想通り」

扉を開けて瞬時に中の様子をみたが、俺が予想した半分が当たっていた。

二人が俺だと気づき畏にはめられるパターン。

もう一つが……………今現実には起きてるパターン。

何があったって？……………二人とものぼせてる。

……………何はともあれ二人を介抱しなきゃな。

「クレ……」

クレアを予防としたが、止めた。

クレアは一度妄想にふけると止まらない癖がある。

……こんな状況で真面目だけど妄想癖が強い女使い魔呼んでみ？
リアルゲームオーバーになるさ。

「まいったな。この場所だと一番近くに居るのはクレアだしな……」

……

「……よっっ」

覚悟を決めて手ぬぐいを創った。

例によって例の如く目隠し用な。

カラカラ

魔力で探知して一人ずつ脱衣所に抱き抱えて連れてくる。

……抱き抱えてる途中、みよーに柔らかい何かに触れた気がする。

……スゲー罪悪感。一応主の為を思ってるんだけど

カラカラ

二人を脱衣所に抱き抱えてきた。

「後は……」

俺のお気に入りに入り魔法の一つである『瞬間装着』リメンチェックを発動する。

『瞬間装着』は服や鎧なんかを一瞬で着る魔法。
カシツカシツ

「ふう……」

二人に服を着せたので、目隠しをとる。

運よく服を畳んで置いてあったから助かった。

……そうじゃなかったら、服を『想像創造』で創らなきゃいけなかったぜ。

「……俺の部屋よりも、二人の部屋の法が良いよな」
何かって？ 運ぶ場所。

「よつと」

まず、ソルを背負ってからエレスを前に抱える（俗に言うお姫様抱っこ）。

テレポートを使わない理由？……魔力の減少。幾ら魔力が枯渴しいっても、あんだけ魔法使いや疲れるわな。

実際、テレポートは魔力を結構浪費するから。

……重さをほとんど感じない。エレスは普段から抱えたりしてるから知っているけど、ソルもほとんど重さを感じないなんて驚きだ。

そんなことを考えている内に部屋に着いた。

ギィ

エレスをベットに寝かせて、ソルも寝かせた。

「のぼせたんだっけ」

そう思っ

『氷解の粒』
アイスブロック

『風の抱擁』
ウインドイブレス

二つの魔法を威力を最小にして使っておいた。

この程度の魔法なら今の魔力でも十分まかなえる。

「……後は目が覚めるまで待ちますかね」

仕事の後の騒動・前編（後書き）

デ「へタレ」

ゼ「へタレたわけじゃない、忠誠心だ」

デ「あれをへタレと言わず何と言えと？」

ゼ「忠誠心と言え」

デ「……あくまでも忠誠心と言うか。ならば貴様の主に聞いてみよう。…ということでは、エレスさんどう思います？」

エ「ゼレカは今のままがいいと思う」

デ「おっと、今回は珍しく意見があわなかった」

エ「ゼレカが積極的になっちゃうと、『あのとき』みたいになるからね〜」

ゼ「／／／」

デ「……つまりエレスさんがゼレカのことを弄れなくなるのが嫌と」

エ「うん！だって『あのとき』は……」

ゼ「エっエレス！その話はその辺で……」

デ「ゼレカはさk…」

ゼ「罪深き魂を浄化する闇よ。今ここに列を成し滅亡の果ての梯となれ。『闇の道』ダークネスカペロ！」

デ「危ない危ない、逃げた方がいいな」

キシャー

エ「そんなに恥ずかしかったなんて……」

キシャー

デ「なんだこの蛇、追ってくるぞ!？」

ゼ「追えカペロ!」

キシャー

仕事の後の喜び（後編）（前書き）

前回とタイトルは違いますが、前回の続きです。

仕事の後の喜び（後編）

数十分程前

「ん……ソル、……ふぁ……何して……」

「何って、身体を隅々まで洗ってるだけよ？」

「それは……わかって……るけど……」

「ああ、エレス、なんて可愛いの」

「ふえっ！ソル待っ……」

『禁断の花畑中』

現在

「……………」

二人ともものぼせたまま起きないな

大体の予想はつくけど、何してたのかな？

「……ん、あれ？私」

「目が覚めた？ソル」

「ああ、ゼレカ。はい、起きましたよ」

「風呂場でのぼせてたけど何があった？」

答えは解りきってるけど一応聞いておく

「エレスを可愛いがってました」

「……………」

予想通りというか何と言うか…………

「報告書、机に置いておいたから」

「報告書？…………まさか、もう片付けたのですか！？」

「ああ」

「…………今更ですが、仕事が早いですね」

…………あれ？さっきから話してるけど、ソルがいつもと違う様な…………

「…………ゼレカ。一応聞いておきますが、私とエレスを部屋まで運んできたのって貴方ですよね？」

…………あれ？やっぱり怒ってる様な…………

「そうだけど…………！？ああ、そういう事が……………」

理解した

「理解が早くて助かります。それで？」

「……やばい……めっちゃオーラでてる……」

「もちろんの事ながら目隠しをしてました」

「………そうですか。まあ貴方ならそんな下劣なことはいしな
いと、信じてますので」

「当然。二人が意識を失ってる間にやましい事をするなんて、そん
な俺に反する事はしないさ」

「……心の底から思っていることだ」

「今日城下街で何をしたんですか？」

「ん？珍しいな、俺に聞くなんて」

「たまには貴方から話を聞いてみたいと思って」

今日城下街であったことをソルに話した

「………って具合かな」

「………やはり、貴方に聞くとエレスに聞いたのと同じまで違いま

すか

「？」

「いえ、エレスに聞いた話とはまた違ったように感じられましたので」

「……確かに。エレスは今日何を想っていたのか？、なんて考えてみたけど分からなかったよ」

「それはそ……」

チャリン

「……？」

「『エレスが渡した方が喜ぶだろ？』って言ったら、『ゼレカが渡して』って言われた」

「……」

「さっき話した俺のイヤリングとエレスのペンダントと同じデザインのアミュレットだよ。さっき渡そうと思ってたけど、時間がなかったから」

「……ありがとうございます」

「ふふっ、どう致しまして」

「……／／／」

「ふぁー、……あれ？ゼレカ？」

「あっ起きた？」

「うん」

「なら、風呂行ってくる」

「うん」

「まだ完全に起きたわけじゃないの？」

「うーんと、まだみたい」

「エレス、ならもう寝ましょ？」

「うん、そうする。お休みゼレカ、お休みソル」

「お休み、エレス」

「……じゃあ私も寝ますのでぐっぐっくと」

「ああ、お休み」

カチャン

……さっきのソル、とても嬉しそうだったな

あんなに喜んでもらえるなんて、あれを選んで良かった

「……風呂に入るか」

その言って風呂場に行く

仕事の後の喜び（後編）（後書き）

デ「はあ……はあ……」

ゼ「ちつ、カペロから逃げ切るとはな」

デ「当たり前だ……俺を誰だと……思っている？」

ゼ「まあいい、今度こそ終わりに……」

デ「頭上注意」

ゼ「は？」

バーシャン

零「………はあー!？」

デ「よう、零花」

零「はめられた……」

デ「次回の後書きは『零花ちゃん』でスタートな」

零「くっ………悔しいー!」

鏡の本音（前書き）

……ああ。シリアス&ダークになりました。

久々の真面目ルートです。

鏡の本音

「……………」

風呂から戻って自分の部屋のベッドに身体を投げ出した。

流石に寝る時はアルフォート……………銀の腕輪は外してる
腕に付けてるのに肌には触れず、宙に浮いてるが寝ずらい

「……………」

そんなことを……………考えて……………意識が…落ちた

『……………せ』

？

『「……………せ』

……………

『壊せー！』

……………

『全てをマモリタインダロ？ならカントンなはなシだ』

.....

『スベテ壊せばイイ』

.....

『オマエは弱い！！ソンなんでダレかヲ守れルと思つてンのか！！』

.....おい

『キニイラネエ奴、ムカつく奴、ハムカウ奴らそのスベテを無に帰すまでヤツザキにし口！！できねえナラ俺にやらせる！！』

.....ちっ、おい！！お前が誰だか知らねえが、俺のやり方に口だしてんじゃねえ！！』

『はっ、ようやくこたえタか。オマエが何と言おうガ、いつかは壊れるサダメなんだよ！！』

.....うるせえ！！俺の道は俺が決める！誰にも邪魔させねえ！！』

『.....クククっ、ハハハ、ハっハハハハ！！！！良くりカイしてんじゃねえか。その通りだ！！.....だから俺が何シテも大丈夫ダロ！！.....？』

.....何言つてやがる？

『その内会エるカもしれないナ！それまでオアズケだ！！』

…………… 今のは？

『おう、やっと来たか』

「…………… マムート」

『何してたんだ？』

「いや、俺にも分からない」

…………… ホントにな

『…………… まあいいか。それより、お前を呼んだのは《あれ》ができたからだ』

…………… 《あれ》？

『いいからいいから、とりあえず目つぶれ。あっ、右目だけでいいぞ』

「…………… わかったよ。…………… これでいいか？」

『えいつ』

！？

「ぐああああ ああー！！！？？」

なっ何だ！？目がえぐり出された、痛み！

「はあ……………はあ……………」

少しは、治まった、か？

『《夢幻の眼》。いれといたからな』

「はあ……………はあ……………、それなら……………こんな…痛みがあるって……………先に
言えよ」

『てへっ　そこはお前が聞かなかったから』

……………自称神め

『自称じゃなくて、本物の神だぜ』

どっちでも同じだ

「……………でも、ありがとな」

『……………気にするな』

……………

「もう用事ないだろ。なければ目覚めるけど」

『使い方は……………分かるよな。おう、もういいぞ』

「じゃあな」

フユン

『……おいゼレカ。あんまり自分を追い込むな』

『……キトッ』

鏡の本音（後書き）

零「はぁーい、零花です！皆さん、楽しんでくださいね！零花との、お約束ですう」

デ「……………」

エ「ワハア／＼／／」

デ「……………ギャップの差がありすぎる。さっきの今だもんなー」

零「うるせえ！！これやんなきゃ更に《幼児化》だって言ったのはお前だろ！」

デ「いやー、さっきまで『スプラッタな死を望むか？』なんて言っ
て、槍と刀持って追いかけられた後だもんな」

零「なんなら今からでも再開してやろうか？」

デ「丁重にお断りします」

エ「……………」

零「どうした？エレス」

エ「零花ちゃんが……………私にそんなことされてるなんて」

デ「ありや、完全に自分の世界に入ってる」

零「……………命の危険を感じる気がする」

エ「……………あれ？私に弄られてた零花ちゃんは？」

デ「こちらに」

エ「なんだ、そこにいたの」

零「エレスに忠誠を誓ったのは《ゼレカ》であって《零花》じゃないから、逃げろー！」

エ「私から逃げきられると思っているの？」

零「くそっ、何時になったら元に戻るんだ!？」

特殊な日（前書き）

暑いです!!

自分の部屋で窓を閉め切って執筆しています。

特殊な日

「……………あつ？」

……………右目に違和感を覚えた
触ってみる

「……………血？」

多分、《夢幻の眼》のせいだろ

「……………まあいいか」

右目の血を拭って、身体を起こす

「……………今日はなにがあるかな」

ガチャ

扉を開けて足早に玉座の間に向かった

玉座の間

「おはよう、エレス」

「おはよう、ゼレカ」

「……………ソルの姿がないけど？」

「ソルならまだ寝てる」

「へえー、珍しい事もあるもんだな」

「ねっ。それよりぜ……」

キュルルル

「……………」

「／／／」

「……………そうか。そういえば今日は城の皆は里帰りだったな。一昨日
隊の奴がいつてたな」

「／／／……………そっ、それで、だから……………」

「ふふっ、じゃあ何か作るっか？」

(コクン)

キッチン

「なにが食べたい？」

「ゼレカが作れる物ならなんでもいいよ」

「つつても、基本俺はなんでも作れるからな……………よしっ、前作っ

た時にエレスが好きって言った《サンドイッチ》と《ポトフ》にする？」

「うん！！」

俺は食材を『創造』して調理に取り掛かる

普通に生活してた時は自炊だったから、調理はできる方だ

最も、此処の食材は見たことがない物ばかりだから最初は戸惑ったな……

そうこうしている内に出来上がりだ

「ほい完成っ」と

……えっ？ポトフを作るのに、そんな短時間じゃできないって？

『速出』を使ったのさ

この魔法は……ああまた今度説明するな

「ねえ、せっかくだからバルコニーで食べようよ〜」

「そうだな。たまにはそうゆうのもいいな」

一応念の為にソルに書き置きしておこう

それから料理をバルコニーに運ぶ

バルコニー

「いい眺めだな」

「たまに仕事中心でみるけど、やっぱりきれいだねえ」

「此処から見える景色は城下街とは真逆の方をむいていて、『贖罪の山』と『嘆きの川』、『沈黙の平野』の全てを一望できる」

そのスケールは地上では見れないようなスケールだ

キュルルル

「あつごめんごめん。お腹空いたよね」

「昨日の夜からなにもたべてないもん」

昨日はあのまま寝てたみたいだから、よっぽど空腹らしい

『いただきます』

二人で少し早い『昼食』を食べる

「ん〜、おいしいー!」

早速エレスはサンドイッチを食べている

中身はトマト・タマゴ・ハムときゅうりにした

「ふふっ、なら良かった」

「やっぱり、はむっ、ゼレカの料理も、こくんっ、おいしいねー!」

「わかったから口の中のもん全部食べてから話しなよ」

「むぐつ、いつもみんなが作ってくれるのと、ゼレカが作ってくれるのってなにが違うの?」

「んー、材料だと思う。俺はいつも想像したのを使っているから」

「たしかに、ここにはないものばかりだね」

「下界で暮らしてた時にあった食材だしな。魔界にはなくて当然だ」

「ふ〜ん」

あれっ、俺のカコバナよりも料理に夢中ですか

「はいゼレカ、あ〜んしてっ」

……………突然のむちゃぶりですね

「自分で食つから……」

シューー!!!!!!

「……………」

スプーンが消し飛んだ!!

「ごっめ〜ん、むりやりにでも食べさせたかったから〜」

ちよつとでも動いてたら俺が消し飛んだな

「それならそうと早く言えば良かったのに」

俺は躊躇なく差し出されたスプーンを口にくわえた

「ふふふ、恋人どうしみたい」

「それは光栄な事ですよ」

……少しばかり魔が差したのでからかってみる

「む、また意地悪なこといってえ」

「ごめんごめん」

「じゃあ罰として、はいっ」

スプーンを差し出された

俺はそれを受け取り、さっきされたことをエレスにした

「はいっ、あーん」

「はむっ」

……それから食べ終わるまで交代でそれをし続けた

特殊な日（後書き）

デ「よかったなゼレカ」

ゼ「漸く元の身体に戻れたからな」

デ「いや、そっちもあるけどもうひとつの方」

ゼ「もうひとつ?」

デ「ホントはエレスの罰が『口移しで』ってことにする予定だったんだけどな」

ゼ「何故変えた!」

デ「次の話と内容微妙にかぶるかなって思ったから」

ゼ「じゃあ次回はそういう話なんだな!」

デ「そうしようと思う」

ゼ「そうゆうことなら今回、これで終わるぞ!」

デ「ちょっと、待つt…」

Sな彼女とNな俺（前書き）

S……サディストの略

M……マゾヒストの略

N……ノーマルの略

だから何だってことですよね……

Sな彼女とNな俺

やあ、俺は今とんでもない状況にあるんだぜ

どんな状況かって？

自室のベッドで横になって、エレスが俺の上に座ってるって感じだ

えっ？

………おいおいアルフォート。きじょーいなんて言うんじゃないよ

考えないようにしてたんだから

そもそも何でこんな状況になったかっていうと………

ついさっき

「ゼレカ、弄られて」

「わお、大胆発言」

「最近弄られてくれてないじゃん」

「確かにな。こっちに来た当初は………毎日弄られてたな」

「でも最近、逆に私が意地悪されてる」

「はははっ、いやだなあ。意地悪なんてしてないよー」

「だから、ねっ?」

「まあ、そのうちな」

「……………」
『我が身に刻まれし魔王の力。我が呼びかけに応え、その力解放せよ。』
『魔王化!』

ヒュン!!

「……………えっ?」

「はい、捕獲完了」

「捕まっちゃたー」

「何処がいい?」

「自室」

「……………まるつきり抵抗しないね」

「もうこうなったら抜け出すのは俺でも至難の技だからね」

てくてく

ガチャ

ぼすん

ドサッ

今

ってわけだ

「久しぶりにゼレカを弄れる」

「久しぶりの光景だな」

「ゼレカ、どんな気分？」

「なんか微妙に動悸がしてる」

あれ？俺ってM？

クチュ

エレスが口を重ねてきた

もちろん抵抗はできない、というよりしない

ひっしになっているエレスの顔を見てるのが好きだから

「クチュ……ハアッ……ジュル……ん！？」

舌を入れた

抵抗……ではないけど、彼女の仕草をみてたら無意識にした」

「ヒュル……ジュル……クチャ……」

「ハツ……ひゃっ……んん!!」

……やばい、歯止めがきかなくなってる

そして徐に拘束を解いて、エレスと俺の位置を変えた

「ひゃあー!!」

「ごめんエレス。そろそろ限界かも」

「……む。やっぱりこうなった」

「はははっ。俺、Sなのかな？」

Mだと思ってたけど

「むにゅ、それだと私とおなじ」

「多分大丈夫。自分ではNだと自負してるから」

「私のこんな姿見て楽しんでるのにぶつつなわけないでしょー!」

「さあエレス、楽にして」

「ノノノきつ、気持ち良くしてよ」

『自主規制』に発展中

Sな彼女とNな俺（後書き）

デ「最初に補足、今回の話は前回の話の次の日です」

エ「最初はうまくいくとおもったのに」

デ「『魔王化』までしたのに残念でしたね」

エ「デインさん！どうかしてゼレカをいたため……コホン、いじめられませんか？」

デ「押し倒すところまでは良かったけど、そのあとがなあ……よし、なら力を抑える薬品でも作るか」

エ「ホントですか！ぜひお願いします！」

デ「おまかせ下さい」

エ「ふふっ、これでゼレカを……ふふふ」

ゼレカの部屋

ゾワッ

ゼ「なっ何だ！？今の！」

抑えない衝動・小さな優しさ（前書き）

今日は疲れました。

なので話を考える暇がなかったので突然思いついた話です。

……そろそろ重要な話を書こうかな。

抑えない衝動・小さな優しさ

「覚悟しろ！魔王」

「今日がお前の命日だ！」

「倒させてもらう！」

「……………はぁーあ、面倒だ」

今俺は勇者達に囲まれている

街の皆に被害が及ばないように、街から数十？離れた場所に、まあ自分から跳んだわけだ

……………俺の見立てでは、おそらく勇者が三人いる

その勇者一人に三人程の仲間がいるから合計十二人だ
「どうした、怖じけづいたか！」

「今更後悔しても遅い！」

「滅びるがいい！」

「……………最初に言っておくが、俺は魔王じゃないぜ」
事実だ。俺は『魔神』ではあるが、『魔王』じゃない
魔王は……………というよりも、魔王姫はエレスだ

「なに！？？」

「魔王じゃないだと？」

「こいつじゃなかったのか！」

……うん、そろそろこの話し方がうざったくなくなってきた

「……貴様等、死にたくなければ下界に帰って二度魔界に来るな。」

「誰が帰るもんk……」

「忠告はしたからな？」

右手に剣を、左手に銃を創造した

剣は両刃、銃はマグナムを想像

パン!

「なっ！」

銃の引き金を引いた

……目の前が赤くそまる

「わあー!?!」

今ので一人

「後、十一人」

剣を近くの奴の右足目掛けて滑らせる

スパンッ

「え？」

そいつの右足が落ちる

赤い飛沫と白い石の様な何かが見えた

「はぁー！」

ザクッ

後ろから向かってきた奴の首に剣の先端を向けておいた

パン

先程の右足のない奴に向けて引き金を引く

「後、九人」

「くそつ、魔王は女だって聞いてたから倒したら俺の……」

チッ

後ろでウザったい事を呟いたゲスの左手を切り落とす

「あつ……ああ！」

次に左足を、右手、右足、喉、頭、腹……原型を留めなくなるまで
グチャグチャに切り刻んだ

「イラツクんだよ」

溜まったイラツキを晴らすべく、剣と銃をしまう

「魔力よ。『深淵の槍』」
アビスノロランス

闇と風の魔力を帯びた槍をだした

魔力を武器の形にしただけの技だ

それを……回転させて……跳んだ

「ぎゃあー!」

「ぐわあ!」

「……」

不思議な気分だ

目の前には血の雨、肉塊、白骨が飛び散ってる

のに、どうして俺は……

『フジッテいるんだロウ』

……何だ？自分じゃない自分に支配されるこの感覚は

……

「はっ!?!」

気がついたら周りは赤い水溜まり

勇者一行もいない

「……………やりすぎだな」

「はぁ……………はぁ……………」

目線の下から呼吸が聞こえる

「……………」

「ひっ!?!」

さっきの勇者の仲間かな?

そういえば金髪の女の子がいたな……………

「どうした?」

少しだけ威厳のある声をだす

「(がたがたがた)」

怖がらせ過ぎだな……………

全く、さっきはどうかしてたぜ

「いや、そこまで怖がらなくても……」

いつもの話し方に戻した

「はぁ……ん……」

ありやりや、ホントにやり過ぎたか

「どうやらお前が最後の一人みたいだな。なに、今更どうもしねえよ。帰るなら帰ってもいいさ」

「わたし……しは、貴方に……負けた。どうされても……構わない」

……度胸はないけど、流儀はあるな

「なら下界に戻れ」

「それはできない！アレク達が戻らないで私だけなんて！」

……今少しだけびびった

まさかここまで芯があるなんて……

「……ならば、俺に逆らわないというわけだな？」

「それが私の流儀だから」

「わかったよ。……だったら俺が無理矢理でも下界に帰してやる」

「だから……」

「まあ待て。俺の遊びに付き合ってもらってからだ」
「遊び？」

下界・パレスト王国

「勇者達はどつしてゐるだらうな？」

「王よ、勇者達を信じましょう」

「……その問い掛けだが、俺が答えてやる」

「！？」

空間が歪む

「ふははは！久しぶりだな、パレスト王」

「ぜ、ゼレカ！」

「相変わらず勇者制度があるなんてな」

「き、貴様！何しに来た」

「このイケニエとしては役立たずの少女を帰しに来た」

「す、ステイ！」

「……」

「こいつには傷を癒してもらったからな。その礼にこうして来たわけだ」

「他の者達は！」

「俺が喰らってやった」

「……」

「それと一つ言っておいてやる、ゲス王。その少女に手を出したら、俺がこの国をぶっこわすからな」

「なに……」

「たとえその少女が奴隷だとしても、だ」

「わ、わかった」

「じゃあな、スティ」

「……じゃあ」

ぼそっ

(アレク、な。蘇らせておいたから。多分城の外にいる)

「……」

「さらばだ、人間の小娘よ」

「ゼレカ……ありがとう!!」

ブユン

空間を歪ませて魔界に戻った

抑えない衝動・小さな優しさ（後書き）

デ「完成ー！！」

エ「できたんですか！」

デ「思いの外早くできたよ」

エ「わあ〜うれしいですー！！」

デ「効果時間は一時間だから、飲ませたら一時間は好き勝手し放題ですよ」

エ「一時間か〜、それだけあれば……」

デ「無味無臭無香料という、どう飲ませてもばれないスグレモノ」

エ「じゃあ紅茶にいれてもばれないの？」

デ「もちろん」

エ「なら、ゼレカが帰ってきたらさりげなくお茶にさそってのませよう」

デ「これならゼレカでも動けまい」

エ「デインさん、ありがとございますー！」

デ「いやいや、それよりもがんばってね」

H 「 185 - 1 」

密談（前書き）

前話のゼレカとステイの会話です。

三十話まで更新できたら、タイトル変えるかもです。

密談

「改めて名乗っておくが、俺はゼレカ」

「わ、私はステイ」

「君の服装やさっきの奴の紋様をみるかぎり、君はパレスト王国の人間だろ？」

「……………ええ、噂には聞いてたけど、貴方が『幻惑の大魔』なの？」

「へえ、そっちじゃそう呼ばれてるのか。確かに一度パレストへ単独で攻め行ったこともあったな。その時に誰かが『幻惑の大魔』なんて言ってたっけ」

「前って、『降伏戦争』！？」

「いや、名前までは知らないけど」

「城に攻めてきた悪魔に負けた戦いのこと。……………確か数は一人」

「多分、それ俺」

「……………何で……………」

「あれはパレスト王が先に仕掛けてきた戦争だ。俺達は何もしてないぜ？」

「でも！悪魔が大量に攻めてきた！人も沢山亡くなった！」

「今俺と戦った時に、勇者は何人いた？」

「……アレク含めて三人」

「その三人は全員パレストの勇者？」

「そんなわけ……あつ」

「理解してくれたみたいだな。悪魔が攻めてきても、それは別世界の魔界」

「私達が違う人間界から来たように」

「だから、俺達は何もしてない」

「そんな……じゃあ、アレクは……」

「……アレクって、さっきの白髪の勇者？」

「うん……」

「俺がグチャグチャにした奴も君達のパーティー？」

「そうだよ」

「……じゃあ最後に一つだけ」

「？」

「君は奴隷でしょ」

「！？」

「その反応、やっぱりか……」

「どうして……それを？」

「……ここからはきな臭い話になるけど、パレスト王国の勇者制度は魔界の王……つまり、魔王のイケニエの為の制度なんだ」

「嘘!？」

「残念ながら現実。だいたいのイケニエは男女一人ずつ。あとは見張りが一人の三人のパーティってわけ。だいたい、魔王を倒すのに三人なんてふざけた話だ」

「……」

「毎回そのイケニエは、地位的に邪魔な奴、死んでも困らない奴、命令をきかない奴なんて具合に選ばれる」

「……」

「だから勇者制度がある国……勇者に関する法律が徹底してる国は、イケニエの為の勇者が存在するんだ」

「……じゃあ、アレクは地位的に邪魔だったってこと……」

「そのアレクって、奴隷廃止とか言ってた？」

「うん、『奴隷制度は廃止しなければならない!』って言った」

「パレスト王は奴隷がいなくなるのを恐れてたから、邪魔だと判断したんだろ」

「……そんな……アレクは、私の為に……」

「……」

「アレク……私……うわぁーん!!」

30分後

「……落ち着いた?」

「……うん、ごめんなさい」

「謝る必要なんてないよ。……」「ついでつのは慣れてるから」

「……」

「よしっ、そろそろ下界に行くか」

「……私……」

「大丈夫、あの王は俺をなにより恐れてるから。少し脅かせば絶対に安全になるよ」

「……ゼレカ」

「ほら、行くよっ」

「……うん」

……蘇らせておいてやるか、あいつ

ふふっ、俺は魔神が似合ってないな

密談（後書き）

デ「今日はエレスさんもゼレカもいないから、新しいゲストをお呼びしてます。では初めに、ソルーティアさん！」

ソ「よろしくお願いします」

デ「そしてゼレカの契約魔獣、アルフォート！」

ア「よろしく頼む」

ソ「貴方がデインさんでしたか。エレスからたまに聞いてます」

ア「主が溜息混じりに、おぬしの名を呟いてたぞ」

デ「ということは、だいたいは俺のことを知ってるってことで良いみたいだな」

ソ「あのーデインさん。ここはどういった場所です？」

デ「後書きですね。普段とはまた違った場所ですので、自由にどうぞ」

ア「デイン殿、一つ言いたいことがあるのだが」

デ「はい？」

ア「我はまだ本編では一回しか登場してないぞ」

ソ「ですが私とは面識ありますよね？」

ア「うむ。ソルーティア殿とは、主が我を召喚した時にな」

デ「ああ、そうか。その話は書いてなかったから、今のままじゃ二人は会ってないことになるのか。でも会ったことがあるから本編でもそんな感じで」

ソ「私からも一つ言わせていただきたいのですが」

デ「どうぞどうぞ」

ソ「私もメインヒロインの一人なのに、出番が少ないってどういう事ですか!」

デ「ああ……、確かに基本ゼレカはエレスとラブってることが多いな」

ソ「フラグ立てても回収しきれないかもしれないじゃないですか」

デ「まあ、いざとなったら『後書き』がありますからそれで解決していきましょう」

ソ「それなら構いませんけど……」

デ「では文字数も稼げたことだし、また次話で!」

ほのぼのな午後（前書き）

中間テスト中なので、あまり長くはできませんが更新します。

ほのぼのな午後

「はあー、疲れた」

「あ、ゼレカ。もう終わったの？」

「うん。久しぶりに下界まで行ってきたけどね」

「下界って、どこの？」

「パレスト王国」

「パレスト？きいたことないなあ」

「俺も二回しか行ってないよ」

「ふん」

「……それよりもエレス。あとのくらいどうしてるつもり？」

「あっ、もうきづいちゃった？」

「気付くもなにも、いきなり目隠しされて横にならされたら嫌でも気付くだろ」

「話してるすきにすれば、ばれないかなって」

「……いや、目隠しはすぐわかるよ」

「もうとっってもいいよ」

「うん、とろつとは思っただけど……頭に柔らかい感触があるのは何で？」

「とっってみれば解るよ」

「……………」

目元に手をのばす

シュル

「あっ」

「えへへ、気分はどう？」

「／／成る程、そういうことか」

俺の目の前にエレスの顔がある

柔らかいと思っただのは膝枕されてるからだった

「とても気分が良いよ。このまま寝てもいいなーってぐらいに」

「ふふふ、いいよ。休んでも」

「なら、お言葉に甘えて少しだけ寝かせてもらおうかな」

「ゆっくりでいいよ、ゼレカ」

「そうは……言っても……」
そのまま意識が薄れていった

ほのぼのな午後（後書き）

デ「……………」

ゼ「起きろ」

パコッ

デ「！！何だ何だ、事件か！？」

ゼ「……………」

デ「なんだゼレカか。脅かしやがって」

ゼ「どんだけ寝てんだよ。昨日はソルとアルフォートと別れてから
ずっとだろ」

デ「昨日縛られてた奴よりはましだと思っぞ」

ゼ「……………もう一度寝てる」

パコッ

デ「イタッー！」

物忘れの日（前書き）

まだ中間テスト中です。

物忘れの日

「はははっ、ちょっ、くすぐったいって！」

コロコロ

「はははっ、ははは、そんなじゃれるなよ」

コロコロ

「……主よ。何故このような事をしているのだ？」

「……うん、俺も何してんだか分からない」

アルフォートを召喚してじゃれてた

「何となくアルフォートを召喚してみようと思って」

「それは構わないが、急ぎの用事では無いのかな？」

「ああ、何となく喚んだだけ」

「ならゆっくりすればいいのではないか？」

「……それもそうだな。じゃあエレスのところにいくのかな」

「確か『主の主』、だな」

「うん、お前から見たらそうだな」

アルフォートの表現が面白かった

……堅苦しい喋り方なのに、天然なのか何なのかギャグセンスがあるな

そんなこと考えてるとアルフォートがいないことに気付いた

「アルフォート？」

「呼んだか、主」

「ああー、上か」

歩いてたから後ろにいてると思ってただけだな

「後ろにいてると思ったから呼んだだけだ」

「そうか」

カツカツ

玉座の間……じゃなく、エレスとソルの部屋に着た

「ん……」

「ゼレカ〜！」

「おっと」

ノックする前に扉が空いた

「俺だと分かったのは？」

「わかるよ〜、ゼレカだもん」

「……………」

「あっ」

「ん？ああ、こいつは俺が契約した契約魔獣のアルフォート」

「初めて御目にかかる、主の主よ。我の名はアルフォート、以後御見知りおきを」

「私はエレスナーグ。よろしく」

「そういえばエレスにはまだ会わせて無かったね」

「私にはって、ソルにはあわせたの？」

「報告がてら紹介したからな」

「……………ソルの反応どうだった？」

「？別に普通だったけど」

「ソルってああ見えてかわいいもの好きだから……………」

「ふむ、それでソル―ティア殿が我に触るとしてたのか」

「そうだった？」

「うむ」

「……………全く気付かなかった」

「ねえゼレカ、空撃隊の皆がさがしてたよ」

「……そういえばそうだった気が……」

「だから先程『急ぎの用事は』と聞いたのだ」

「おいー！アルフォート！わかってたんなら言えよ！」

「ふふふ、主の記憶力を試したのだ」

「いや、それは言えよ！じゃあエレス、会議が終わったらな」

「……会議？ああっ！そうだ、城の会議忘れてた！」

「人のこと言え無いけど、忘れるなよ」

「じつ、じゃあ後でね！」

「ああ！」

空撃隊の隊舎に（急いで）行く

物忘れの日（後書き）

デ「嫌——！！！」

ゼ「どうした？突然」

デ「予約注文したら、日にちが『6月6日』で金額が『6666円』
だったんだよ！」

ゼ「わおー、不吉」

デ「しかも今日はよく物落とすし、シャー芯折りまくるし、傘折れ
るし散々だぜ！」

ゼ「……お疲れです」

デ「リアルでこういう事があるとまいるねー」

ゼ「はははっ！日頃の行いだろ」

デ「やだなあー」

報告&自己紹介(前書き)

やあー、一気に内容が思い付いたので一気に書きます。

報告&自己紹介

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………」

今俺は全力で走ってる

「はぁ……………たつく、何で空撃部隊舎がこんなに遠いんだよ！」

玉座の間から隊舎まで遠いっいたらありゃしない

「だぁー、つとー！」

ガチャ ドンツ！

「セーフ！じゃないよな？」

「ゼレカ！遅い！」

「いや、悪い忘れてた」

「忘れてた？だから集合十分前には来てろって言ったでしょ！」

「そんな怒るなって、メフィスト」

「……………それにしたって遅かっぞ、隊長」

「おう、ベルゼブ。待たせたな」

「……………全く、あんたはいつもそうだ」

「そういつなって……って、アスタノトは？」

『……………』

「？」

「ドーンー!!」

「グヘッ!」

「全く、遅いですよゼレカさん」

「……アスタノト、何で上からおちてきた？」

「細かい事は気にしちゃいけないですよー」

「とりあえず降りろ」

「このままでもいいんじゃないんですか？」

「このままじゃ、なんも出来ないだろ」

「ちえー」

「ふう、皆……………あれ？いつも一番早く来てる善の奴がいないな」

「え？」

「そついえばいいですね」

「……………俺の後ろのソファーを見てみな」

ヒヨイ

「アラクネ、ゼレカ来たよ」

「すっ、すっ」

「ア〜ラク〜ク〜ネ」

「すっ、すっ」

「……………起きないと思うぞ」

「アラクネさん、三十分遅れの定例会はじめますよ」
「ぐっ」

アスタノトめ、何気に痛い一言を

「……………アラクネ、隊長が三十分遅れで来たぞ」

「はう」

ベルゼブ、便乗するな

「アラクネ、早く起きないと一時間遅れになるよ」

「ぐはっ」

メフィスト……………

「真に申し訳ございませんでした」

「すっ、すっ」

「……起きないな」

「しゃーあない、ゼレカが起こしてあげて。もちろんいつもみたい
に」

「マジでー」

「遅れたんですから、そのぐらいはアラクネさんにしないと」

「……隊長」

「くっ、分かったよ！やればいいんだな、やれば！」
『うんうん』

「……」

俺はアラクネが寝ているソファーに近づく

そしてアラクネの耳元で

「アラクネ。いつまで寝てるんだ？俺が来たのに」
そう呟いた、瞬間

「うん……ゼレカ？来てたの？」

……目覚めるの早くないですか？

「やっぱりゼレカね」

「流石ですゼレカさん」

「……………タラシ」

「今聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだが？」

「ふぁー、定例会始めるの？」

「……………まあ今はいいか。じゃあ皆揃ったことだし、定例会始めるか」

それぞれ自分の席に着く

俺はボードの前

メフィストはアスタノトの隣で扉の前

アスタノトはベルゼブの正面で棚の前

ベルゼブはアラクネの隣でソファーの前

アラクネはメフィストの正面でベッドの前

がそれぞれの席だとこいつでもソファー

「いやぁー、黒い扉に緑と黄色のソファーなんていかにもって感じだな」

「何言ってるのゼレカ？」

「久しぶりに来たからな」

「久しぶりって言っても四日前に私に会いに来たよね？」

「おい、アラクネ。それはお前の夢だ」

「そうだっけ？いや、でも……………」

「アラクネが自分の世界に入ったけど話しを始めるか」

「……………話し、か」

「いつも何にも変わりませんね」

「『定例会』だから変わらなくてもいいだろ」

「んー、おかしいな。ゼレカが私に……………」

「アラクネ、そろそろ話しに参加しような」

「？まあいいわ、今私の目の前にいるんだもん」

「はぁ……………全く、アラクネといいクレアといい、どうして『うつら妄想癖』が強いんだろうな」

「それはそうとして、何すんの？」

「ああ、んー……………じゃあ最近何してた？」

「私は自分の魔界に行ったりしてたわ」

「私はお昼寝してました」

「……俺はギルドの仕事をやってた」

「……一応言っておくが、皆『魔王』だ」

「自分の魔界……メフィストは別として、の仕事しろよ」

「レイレイに任せてあるから大丈夫」

「……同じく」

「全く、兄妹揃って怠けやがって」

「ベルお兄ちゃんが敵さん全滅させてたから平気だよ」

「……ふっ、若気の至りだ」

「はいはいそうだったな」

「ゼレカ、私は人助けしてた」

「人助け？ちなみにどんなことを？」

「下界に行つて悪さしてる雑魚悪魔を倒してた」

「へえー、珍しいな」

「ゼレカが、『悪さしてる奴らは暇だったら倒しておいて』って言ったから」

……雑魚って、アラクネに頼んだのは魔人じゃなかったか？

「ああー、そんなことも言ってたな」

「ところであんたは何してたの？」

「俺は……いろいろやってたな」

「いろいろ〜って？」

「勇者全滅させたり、洗脳魔物を浄化させたり、ナブライトまで行ったり大変だったぜ」

「流石ゼレカさん」

「あっ……そうだ。契約したから紹介しとくな」

「……契約までしたのか」

「ナブライトの時にな、『契約者の……』」

「詠唱しなくても喚べるよね？」

「………できるけど、できるけどさー」

「どうしたの、ゼレカ？」

「………なんでもない。いでよ、アルフォート！」

「………さつきから居たぞ、主」

………忘れてた

まだ還してなかったんだ

「へえー」

「わあー！」

「……」

「銀色の魔獣」

「こいつが俺が契約した契約魔獣のアルフォート」

「お見知りおきを」

「皆、とりあえず自己紹介してやってくれ」

「私はメフィスト。魔界『ゲノムルーツ』の魔王よ。ゼレカに助け
てもらってから、ここに居るの」

うんうん、必要なこと全部言ってくれたな

「私はアスタノト。『リリードネメス』の魔王姫。よろしくね」

「……ベルゼブだ。別に覚えなくてもいい」

おい、兄貴！アスタノトはちゃんと自己紹介したのに、なんでお前は手短かだ！

「ベル兄ちゃんはメフィストと付き合ってるんだよ」

「！……アスタノト、それは言わなくてもいい」

「あら、別に隠す事も無いでしょ？」

「メフィスト……少しは恥じらいをだな……」

はっはっは、ざまあ！

「私はアラクネ。人間と魔王のハーフよ。一応は『ケルムノイド』の魔王だけど……ゼレカについてきたの」

「基本、俺がどうこう言ってるけど、俺じゃなくても大丈夫だからな」

「でもー、今はゼレカがいいの」

「『今は』、な。俺はエレスに仕えてる『魔王の騎士』なんだから付き合ったりなんなりできないぞ？」

「大丈夫 それまでにどうにかするから」

「どうにかって……」

「……だから、お前は」

「ベルゼブ、意識しすぎ」

「メフィスト、もっと言っつてやれ」

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……要するに、騒がしい部隊と言っことなんだな。主よ？」

報告&自己紹介(後書き)

(会議中)

エ「じゃあ今から会議をはじめー!」

ソ「では今回はフルエさんの意見を考査しようと思いますので、フルエさんどうぞ」

フ「はっはい!えーっと、最近の報告のかにん、じゃなくって確認ですが今のところ表だった異常報告はありませんので、大丈夫だとおもっ思います!」

エ「かみかみだねフルエ」

フ「すすすみません」

ソ「確かに、報告としては何かあったという報告はありませんね。それでは…」

エ「会議おわり〜。みんなできゅうけいしよう」

『はいっ!』

ソ「本日も平和な会議ですね」

悪戯夢 終焉の始まり (前書き)

今回の話はこれからのシリラスシーンに深く関わってきます。

悪戯夢 終焉の始まり

「おはよう、零花」

「おう、。今日何かあったっけ？」

「忘れたの？二時限目科学のテストだよ」

「げっ、やべえ。何もやってない」

「そんなこと言って零花はいつも高得点じゃん」

「は勉強してるわりに点数低いよな」

「むっ、そんなことないよ！」

「じゃあ今日のテストで、点数が高い方が低い方の言うことを一つだけきくってというのは？」

「やっぱり自信あるじゃん」

「全く勉強してないからハンデにはなるだろ」

「ふっふっふ、予想通り！ から今日の範囲は教えてもらったのだー！」

「ええ！ から！？……やばいな……」

「今日のテストが楽しみだわ」

ドンッ

「おーす、零花。」

「かよ。おどかすな」

「おはよう、」

「ん〜？『おどかすな』？何があったのか白状しろ」
「別になんもないって。ただ かつ思ったから」

「と何かあったの？」

「との話を聞かれたかと思って」

「ほほう？聞かれたらまずい話なのかね？」

「んなんじゃねえよ。……って、後5分じゃねえか！」

「マジか！」

「走るぞ、、」

「ちよっ、待ってよ零花」

「零花、に頼まれた物持ってきたか？」
「ああ、『プレイン
グラフィックエバー』なんてマニアックなゲームやりたがるなんて、
も変わってるよな」

「それを持ってるお前もどっかと思っぞ」

「二人とも、足、早いよー」

「おっと、わるいわるい。」

「も見た目はスポーツ得意そうなんだけどな」
「そんなこと言ったって」
チャンチャン チャンチャン テテロテローリ
「うん？」

ピッ

「零花ではありませんよ」

「いや、零花の携帯に掛けて零花の声で違っって言われても」

「それで 何の用だ」

「今家に居るんだけど、今日何かあったっけ？」

「呑気だなーおい！後二分で始まるぞ」

「はえ？後十五分はあるけど？」

「え？……あつ、ホントだ。腕時計くるってた」

「まあいいんじゃない？早く着くぶんには」

「確かにな。今日は科学の……って、お前はバリバリの理系だから大丈夫か」

「あーそついえばあるって言ってたな」

「ほんじゃあ」

「待った！……あれは持ってきたらうな？」

「ああ

「じゃあーな」

ピッ

「おい、零花！何スピード落としてんだ」

「ああ、腕時計がくるってた」

「え！？なんだ〜！」

「うっかり者め」

「はははー。まあゆっくり行こうぜ」

「走らせといてよくいうぜ」

「はあ、はあ」

「大丈夫か？」

「ちょっと、休ま、せて」

「……………ホント体力無いな」

「陸上のエースの　と比べたら仕方ないだろ」

「その俺に着いてくるお前も相当だけだな」

「ふっ、二人とも早いよ」

「落ち着いた？」

「うん、ほとんどは、落ち着いた」

「じゃあ行きますか」

『アト三日ダゼ』

「……………」

夢か……………」

「随分懐かしい夢だな」

……………確かアスタノトが『魔王化』してメフィストと一緒にベルゼブ
を追いかけてたのを收拾したんだっとな

「……………風呂」

そうだった、それで疲れて風呂入ってなかった

「よっと」

着替えを持って風呂場に行く

悪戯夢 終焉の始まり (後書き)

デ「……ヤッホー!!」

ゼ「どうした馬鹿作者？」

デ「はっはっは！久しぶりの登場だぜ！」

ゼ「……そういえばそうだったな」

デ「そろそろ全体的な話を進めようかなー」

ゼ「あのシーンをやるのか」

デ「心機一転、タイトルも変えようと思った」

ゼ「話を進める時に変えればいいだろ」

デ「じゃあ『吸血魔王と赤血魔神』にかえる」

ゼ「………というわけで、『吸血魔王』とりあえずチートで。」

で検索してでなければ『吸血魔王と赤血魔神』になってるかもしれないので、ご了承下さい」

デ「でもまだ変えませんよー」

悪戯夢 決別・目的 (前書き)

何か無駄に続いてますが、この話が連続するわけではありませんよ。

悪戯夢 決別・目的

ポチャ

「……………」

………なんであんな夢を見たんだろ

………もうとっくに決別したつもりだったのに

「……………」まだ俺は『葉月零花』のままでもいいのか、『ゼレカ・ハツキ』の願望なのか」

どちらにしる俺の目的に変わりはない

………そう、変わらない

「……………」ふっ、ヒデー顔
鏡を覗き込み呟いた

………そろそろ出るかな

ザバン

カラカラ

扉を閉めた

風呂場

『……………ソリヤソウだ。オマエのニコロを映シ出しタんだからナ!』

自室

「……………」

眠い

けれど、少しだけ寝るのを躊躇う

「……………から……だは……………しょうじ……………きだ」

……………

……………ここは

『久しぶりだな、ゼレカ』

「マムート。まさかお前が……………」

『言いたいことは分かってる。だが、あれはお前が勝手に見た夢だ』

「……………そうか」

『今のお前の目的はなんだ』

「エレスを、この世界を守ることだ」

『やはり、変わらないな。あの魔王の為ならなんでもする、か』

「当然だ」

『……なら。昔の…葉月零花の目的は？』

「……」

その問い掛けに、俺は少し戸惑った

『どうした？忘れたか』

「……俺を、俺の友人を、俺の大切な人を殺した『大天使』を抹殺することだ」

『……願いや目的なんて、良くも悪くも変わらないんだな』

「そのために転生したんだからな」

『今の自分の選択に後悔はないな？』

「ああ！」

『オーケー。それが聞ければ十分だ』

「ふん、何を今更」

『そうだったな』

「当たり前だ」

『……ゼレカ、自分に負けるなよ』

「……？」

『いや、なんでもない』

「変な神だぜ」

『おう、それと名前で呼ぼうな』

「へいへい。じゃあ起きるな」

ふゆん

『なんだよ、忠告のツモリか？』

『……』

『忘れたのか？オレがダレかって』

『……追い詰めてどうするつもりだ』

『決まってるだろーよ。オレが身体をシハイするたメだ！！』

『……』

そんな会話があったなんて、俺は知る由も無かった

悪戯夢 決別・目的 (後書き)

デ「デンデロデンデロー」

ゼ「とうとう頭がいかれたか」

デ「おいぜレカ。聞いて驚け、喜べ。なんと！PV32000、ユ
ニーク5000突破だぜ！」

ゼ「！もうそんなにか」

デ「昨日解析したらそうだったぜ」

ゼ「そいつはめでたいな」

デ「これもこんな駄文を読んで下さっている皆様のおかげです」

ゼ「これからも日々書かせますので」

ゼ・デ『よろしくお願いしまーす！』

デ「ってなわけで記念番外編を書こうと思うのですが、今週体育祭
なので来週ぐらいにupする予定です」

ゼ「番外編……まさか！」

デ「女体化、幼児化なんでもこいですね」

ゼ「早まるなディン」

デ「まあどうするかは気分次第です。人物紹介とか、能力説明
とかにするかもだからね」

ぜ「俺はそつちを祈ってるぜ」

デ「読んで下さっている皆様方、本当にありがとうございます。これからの励みになります」

恵みの雨（前書き）

いつもよりは遅くなってしまいました。

恵みの雨

「あっ、ゼレカ。ちょっとつきあってほしい場所があるの。ソルには見つからずに」

「ソルに見つからずってことは……ギルド？」

「……いいよね？」

「もちろん。君が望むなら何処へもお付き合いしますよ」
遊びに行くのかな？

確かにソルにばれるとあれだけど……

「えへへ、アリガト」

「ふふっ、いえいえ」

……確か今日は雨降るってサリアがぼやいてたけど

城下街

「今日雨降るって言ってなかった？」

「ああー、それで今日は空の魔力がたかいんだ」

空にも魔力がある

雨が降るって事はそれだけ大気中の魔力が高まる

「……雲行きがあれだな」

「はやく行こうよ」

そしてギルド目指して足を早める

ギルド・悪魔達の眼デモンズアイ

ギィイ

扉を開ける音が鈍い

「ようこそ、悪魔達の眼へ。四日ぶりぐらいねエレスナーグ」

「メトリア、報告書できてる?」

「はい、これでしょ?」

「よつと、じゃあたしかに受けとったからね」

「確かにお渡ししました」

同盟国軍空・特別管理所

エレスが自分の用事を済ませてる間に俺も用事をしている

「ん?」

「……隊長か」

「奇遇だな、ベルゼブ。SSランクの依頼ってきてるか？」

「……今はきてないみたいだ」

「そうか。ならいいや」

「……SSランクは魔王クラス（俺達）の依頼だ。なのに魔王でも大魔王でもないあんたがなんで達成できるんだ？」

「気になるか？」

「……当然だろ。聖馬の時も、『あの時』も、普通の魔王じゃどうにもならないことだぞ」

「……それは俺が『魔神』だからだ」

「……何？」

「だから、俺は『魔神』なんだよ」

「……そうか」

「びっくりしたか？」

「……ふん、あんたなら天使や神つつても驚きはしないよ」

「あちら、薄いリアクション」

「……それよりも姫さんの用事は終わったみたいだぜ？」

「ん、そうか。じゃあな」

「……ああ」

カウンター・入り口

「あつ、ゼレカ。何処行つてたの？」

「ちよつと自分の用事をね。それより用事は終わった？」

「報告書ももらったし、みんなにも会えたから終わったよ」

「じゃあ帰ろうか」

扉を開ける

ザア

「……降ってきたな」

小降り……とは言えない量が降っている

「どうしたの？こんなに降ってるのに」

「魔界と下界はやっぱり違つと思つてな」

「そういえばゼレカがいた世界は雨にうたれないんだっけ？」

「たまにはおもいつきりうたれた事もあるけど、毎回毎回はうたれないな」

「魔力が通ってないからしかたないよ」

「そつだな」

魔界の雨は魔力の塊だから大事な魔力の供給源になる

魔力が身体に満ちてくる

「それでは参りましょう。姫様」

「エスコートしてくださるなら」エレスの手を取り導くように歩きます

「ふふっ、ホントのお姫様みたい」

「何言ってるんだ。正真正銘の姫じゃないか」

「『魔王姫』だけどね」

「変わらないさ」

話していると雨が身体に当たる

「魔力が満ちてくる」

「ゼレカの魔力は膨大だからね」

「魔力が膨大だと完全回復するまで時間がかかるんだよなあー」

「魔力の上限がおおきければおおきい程、つかえる魔法もあつかいやすくなるんだよ」

「それは知らなかったな。俺の場合はイメージさえ出来れば扱い易いも何もないけど」

「それはゼレカだけだよ」

「ははは、そう……いえ……ば……」

不意にエレスに目を向ける

「どしたの？」

「／／／エレス、服」

目を逸らしながら言う

「服って……」

「……」

「……」

今日のエレスの服は純白のローブと青のミニスカート

「あっ／／／」

顔を真っ赤にしている

「そついえば何で今日は服がいつもと違うんだろつな……って聞こうとしたらね」

「ん／＼……それは今日はソルの誕生日だから」

「ああ。ソルに見つからずってそついう意味だったんだ」

自分の黒いコートを脱ぎながら言う

「つと。着てなよ」

「アリガト／＼／」

俺のコートは防水性だから雨を弾く……魔力は弾かずにだけど

「だからパーティーみたいな格好してるんだ」

「今日の夜にはじめるから、ゼレカも出席してあげてね」

「もちろん」歩きながら、まだまだこの世界のことがかんがってなかつたと思ってみる

恵みの雨（後書き）

デ「ゼレカ。今思ったんだが、名前のある主要人物の男の割合が少
なくないか？」

ゼ「そうか？」

デ「お前だろ、シ Eid だろ、アルフォートだろ、ベルゼブと四人
（？）だけしかないじゃないか」

ゼ「……お前の趣味だろ？」

デ「もちろんだとも」

ゼ「……」

肩揉み（前書き）

ほのぼのであまあまな話が書きたかったんです。

肩揉み

「はっ…ん…ゼレカっ」

「……」

「ああっ…あっ…」

「……」

「んあっ…ひっ…」

「おいエレス。誤解を招かれような声をだすな」

「だって…気持ち…いいん…だもん」

「全く、休憩しないで事務仕事やるからこうなるんだよ」

誤解されないように言うておくが、俺は肩を揉んでるだけだからな

「ゼレカって、肩揉むのじょうずだね」

「ん、そうか？」

「いままでしてもらった中でいちばん気持ちいいよ」

人間生活してる時に少しだけ習ったことがあるからかな

「それは良かった」

「今度はもう少し下のほうをおねがい」

「下っつーと、肩じゃなくて背中だな」

手を動かす

「あー……気持ちいい」

「これにこりたら今度からは休憩挟めよ」

「大丈夫、そしたらゼレカがマッサージしてくれるから」

「ふふっ、はいはい」

……今改めて思ったけど、この状況下手に誤解した奴が見たらやばくない？

「もうちょっと右」

「はいよ」

まあ、それはそれでいいけどさ

ハァーあ、今日も一日平和だなあ

肩揉み（後書き）

エ「デインさん！聞いてください！」

デ「何をですか？」

エ「最近、ゼレカが『零花』になってくれないんです」

デ「安心して下さい。例の番外編でやりますから」

エ「もう内容きまってたんですか？」

デ「ゼレカに『零花』の格好で一日過ごすっていう感じではぼ決定しましたから。リクエストがない限りはこれでいこうと思います」

エ「一日ですか……それだけあれば、何でもできる気がします」

デ「まあリクエストがあっても、いつかはやるうと思ってたからやりますけど」

エ「それなら、『あの時』の薬もよっいしてくださいね」

デ「あの『マヒ薬』を？」

エ「あの時はホントにゼレカが動けなかったんですよ」

デ「内容はヤバイから載せてないけど、さとう『あれ』でしたからね。なら用意しておきますね」

エ「楽しみですね」

デ「本当に、楽しい事になりそうだ」

出会い〜アラクネ〜（前書き）

少しずつストーリーとして進めて行くのか、ほのぼのしよつか悩んでます。

出会い〜アラクネ〜

「人間風情が図にのらないで」

「その人間に負ける気持ちはどうだ？」

「くっ」

……悔しいけどこいつのゆう通り

……もう負けを認めようか

「……みんな、ごめん……」

「お祈りは済んだようだな。なら!!」

目の前の人間が剣を掲げた

「終わりだ!!」

ガキン

「……………?」

おかしい

もう剣を振り下ろしている筈なのに

目を開けてみる

「……………!?!」

……剣が折れていた

なんで？

「なっ！？」

「困るんだよなあ。勝手に魔界荒らされちゃ」

黒いロングコートが、風に揺られていた

「だっ、誰だ！？」

「誰でもいいだろ。今引き下がるっていうなら見逃してやってもいいぞ」

「誰が逃げるか！俺は最強の勇者だぞ！」

「……最強になんの意味があるんだろうな」

私の前に現れたひとは小さく呟いた

「喰らえ！！『天上展開斬』！」

「！！」

私が喰らったのと同じ技！

「逃げた方がいいわ！」

目の前のひと言う

「終わりだ！」

「ああ！」

あの斬撃は周りの地表を変えてしまう程の威力があるのに！

「……………」

ピシィ

「！！！」

「はあっ！？」

そのひとは、たった二本の指ではさんで、止めた

「……………はあー、こんなもんが最強か？」

「ばかな……………」

「『炎帝よ、嵐の如く燃え盛り傲慢なる者を焼き尽くせ。皇炎の風』
ウインドインベリアル

ボコオ ボコオボコオ

「何だ！？何が起きてる！」

「炎帝の怒りに触れたんだろ。この辺りは火山活動が活発だからね」

「う、うわぁー！」

シュウー

「……」

何が起きてたのか、魔王の私にも分からなかった

「立てる？」

「え！？あつ、はい」

差し延べられた手を掴む

「貴方は？」

「俺？俺は《ニンブルケティック》から来たゼレカ。一応は陛下の命で来た」

「エレスナーグが。助かったわー」

「ということは、貴女がアラクネさんですね？」

「そうよ」

「陛下から助けに行くように言われましたので」

「今回ばかりはエレスナーグに助けられたのね。ありがとう」

「お礼でしたら、陛下に」

「エレスナーグの命令でも、私を助けてくれたのは貴方だもん。お礼を言わせてほしいは」

「ありがとうございます」

チャン チヤチヤチャンチャン

「あつ、と。失礼」

ピッ

「エレス？こっちは終わったよ。……次？……うん、分かった」

ピッ

「陛下から次の場所に行くように言われましたので、失礼します」

「あつ、ちよっ……」

デローン

空間が歪んで、さっきのひと……ゼレカはいなくなってた

「……ふふっ、念話ぐらいで本性がでるなんて。……また会えるかなあ？」

消えていった空間を眺めながら、私は言った

出会い〜アラクネ〜（後書き）

デ「重大発表」

ゼ「なんだよ」

デ「そろそろ後書きのネタが無いから、新しい企画を考えついたので！」

ゼ「どんな内容だ？」

デ「それは！」

ア「主よ、そろそろ主の所に行く時間だ」

ゼ「あー、そうか。悪いな後で聞くわ」

デ「それは……人物紹介だ！って、誰もいない」

補佐と世話係の「コマ」(前書き)

いつもと違う方向性です。

補佐と世話係の「コマ

「ゼレカさん、いらっしやいますっ？」

「いるけど」

「！…おっ、脅かさないで下さいよ」

「あー、わるい」

ソルが俺の部屋を訪ねてたから、つい（ここ重要）脅かし……後ろから声を掛けなくなっただ

……うん、何のフォローにもなってないな

「まあそれはそうと、この間の《ヒンブル》との同盟は結べました
？」

「ヒンブル……ああー、ちょっと壁殴ったらすぐに同意してくれた
魔界の」

「……そのような結び方をしたので？」

「冗談だよ。《ヘルヴォート》って軍を蹴散らしたら、是非同盟を
結ばしてくれって」

「……やはりヘルヴォートが……」

「ん？」

「いえ、何でもないです……」

「何でもないって言うなら深くは詮索しないよ」

「ありがとうございます」

「それよりも、そんな堅苦しく話さなくてもいいのに。もう結構長く……はないか。とにかく、もっと気楽に話せば？」

「私はこれで慣れてしまってるので」

「とかいいつつ、エレスにはめっちゃめっちゃ碎けて話してるよね」

「エレスとは前の代……ご両親の頃から一緒にいるから、あの話し方に落ち着いているんです」

「……あれは最早『落ち着いた』なんて生易しいもんじゃないと思うけどな」

「とにかく、違和感を覚えてしまっんですよ」

「じゃあ、違和感がなくなるまで話せば？」

「……それは……つまり……」

「ほら試しに俺を呼び捨てで」

「いいいいです」

「即答！？ 試しにって言ってるのに即答ですか！」

「いつ、嫌なものは嫌なんです／＼」

「あはははー、ソルが照れてるとこ初めて見た」

「ぜっ、ゼレカ……………やっぱり……………恥ずかしい……………です／＼」

言葉が紡がれる度に小さくなって

「言えたみたいだね」

ソルの頭を撫でる

「こっ、子供じゃないんですよ！／＼」

「っても俺よりは（人間界単位で）年下なんだから。嫌ならやめるけど？」

「……………もう少しこのままがいいです」

ふふっ、素直だけど素直じゃないんだから

「ゼレカ、ソル。仕事がおわらないよ」

……………事務仕事が終わらなくて困ってるエレスを忘れてた、俺とソルであった

補佐と世話係の二コマ（後書き）

デ「それでは、宣言通り人物紹介です！

ゼレカ・ハツキ

魔神。黒髪。

左目が緑、右目が黒。

全ての属性の魔力を扱え、魔力の上限が膨大である。称号は『魔王補佐』、『破壊の大魔』、『空撃部隊隊長』等がある。
身長は168?ぐらい。

葉月零花

高校一年生。

髪の色や性格、声はゼレカと同じ（というよりもゼレカ本人）
ただし、目の色は両方とも黒。
魔神になる前のゼレカ。

ゼ「ん？初めは俺か」

エ「一人だけど二人分紹介してるね」

デ「同一人物ですからね」

エ「でも、これでぜんぶではないですよね？」

デ「もちろん。ゼレカやエレスさん、ソルは何回か紹介しますから」

ゼ「……あれか」

デ「次回は誰かなー？」

番外編『PV35000 ユニーク5000 記念』 零花の一日前(前書き

やっと落ち着いたので書きました。

零「はぁー」

ん？何でため息から始まったかって？

……仕方ないさ

起きたら身体が女の子 になってるんだもの

零「……」

幸い、子供になってるわけじゃないからまだ良かったけど

零「鏡の位置が少しだけ高いな」

とりあえず服を着替えて洗面台にいる

零「よつと、これでいつもと同じくらいだ」

手頃な台を見つけてその上に乗る

零「……これからどうするかなあ」

エレスの所に行ったらゲームオーバーフラグだし、かといって部屋に閉じこもるのもいかなものか

零「そうだ！空撃隊舎に行こう」

メ「空撃隊舎に何か用、お嬢ちゃん？」

零「！……って、メフィストか。脅かすなよ」

メ「何で私の名前を知ってるの？」

零「それは、隊長だからさ」

何時ものノリで言ってみた

メ「隊長……隊長……！もしかしてゼレカ!？」

零「そうだよ」

メ「えっ、でも……」

零「ちょっとした事情があって身体が女の子 になってるんだ」

メ「へえー」

零「さーてと、隊舎に行こうかな」

メ「……」

零「静かだけど、どうしふにゃ」

メ「ぷっ、あははは！！」

メフィストにほっぺをつままれている

零「なっ、なにふるんあえふいふと（なっ、何すんだメフィスト）」

メ「だつ、だつて面白いんだもん」

零「はなひえ（はなせ）」

メ「ふふふ、仕方ない」

パツン

零「全く」

メ「あー、おもしろかった」

零「隊舎に行くぞ」

メ「私も行く」

隊舎

零「おーすっ」

ベ「……………誰だ？」

零「おい！…！」

ア「ゼレカさん、どうしたてちっちゃくなっただんですか？」

零「気付いてくれてありがとうアスタノト」

メ「ベルゼブ以外は気付いてるけど」

ベ「……………真面目に分からなかった」

零「こうなったわけは説明すると長くなるからカットで」

ア「……今、身体はどうなってるんです?」

零「ギクッ」

メ「何時もと違うよね」

零「余計な事は……」

ア「えいつ」

おもいつきり抱き着いてきた

ア「やっぱり、女の子になってるんですね」

ベ「………!」

零「ばれてるー」

メ「一目で分かると思うけど」

ア「ふわー」

ベ「………起きたか」

零「………何か来る度にアラクネは寝てるな」

ア「あれ?ゼレカが少し小さい?」

ア「女の子になったんです」

零「アスタノトそれは…」

ア「そーなんだ？」

零「あー良かった、寝ぼけてる」

メ「そういえばゼレカ。軍協会議って何時だった？」

零「あれ？明日か今日だよね」

ア「今日じゃなかった？」

零「やっべ。じゃあな『テレポート』」

零「あれ、会議は？」

ソ「会議は明日ですよ。日にちが変更になったとお伝えした筈ですが」

零「……」

回想

ゼ「じゃ、会議が終わったからいくぜ」

ソ「ゼレカさん、次の会議は八日後になりましたから」

ゼ「八日後な、オーケー分かった」

回想終了

零「あーそっいえばそうだったな。会議がないならゆっくりできるし」

エ「ゼレカ、暇だったら後で部屋行ってもいい？」

零「構わないよ」

エ「書類だけ書いたら行くからね」

零「あいよ、じゃ部屋で待ってるな」

自室

零「はあー、最近物忘れとつかど忘れとつか忘れることが多いぜ」

トントン

零「どうぞ」

ガチャ

エ「まった〜？」

零「全然」

エ「ゼレカに聞きたいことがあって」

零「聞きたいこと？」

エ「あんまり大きな声ではいえから」

零「ん」

俺は自分の隣を指す

エレスが座ってるイスからベッドはそんなに遠くないけど、内緒話
ならこっちの方が近いからだ

エ「よいしょっと、それで話しつていうのは」

そこまで聞いたらわけもわからず俺の口を塞がれた

塞いでいるのはエレスの口

エ「はっ……ん…ジュル」

零「ふっ……ヌル…ゴクン」

ん？ゴクン？

明らかに何かを飲んだ気がする

零「ん……エレス、何飲ませ…！？」

ガクン

そのままベッドに力なく倒れる

エ「ふふふ、作戦せいこう」

零「まさか……これって」

エ「前に零花が飲んで動けなかった薬だよ」

零「じゃあ俺をゼレカって呼んだのも…」

エ「モチロンわざと。ソルにも口止めしてあったし」

零「はははー。ところでこのあとは如何お過ごしで？」

エ「ふふっ」

零「ですよね」

……覚悟を決めるといっわけですか

零「どんな姿でも忙しく騒がしい一日だったなあ」

デ「終わりましたー！」

ゼ「……殴らせる」

デ「まあまあ落ち着いて」

ゼ「一発でいいから殴らせる」

デ「身体だって元に戻してやったんだからいいだろ」

ゼ「……戻さなかったら、俺の最強魔法で消し炭にしてやったぞ」

デ「わあー、戻しておいてよかったです。それはさておき、連載してから無事一ヶ月を迎えることができました」

ゼ「こんな駄目野郎につきあって頂いて感謝です」

デ「口が悪くなってきたなおい」

ゼ「どうだっていいだろ。それより聞こうと思ったんだが、何であの薬をエレスが持ってたんだ？」

デ「俺があげた」

ゼ「……『邪なる福音』」

デ「詠唱中失礼しますが、宣伝しときます。次回も番外編です」

ゼ「……交わりし……」って、何時になったら本編進むんだよ」

デ「また企画物……ゼレカ、これは俺の中で会心の出来だと思っ」

ゼ「期待しないで待ってるぞ」

番外編『連載一ヶ月記念』 いつもと違う魔王姫（前書き）

昨日は何故か接続出来なかったです

番外編 『連載一ヶ月記念』 いつもと違う魔王姫

「うん、まあ出来たる」

俺は今自室でチョコレートを作ってる

もともと一人暮らしだったから毎日自炊してたし、菓子作りを趣味にしてたぐらいだから今でも時々作ってる

「後は保存して……ん？保存？」

保存……ほぞん……ホゾン……あっ！

「やっべ、冷蔵庫の中に氷入れんの忘れてた」

鞆の中の氷を持ってキッチンに向かう

「ゼレカ、何かおもしろいことない？」

ゼレカの部屋にきてみたけどゼレカは居なかった

「むう、ん？甘いかわり」

机の上にチョコがならべてあった

「ゼレカが作ったのかな？」

甘いかおりに綺麗なかたち

「……………食べてみてもだいじょうぶかな」

一番ちいさいのを取って食べてみた

「はむっ……………おいしい！」

もう一つだけ……………

「ぱくっ……………」

「ふう、あつぶねえー」

あの氷は溶けるとんでもないことになるからな

ガチャ

「ん、エレス。来てたんだ」

ビクッ

「ひっ！あ……………あの……………」

「どうしたの？」

「な……………なんでも……………ないです」

……明らかに何時もと様子が違う

「あ……あの、ゼ……ゼレカさん」

「ん？」

「その……ち……ちちち……」

……？

「もしかして血が飲みたいの？」

「ひっ！」「……ごめんなさい！無理な事言っ……」

「……エレス、チョコ食べたでしょ」

「ごめん……なさい。おいしそうだったんで……」

「いや食べたのはいいんだけど、ブランデーが入ってるのがあったから」

「ブランデー……だから酔ってるんですね」

「酔ってるって……もしかしなくても性格変わってる？」

「はい……」

知らなかった。酔うと性格変わるんだ

「あ……あの……」

「ああ、血が飲みたいんだっけ」

俺は人差し指の先を嚙んで血をだした

「はい」

「失礼します……」

エレスは少し怯えながら俺の親指と手の甲を持って優しく舐めてる

……いつもは人差し指をそのままくわえて吸うように飲んでいるのに

「はぁ……ん……」

目を閉じてビクビクしながら少しずつ舐めてる

……ヤベエ。めっちゃ可愛い

めちゃくちゃにしたいくなるくらいヤバイ

「はぁ……クチュ……と……止まりましたよ」

「終わった？」

「はい……ありがとうございます……」

……ああ。終わっちゃったのか

「エレスが酔うと性格が変わるなんて知らなかった」

「酔うと何故か回りが怖くなる気がして……」

「ふーん」

そのままエレスにキスした
いつものディープではなくフレンチで

「あ…あああの、ゼ…ゼゼレカさん！！／／／なにして…」

「いつものことじゃん。今更だよ」

「ですけど…」

キスだけで顔真っ赤にしてる

そのままゆっくりベッドに押し倒す

「ひあっ！わ……私、このままゼレカさんに食べられちゃうんですか？／／／」

Sの血が騒いだのか限界寸前だ

「今の君とてもそられるけど、震えてるからそんなことしないよ」

「う…ごめんなさい……」

「謝る必要なんてないさ。それよりも、一昨日の夜は俺に痺れ薬を飲ませて俺の上で激しく動いてたのに、今の状況が怖いなんてね」

「／／／あれは……いつものことですから、今とは違うんです」

「そっなの？」

「そうなんです！」

俺もエレスの横に倒れる

「ビクン！」

「このままずっと居たら、慣れるかな？」

「か…顔が近い…です」

「震えてる君も可愛いよ」

「ノノそ…それじゃあ、抱き着いてもいいですか？」
「顔が見れなくなっちゃうけど、いいよ」

「それでは……」

俺の胸に顔を埋めた

「このまま寝ちゃいなよ」

「へ…変な事とかしないで下さいね」

「安心して寝ていいよ」

「スウ…スウ…」

酔ったせいなのか、言い終わるか終わらないかで寝息をたてていた

「ありゃ、あんなに警戒してたのにあっさり寝たって事は性格変わったも俺を信頼してくれてんだ」

……ありがとう

そして俺も意識を手放した

「ふっああー、あれ？私……」

「ん、起きた？」

「おはようゼレカ。それより何でゼレカの部屋で寝てたの？」

「覚えてないんだ」

「え？」

「昨日の君、とても可愛かったよ」

「ん、覚えてない」

「いいさ、覚えてなくても」

「貴方がそういうなら……ねえ、今日はお料理おしえてよ」

「いいよ。じゃあ着替えるからキッチンで待ってて」
「わかった」

外にでていったエレスを見て、昨日のエレスを思い出す

番外編 『連載一ヶ月記念』 いつもと違う魔王姫（後書き）

デ「どうでしたかゼレカ？」

ゼ「うん最高。あんなエレス見たの初めて」

デ「次からは本編に戻ります」

ゼ「戦闘シーンもバリバリありますよ」

デ「それではこの辺りで。……疲れた」

連合会議（前書き）

構想を練るのが楽しいです

連合会議

「では、魔界連合会議を始めろ」

「今回の議題は……」

ああー怠い。今はエレスの付き添いで連合会議に来てる

空撃部隊の皆も魔王か付き添いかで全員揃ってる

空撃部隊は『空から攻撃する部隊』ではなく、『空からのように何も無い様な攻撃をする部隊』だ。……とりあえず説明してみました

「……………とまあこれを如何に処理するか？」

「私達が片付けてもいいですよ」

「……………その程度なら自分達でも処理できるだろ」

わあ、兄妹なのに言ってることが真逆。流石としか言えないゼベル
ゼブ

「……………」

ほら議長も黙っちゃったよ

「……………異論が無ければ決まりだ」

「さて、大魔王よ。お前には『紅月の荒野』を調べてきてもらおう」

「……『紅月の荒野』？聞いたこともねえ場所だな」

「本来なら魔王しか入れない場所なのだが、何者かが侵入した形跡があるのだ」

「貴殿にはその調査を頼みたい」

「……アスタノト、どうする？」

「私はいいよ」

「行ってくれるのか。それでは……」

しかし、うちの『ニンブルケティック』をはじめ合計十ヶ界の魔王が手をくむなんてな

……その内三つはうちと同盟関係だけど

「誰が処理してくれるかね？」

『……………』

ボソッ

（エレス、今何決めてんの？）

（『地獄海岸』の魔物の退治だよ）

（『地獄海岸』っていうと……ああ、『フルーリエドロ』のか）

『フルーリエドロ』は議長……マクステリアの世界だったな

「議長、自分で行ったらいいじゃないですか」

「なっ!?!」

「あんただって魔王なんだからそのくらいはできる筈だ」

「……同感だな」

「あの程度の魔物ならあんただけでも十分ですよ」

「………そうなのか?」

「おそろくは」

まがりなりにも魔王なら大丈夫かな

「ならそれはおいといて……」

『……………』

『!?!?』

ガタッ

「ん、どうした?」

「俺いくよ」

「そう?結構な数いるよゼレカ」

「アラクネ、俺が負けると思っか」

「うづん、『あの時』みたかくかっこよく倒すと思っ」
「じゃ皆エレスのこと頼んだよ」

「気をつけてねゼレカ」

「行ってきますエレス」

剣を二本創造して跳んだ

連合会議（後書き）

デ「それでは今回は人物紹介二人目エレスさんです。」

エレスナーグ・デルト・ネメス・ニンブルケティック

白の強い水色の髪に紅い瞳の魔王兼魔王姫。

とある事情があり兼任している。

争い事が嫌いで、城や城下街の住人達の評判も良い理想の魔王。ゼレカとソルからはエレスと呼ばれる。

エ「まだあまり力を使っていませんが、魔王です」

ゼ「その実力は魔王の中でも上位ランクに入る程だからな」

デ「補足ありがとう。補足ついでに前回の補足をしておくと、エレスさんが『血を飲んで酔う』のと『酒で酔う』のは別の酔いですがらお間違いなく」

激突（前書き）

久しぶりの本編です

激突

「おー、随分な数だな」

テレポートで跳んだ先は会議場所から少し離れた荒野だった

「数は……………一万…いや、一万二千か」

大した強さじゃないが一つだけ気になることがある

……………普通じゃ有り得ない魔物達の『統率』だ

「グルルっ！」

「グワァー！！」

「キエっ！」

俺という邪魔者を察知したみたいだな

「それじゃあいきますか」

一対の剣を構えて突っ込む

ザクッ

グシヤ

ベチャッ

右の剣は闇を、左は雷の魔力を込めて振るう

「ガアッ!!」

「キシヤア!!」

「ちっ」

斬っても斬ってもきりがない

「怠惰の光よ、雨となり風となり抗うものたちに注がれる。犠牲の
人形、孤独の時計、交わりて先を見よ! 『ホイソニックレイン墮落の雨』」

ザア―

身体を蝕む雨を降らせた

「ガガア?」

「クエ!?!」

魔力の弱い奴はこれで動けない。強くても身体能力が低下している

「これでっ!」

さっきより動きの悪くなった魔物達を浄化していく

「あと三千……!!」

黒い液体が飛び散る中で確かに『見えた』

左目が『それ』を捉えた

ガキイン

「ふん、全く無礼な挨拶だな」

「アシユラ！！てめえ！」

『それ』は俺が見たことのある、首元まで伸びた金色の髪に全てを見透かす様な黄色の目、身体を覆っている白い服に……………背中から生えた『白い翼』！！

「まあそれはいいとして、ゼレカよ。そんな姿じゃ私は倒せないぞ」

「黙れ！テメエにとやかく言われる必要はねえ！！」

「ふっふっふ、今のお前は良くて魔王だ。そんな力で大天使であるこの私に勝てるわけが無かるう」

「……………一つ聞く。『あのやろう』は何処だ」

「あの方の居場所？さあ、何処だろうな」

「答えないならお前に用は無い。消え失せろ」

瞬間的に『墮落の雨』が降り注ぐ場所から魔力を取り出した

「汚れし魂、その罪を償^{すべ}う術^{ハデステージュ}を行使したまえ。知るべき理は我の言葉。『冥界の揺り籠』！！」

有りつただけの魔力を注ぎ込んだ上級魔法を放った

ガチャ

パリーン

「この程度か。ガツカリだよ」

「ふっ、かかったな」

「？」

「弾け飛べ！！」『アルテエデン暗黒の楽園』」

さっきの取り出した魔力を全部注ぎ込んだ俺の禁術だ
雑魚魔物でも九千体分の魔物の魔力を集めたんだ

「…………消えたか？」

「あつぶない危ない。ホントに消し炭になるかと思った」

「…………馬鹿な！！」

無傷だと！？

「ふっふっふ、残念だったね」

「…………くっ」

「だから言っただろ。『あの姿』になれと」

「うるせえ！！」

「…………興ざめだよ。この程度の器なんてね」

「……………」

パチンっ

「帰る」

魔物達の統率を解いてアシユラは消えた

「……………」

『あの姿』か……………」

「……………」帰るっ

そして会議場所に跳んだ

激突（後書き）

デ「今日は皆さん居ないので何もすることがありません」

ア「我だけ居るぞ」

デ「うわっ、ビックリした！」

ア「主と主の主は会議、ソルーティア殿は城の警備にあたっての
でな」

デ「説明ありがとう。だったらアルフォートの紹介する？」

ア「今は誰も居ないからつまらないぞ」

デ「なら……寝るか」

ア「そつするか」

怒りを表に（前書き）

スランプ注意報がなりっぱなしになりました。

……細かい部分が浮かびません。

怒りを表に

「ただい……ま？」

戻ってきたら凄いことになっていた

エレスが魔王化してマクステリアに剣を向けていた

よくみればマクステリアの足もとが溶けたり焦げたりしてる

「……………何があつたんだ？」

「……………イロイロな」

アラクネとメフィストも魔王化していた

大体の想像はつく

「……………エレス、止めなよ」

「ゼレカ！？戻ってたの？」

「今な。場所も場所なんだから剣をしまいなよ」

「……………うん」

スチャ

「とりあえず魔物は処理しといたから」

『……………』

皆口を閉ざしたままだ

「……………どのくらいだった？」

「一万二千体」『!!』

うちの同盟の奴以外は皆驚き、同盟の奴は毅然とした態度をとっていた

「そつだ、悪いなベルゼブ。行った場所多分『紅月の荒野』だと思
う」

「……………別に構わない」

「ちょっとからんでた事情が事情だったんでな。それと……」

「……………いい加減にしろ『夢幻』よ!!」

議長……………マクステリアが怒った

「一悪魔がそんな態度をとっていいと思ってるのか！」

怒りの中に恐怖が混じってる

……………エレスに剣を向けられたのがそんなに怖かったのか、それとも俺にびびったか

「全く、お前達より前世代の……」

メフィストもアラクネもベルゼブもアスタトもエレスも怒りを表
に一齐に『魔王化』ないし『大魔王化』をした

「魔王のほづがよっぽど…」

そこまで言いかけてマクステリアは言葉を紡げなくなる

皆も一歩動かず啞然としていた

パラパラ

「おい、それ以上ふざけた事吐かしやがったら消し飛ばすぞ」

俺の魔力を流して回りの空間を支配した

「お前には関係ねえだろ。あんまし調子乗ると連合破棄して跡形も
なく潰すからな」

更に濃い……視覚化できる程の魔力が空間を覆う

「今からだってやれるんだからな。テメエの命は俺の手の上だ」

今俺を見ていると、俺の後ろに大量の蛇やら鬼やらの幻影が見える
はずだ

「……………返事はどうした」

「……………はっ、はい!!」

この世の物とは思えない恐怖を味わっただろうな

「……………ふん」

魔力をといた

「じゃあ帰ろうよ皆」

「……………え、うっうん」

飛行艇に向かう

帰路の廊下

ちよつと魔力使いすぎたからテレポートは使えない

『……………』

「ん？皆どつしたの」

「……………あんたがあそこまで本気で怒るなんてな」

「いやあ、あれは怒っても文句ないだろ？皆の事情を知らないくせに知ったようなこと言ったから」

「……………確かにな」

「ゼレカさん怖かったですよ」

アスタノトがマジで震えてる

「ははは、ゴメンゴメン。ホントは皆には見えないようにしようと思っただけで、つい力が入りすぎた」

「ホントにぞくぞくとしたわ

」

「そうだった？てゆうーか皆本気でビビり過ぎ」

「……あれは俺でも恐怖を抱いた」

「大魔王なんだから怖くないはずだよ」

「心が折れるかと思った」

「メフィスト、ゴメンね」

「直視してたら危なかったかも」

「じゃあ今頃あいつはまずいかもね」

「……ゼレカ、ありがとう」

エレスから感謝の言葉が紡がれた

「あの時の私達の怒りをゼレカが晴らしてくれたから……だからありがとう」

「いやいや、それは俺の台詞。俺がいない間になんか言われたから剣を向けてたんでしょ？メフィストもアラクネも力使ったみたいだし。ありがとう」

「ゼレカ……」「あら、気付いてたの？」

「ばれないと思ったのに」

「アスタノトとベルゼブも他の奴を抑えてくれてありがとう」

「……………」

「よかったです。何時ものゼレカさんに戻ってくれて」

「ははは、俺はもう戻したつもりだったんだがな」

………… エレスにはアシユラに会った事は言わなかった

余計な心配をさせない為に
そして………… 『あの事』も

怒りを表に（後書き）

ゼレカが魔物退治に行った後

「魔物？そんな魔力は感じなかったけど」

「それよりもニンブルケティックの魔王よ。そなたはあんな『ただの悪魔』をそんなに信じているのか？魔力が他の悪魔より強いだけではないか」

ゼレカを悪く言われて『魔王化』しようと思った

「じゃあ、その『ただの悪魔』よりも弱い貴方は一体何なのかしらね」

「魔力だけで全て決まるなら、貴方は魔王にはなっていないと思います」

アラクネもメフィストも私と同じ気持ちみたい

「ふう、あまり議長をいじめるのはよくないと思うよ」

「全くだ。お前らは戦争の申し出に着たのか？」

「……」

『ビクッ！！』

ベルゼブが他の魔王を睨みつける

アスタノトも魔力を抑えてる

「止めないか。……………それで、どうなのだ？」

「……………私は彼を信頼してるだけ。力なんてかんけいありません」

自分の思ってる事を話す

さっきの間にふたりは魔王化してた

「それは『禁術』を使ったかいたな。ただのいけ……」

「！」

そこまで言われて無意識の内に剣を抜いていた

「……なっ」

魔王化もしてただ一言

「ゼレカは……………ゼレカは、『イケニエ』なんかじゃない……！」

悪戯夢 望郷 (前書き)

体内時計が狂ったのか、昼夜逆転してます

悪戯夢 望郷

「零花、何点だった？」

「お前は？」

「ふふん、梨絵に教えてもらった成果がでて八十点！」

「俺九十五」

「負けた」

「もう、。私が教えたのに負けてどうするの」

「ごめん梨絵。負けちゃった」

「零花、どうだった？ちなみに俺は七十だ」

「英司、お前 にも負けてるぞ」

「 にも!？」

「英司には勝てたー！」

「目標は零花だったでしょ？」

「むぐっ」

「梨絵はどうだったんだ？」

「貴方と五点差」

「よつするに満点だろ」

「そうとも言うわね」

ガラガラっ

「おはよっございませーす」

……おいおい、もう授業終わったぞ

そいつは鞆も置かずに俺のところに来た

「零っ花」 例の物は？」

「……多矩夜^{たくや}、せめて鞆置いてから来いよ」

「細かい事を気にしてちゃ人生つまんないぜ」

「……はいはい」

「それよーりも、持ってきたらどうな？」

「ほらよ」

「ふおっほー ありが……」

「その前に、報告してからな」

「わかった、すぐ行ってくる！」

多矩夜は全力で教室をでていく

「はあ、クラス中の注目の的じゃねえ」

「まあまあ。いーだろそのぐらい」

「俺はお前みたいに脳みそまで筋肉じゃねえの」

「誰が筋肉だ！見た目じゃもやしみたいだろ」

「自分で言ってる恥ずかしくないの？」

「梨絵、多矩夜は自虐趣味なんだからあんまり虐めてやるなよ」

「あー、そうね」

「おい！天才コンビめ！ も何とか言ってくれよ」

「え〜とここがあれでこれが……」

「真面目な娘は見直ししてる！」

「ふふっ、はははーやれやれ、毎日が楽しいや」

『……………残りフツカ』

「……………またあの夢」

目を覚ますと見慣れない天井だった

「あれ？ここは……………」

「目、覚めた？」

「メフィストか。俺どうしたんだっけ」

「覚えてないの？」

「……………時空船に乗ったところまでは覚えてる」

「その後すぐ倒れて驚いたよ」

「まあ、あんだだけ魔力使えば倒れもするだろ」

「全く無茶ばかりして……………」

「心配かけたな。今はどの辺？」

「深航路に差し掛かったあたり」

「……………最航路までに魔力を回復しておくか」

「それはベルゼブがやってくれるって。そのかわり、『……………ゆっくり寝てる』だって」

「ふふ、わかった。じゃあお言葉に甘えて寝かせてもらおうか……………」

言い終わるか終わらないかで意識がとんだ

悪戯夢 望郷（後書き）

ゼ「今日はデインが居ないから適当に進める事にする」

エ「デインさん居ないんだね」

ゼ「なんか急用があるからそっちに行くって」

エ「じゃあ何する？」

ゼ「んー、吸血魔王について説明するか」

『吸血魔王』

吸血鬼の上位種。

黒血を吸って生きながらえるが、赤血を吸う事によって黒血を吸う必要がなくなり魔力を回復させる事もできる。

魔王化、吸血等ができる。

ゼ「軽く説明するとこんな感じかな」

エ「まだほそくする必要があるから完全な説明じゃないよ」

眼鏡（前書き）

『眼鏡』と書いて『めがね』と読む不思議

眼鏡

「……………あれ？寝てた」

んーと、書類があまりにもあつたから処理しようと思つて……

「ああ、そつか。書類片付けてたんだっけ」

「ゼレカ、寝てたでしょ？」

「寝てたみたい」

眼鏡をかけて書類に目を通す

「まだまだ終わらないよ。この多さはいじょうだって」

「会議行ったりさぼったり逃げたりしてたからしょうがないよ」

「最初以外はみみが痛いです」

「会議はしょうがないとしてもサボりはなあ……………」

「さぼったわけじゃないんだけどね」

「よつと、残り半分」

「もう半分！？はやくない？」

「書類なんて内容を隅々まで目を通してサインすれば終わりなんだから簡単でしょ」

言いながらサインしていく

「それが面倒なの」

「たしかにこれだけ数があると面倒だけど」

「だ〜から、そろそろきゅうけいにしようよ」

「まあ、俺は少し寝てたけど働きっぱなしだからね。じゃあ休憩に
しますか」

「はあー。やっときゅうけいだよ」

「……」十…百……この量なら今日中には片付けられるね」

エレスがこつちを振り向く

「ゼレ……カ？なあにそれ？」

赤紫のフレームの眼鏡の事らしい

「ん？これは眼鏡。下界にいた時に使ってた物だよ」

基本悪魔は皆視力がいいから、こつというのは使わないらしい

「度もゆるいのを使ってるから誰がかけてもあうと思うよ」

「へえ〜……」

おおっと。お姫様は眼鏡に興味深々のようだ

「かけてみる？」

「いいの？」

「もちろん」

俺が見たいっていうのもあるし

カチヤ

「どっ？似合うかな」

「……」

眼鏡をかけて上目遣い。その可愛さ殺人級である

「とても良く似合ってるよ。いつもとは違う可愛さがある」

「そ、そうかな／＼」

「よければあげるよ」

「え？でも……」

「造ればあるし、君が持つてる方が似合うからね」

「ありがとう、ゼレカ」

「いえいえ、それよりも残りを片付けようよ」

「もっきゅっけい終わり？」

「終わったら肩揉んであげるから」

「……それだったらいいかも」

眼鏡の威力半端ないですよ

眼鏡（後書き）

デ「ふふふ、私は帰ってきた！」

ゼ「随分と早い帰りだったな。予定では後もう丸一日かかる予定だったろ？」

デ「一日中安静にしてたら思いの他早く回復したらしい」

ゼ「全く、そんなになるまで我慢してんじゃねえよ」

デ「我慢というか気づかなかっただけだけどな」

ゼ「はあ、作者が帰って来たので更新できるようになりました。今後ともよろしくお願いします」

デ「次回はソルの紹介をします」

諸々（前書き）

ジメジメ空気が辛いです

諸々

「……………」

鏡の自分を凝視している

「やっぱりオッドアイは目立つな」

右目が緑ってというのが気になる

マムートから貰った『夢幻の眼』だけど、一回……………だけ使ったな

とにかく、今度使ってみよう

「ゼレカさん？いませんか？」

「後ろにいるよ」

「……………もう驚きませんよ」

「なんだ。もう慣れたか」

「いえ、それよりも時空船が損傷していたので修理をお願いしたいんですが」

「……………あー、うん。じゃ直しとくわ」

多分、深航路の時に傷ついたんだろうな

時空航路の深航路には『パニックツイスト』が住んでるから仕方な

いっちゃ仕方ないんだけど

「そつだ。言い忘れてたけど城の警備お疲れ様」

「いえいえ、警備といつてもアルフォートさんと城の中に居ただけでしたから」

「それでも安心して連合会議に行けたのはソルとアルフォートのおかげだよ」

「信頼されてますね」

振り向いて格納庫の方に歩きながら答える

「もちろん。貴女が信頼してくれているように」

格納庫

「結構浅いな」

率直な感想がそれだった

今までパニツクツイストを片付けてたのは俺だったから、ベルゼブが倒せるか心配だった

別にベルゼブが弱いつてわけじゃないが、……あの巨大なタコみたいなのは初めて相手にすると結構手こずるからな

「このこと……そこ……後は……っつと」

修理を終わらせて戻る

ギルド『悪魔の眼』

「あつぜレカさん」

「暇になったから適当な依頼を請けにきた」

「ランクはどうします？」

「もちろん最高ランクで」

「んー、現在の最高ランクですとS級の『マグマドラコの排除』だけですよ」

「マグマドラコか。熱いのはやなんだけど困ってるなら手なずけてくるか」

「また魔物を連れてくるんですか？」

「街外れの牧場……『フラワーハウス』で育ててるから大丈夫ですよ」

「たしかに依頼の内容は排除ですから連れてきても大丈夫ですけど……」

「じゃ、これで決める」

「受理完了しますね」

諸々（後書き）

デ「予告通りソルさんの紹介です」

ソル「ティア

髪と瞳の色はエレスと同じ。

エレスの世話係。

普通の悪魔より魔力が大きく、扱える属性が多い。

エレスの親の代から遣えているが歳はゼレカより下。

ソ「久しぶりに出番があつた気がします」

ゼ「確かに。最後に出たのって番外編の前だよね」

デ「話の向きがどっちにいかうか迷ってたのでなかなか出させてあげられませんでした」

ソ「今度からはもっと出番を増やしてほしいですね」

デ「多分次回はアルフォートを紹介します」

火山探索(前書き)

そついえばタイトル変えました

火山探索

「……………あつっ」

マグマドラコを探しに火山の中に入ったまではよかったけど、ものすごく熱い

暑いを通り越して熱い

呼吸するだけで痛いし

「だぁーもう、歩くだけで汗がでる！まともに集中もできやしないぜ」

……………なんて言ってるけど後ろの気配に気づかない俺じゃないさ

「さっさとマグマドラコを倒さなきゃいけないのに」
気配がどんどん近づいてくる

後ろを振り返らずに言ってみる

「……………何の用だ？」

「お前こそマグマドラコに何のようだ。俺はどうしてもあの竜の鱗が欲しいんだ」

ん？どこかで聞いた覚えがある声だな

それも同じような状況で

「……………シェイド？」

「ゼレカ！なんだお前か」

「それはこっちの台詞だ。どうしてマグマドラコの鱗をとりに来たんだ？」

「いや、その、いつもマリーヌには世話になっているからプレゼントでもしてやりたいなーって思ったからさ／＼」

「世話になっているからじゃなくて好きだからって言っちゃまえよ」

「そ、そそそそんなわ、わけわけないだろ」

「バレバレの動揺どうもです」

「そ、それよりお前は何しに来たんだ？」

「暇だから何か狩ろうと思って」

「……………マグマドラコって、ギルドじゃSランクの魔物だろ？」

「俺ランクとか関係ないもん」

「……………そうですか」

「つーかドラコいなくね？マグマの中覗いたけどいなかったし」

「マグマの中にはいないぞ。奴らは溶岩に擬態して逃げ場をなくしてから獲物を喰らう習性があるからな」

「道理でさっきから足場が動いてるとおもった」

「……………え？」

「いや、だから足場が……………逃げ場を絶つてから獲物を喰らう？」

「ああ」

「ふーん」

『……………』

足元に指を指す

「ん？」

「うん」

それにシェイドが頷いた

「あれ？こんな大きかったっけ」

「デカイのはこのぐらいの大きさだ」

「……………とりあえず鱗採っとけば？」

「そっだな」

シェイドが鱗を採ってる最中も暴れる気配がなさそうだしな

「……………よしっ」と

「採れたのか？」

「ああ、これだけあれば指輪が造れる」

「婚約指輪？」

「違うっつーの！」

「結婚したっていいんじゃない？互いに好きなんだから」

「!?!?」

もう言葉がでてないな

そんなに恥ずかしいのか？

火山探索（後書き）

ゼ「それでは予告通りアルフォートの紹介です」

ア「何をしているのだ主？」

ゼ「デインの奴に『たまにはゼレカが進行役やってよ』って言われたから仕方なく進行役やってるんだよ」

ア「私の紹介だったな」

ゼ「無視するな無視を」

アルフォート

決まった姿をしてないが、いつもはひとがたで銀色の服に銀色の髪、銀色の瞳と肌以外は銀一色である。

ゼレカと契約するまではナブラート村の祭壇に埋もれてた。

シェイドとは兄弟。

炎竜の幼体（前書き）

前書きに何を書こうかなー

炎竜の幼体

……おかしい

これだけ騒いで暴れているのに、全くと言っていいほど補喰する意思がみられない

「どうしたゼレカ？」

「やっと言葉が出たか。喋れるようになるまで待つてたんだからな」

「お前が変なこと言うからだろ！！」

シェイドの言葉は聞こえないふりをするとして、真面目に敵意を見せてこない

「……？」

『』

「やっぱりそうか」

「何だつて？」

「簡単に言うと『私達は今逃げている最中ですが、成体はともかく幼体はともひとりでは逃げられません。保護してもらいたいのです』と言われた」

「あの短い言葉の中にそこまでの意味があるとはな。自分に驚かなくて驚いてただろ？」

「まあ一番驚いてたのは、『私の言葉が分かるんですか!?!』だったけど」

「ああ、そっちな」

「μ ……?」

『!?!?』

「」

『』

「どうだった?」

「今はマグマドラコの大移動期だから、次にここに戻って来るまで保護してあげるって言った」

「それで?」

「『ありがとうございます!! 私達は悪魔から危険視されていますが、迷惑はかからないですか?』って言われて俺は魔神だと返答したら…」

「ストップ!! 簡単に魔神だとばらすな」

「大丈夫だろ。ともかく、『それでしたらお願いします』と言われたからマグマドラコの幼体を引き取る事にしたから」

「どこで育てるのが見当はついてるのか?」

「フラワーハウス」

「フラワーハウス……大丈夫なのか？あそこはAランクないしSランクの魔物達が住家になっている所だぞ。よくお前も魔王もどうにかしようよ思わないな」

「それは俺が管理っつか、俺が創った場所だから何の心配もない」
「……うん、もうお前が神だって言われても疑えない」

「魔がつくけど神ではあるからな」

なーんて話してる間にマグマドラコに連れられて『巢』のような場所にたどり着いた

『
』

「
」

『ピイイイ』

そこには炎が小さく形どった竜がいた

「こいつが……」

「『炎竜の幼体』……マグマドラコの中でも一際潜在能力の高い幼体か」

『……夢幻の遺魔よ。汝に任せるぞ』

「！……」

「何だ、俺の言葉が分かつのか」

『汝達の言葉は遙か昔に覚えていたのにな』

「遙か昔……か。お前は一体どのくらい生きてるんだ？」

『確か……何千年単位だったな』

「何千年で……」

「まあ、それよりも」

幼体に近づく

『ピィ』

「確かに保護したからな」

『ありがとう……』

炎竜の幼体（後書き）

デ「いやー昨日は助かったよゼレカ」

ゼ「全く、俺に押し付けやがって」

エ「そのわりにはやる気があったよね」

ゼ「頼まれた事は全力で取り組むのが俺の信条だからな、と
言ってみる」

デ「照れなくていいぞ」

ゼ「照れてない」

夢の中？（前書き）

久しぶりのラブチュッチュ話です

いやー、甘いです

夢の中？

「いつの間にか夜になっちまったな」

フラワーハウスの世話係であるバルチスに『マグマドラコの幼体を預かったから』って言って置いてきた

だから安心して城に戻れるってわけだ

……まあ『ちょっとゼレカさん！これ以上僕の仕事を危険にしないで下さいよ！』という声がした気がするけど、気にしたらまけだよ

城・露天風呂

「ふうー」

ああ、気持ちいい

汗はかくは体は痛い（熱気で）はで大変だったあ

「……シェイドの奴、喜んで貰えたのかな？」

あれからふたりで街まで戻って、あいつはマリーヌの所に、俺は報告に別れたからどうなったのか知りたいな

「いやー、若いっていいね」

とは言っても俺もまだ高校生だけど

「……………」

ハッ！！寝かけてた！

心の中ではイロイロ思ってるけど言葉にはしてないから、『ゼレカさんてあまり喋りませんよね』と言われることがある。心では喋りまくりでですけど

「そろそろでるか」

ぱちゅ

ガラガラ

自室へ続く廊下

やっぱりこの時間じゃ警備隊ぐらいしかないよな

当然っちゃ当然だけど

とゆーか、警備隊の隊員で何時休んでるんだろつか？

ガチャ

電気もつけずにベッドにいく

流石に疲れた

「……………」

よくよく自分のベッドを見ると、何故か膨らんでいる
それはそうと、朝起きた時も毛布に魔力を染み込ませた覚えはない
し、風系の魔法を使った覚えもない

……大体の、いやほ絶対と言ってもいい程予想はついてるけどね
「……………」

ブックライトに手をかける
カチッ

本を読む為のライトだからそんなに明るくはないが、何があるかを
知るためには十分すぎる

……………やっぱりな

「寝ぼけすぎだろ……………エレス」

小声で言う

「……………ん？ゼレカがいる？まだ……………夢かな」

「そつだよ。まだ夢の中だよ」

「まだ夢？じゃあ起きたらゼレカいる？」

「もちろん。でも、もう少し夢の中にいよう」

「……………」

そのままエレスを正面から見える位置に移動する。その体勢が押し倒したような格好になっているけど、まあこれは『夢』だから

「……クチュ……ジュル……」

「ん……はぁ……あふう」

「……は……エレス、いつもと違うことしてみていい？」

「いつもってというか、起きてる時でしょ？」

「そうだったね」

「痛くないことだったらいいよ」

「そんなことはしないさ」

と言いつつエレスの服を前だけあける

ああ、ご心配なく。見えてる部分はないから

「ん、ゼレカ／＼／」

「ペロッ」

「ひあっ！ー！」

鎖骨に舌を這わせる

「ペロペロ」

「ん……はぁ……にゅ／＼／」

「恥ずかしい？」

「こゝこんなことされて恥ずかしくないわけないよ／＼」

「それもそうだね」

「むにゅ、現実でも夢でも意地悪して」

「ふふふ、ネローン」

「（ビクッ）ん！」

「はあっ、そろそろ覚めてもいいよ」

「じゃあ……そろそろ起きるね」

「うん、おやすみ」

「おやすみじゃなくて……おはようだ……よ」

「そうだったね」

そのまま寝ちゃったみたい

「ふぁー」

俺まで……眠く……なって……きた

「……おやすみ」

「ん」

「おはよう、エレス」

「ゼレカ、おはよう。今日は夢にゼレカがでてきたよ」

「君の夢に？」

「うん。………ちょっと積極的だったけど／＼」

「へえ、夢でも君に会ってたんだ。どんなことしてたの？」

「………鎖骨………／＼／」

「鎖骨？」

「な、なんでもないよ／＼」

「ふふふ、もう覚めてもいいよ」

「………ゼレカ」

「はっはっは、じゃあ俺はちょっと出かけるから」

「ちょっと、ゼレカ！あれ夢じゃなかったの！？」

「はっはっは」

夢の中？（後書き）

デ「はは、ちょっとした事情があつてゼレカとエレスさんはいません。ということでバルチスの紹介だけします」

バルチス

いろいろあつてゼレカに捕まつた中級悪魔。

茶色の髪で緑の瞳。

身長はゼレカより少し小さい。

性別は男。

バ「えーと、バルチスです。一応ゼレカさんの部下です」

出会い〜メフィスト〜（前書き）

そろそろ目標の五十話です。

そういえばたまたまみたら、ユニークが7777でした。

出会いメフィスト

「魔王様、人間達が攻めて来ました!!」

「第四、第五部隊で対処にあたらせて」

「民の救助は如何致しましょう!？」

「第一部隊を救助、不死部隊を囷にしてぎりぎりまで持ちこたえて」

「うわああ!!毒された魔物だ!!」

「くっ」

ザシユ

「今の内に浄化をすませて、早く!」

「はい!医療部隊、急げ!」

『ははあ!』

くっ、圧倒的に後手にまわったわ

大部分の部隊がない時にここまで攻められるなんて
まさか知られていた!?

でも人間がこっちの情報を得られる筈ないし……

「浄化完了しました！」

「救助完了しました！」

「よし、第三部隊は民の避難にあたって。残りは人間達を追い返して、できるだけ殺生は避けてね！」

『はい！！』

「全部隊突撃！」

『わあー！！』

これで一先ずは安心だわ

「魔王様、後ろ！！」

「えっ？」

後ろを振り返ると誰かが斬りかかってきた

ガチン

「くっ」

「……………ふーん、大した洞察力、判断力、瞬発力だ。流石は《ゲノムルーツ》の魔王だ」

……………なんて重い一撃！？咄嗟に魔力で腕を覆わなければ確実に腕が折れてた

「あ、貴方は？」

「名乗る程の者でもないですよ。ただ、貴女の敵ではないので御安心を」

「いきなり斬りかかってきて敵じゃないって言われて信じると？」

「それもそうですね。ではあの人間達を元の世界に帰しますよ」

そう言うと、ロングコートを風に靡かせてる男は戦場の方に向いた

「転々とする鳥、かの者達を帰るべき場所に帰し給え。『ストロングポート強制転移』」

「

パチン

シュワ！！

「!？」

男が指を鳴らしたら人間達はいなくなってた

「何したの？」

「安心して、殺したわけじゃない。自分達の世界に帰したただけから」

「……『強制転移』。貴方も何処かの世界の魔王？」

「俺自体は魔王じゃない。ちよっと主の指示でこの世界に来ただけさ」

「主つて？」

「『この前の書類の返事はまだ？』って言っていましたね」

「あっ！！そういうこと」

確かエレスナーグにそんな事を言われてたわ

「それじゃあ伝言も伝えだし、貴女の力も理解したし帰りますね」

「うん、助かったわ」

「いえ」

そう言ったと思ったら、もう何処かに消えていた

「あっ、名前聞いてなかった」

出会いメフィスト（後書き）

街の民に聞いてみた

「ゼレカさん？強くて、謎めいてる不思議な方です」

「魔王様をいじめるのが好きな、ちょっと危ないひとですね」

「全身真っ黒の怪しいひと」

デ「こんな結果だった」

ゼ「そう思われていたのか……………」

幻惑・困惑・疑惑（前書き）

そろそろ番外編をやりたいです

幻惑・困惑・疑惑

「さてと」

エレスを部屋に置いてさっさとでてきたけど、何しようかなー

さっきのエレスの真っ赤な顔、可愛かったなー

「ん？」

おかしい……………

この廊下のデザインも構造も全部同じだが、さっきから全く前にすすんでないようだ

「……………『真実の瞳』」

『夢幻の瞳』を使う

すると絨毯に瞳が反応した

「……………分かってるんだぜ、ヴォルケノ
なにもない筈の絨毯に声をかける

「流石ですねゼレカさん」

絨毯から赤い煙りが立ち上る

「あの程度の幻術では欺けませんか」

「ふつ、生憎と俺は脳や精神に作用する術や技は効かないからな」

煙りがひとの形を形成していく

「そうなのですか。なら私は貴方には勝てないですね」

「よく言うぜ。お前の最も恐ろしい能力は……」

「すとつぷ！それ以上言わなくていいです。あの姿は好きじゃないんですよ」

小さなロリ少女が言つと真実がますぜ

「それよりもアシユラにはいきなり斬りかかったのに、私には斬りかからないんですね」

「俺はアシユラやヴァジラ、『あいつ』には恨みがあるがお前には無いからな」

「あら……意外と冷静なんですね」

「種族で差別する、なんてことは好きじゃないからな。悪魔にだって下衆な奴もいるし、天使にだって優しい奴もいるからな。もちろん人間にだって」

「……………強いですね」俺に聞こえるか聞こえないかの声で言った
もちろん聞こえたけど

「強いわけじゃないさ。ただ、それぞれの個性をみてるだけだ」

「それぞれの、個性？」

「ああ。力の強い天使や魔力の無い悪魔がいても不思議じゃないさ」

「……………」

「おっと、ごめんごめん」

「謝る必要は無いですよ。……………私は」

何かを伝えようとしている

でも躊躇っている目だ

そして意を決したように見つめてくる

「……………私は『天使』なんですから」

「うん、知っているよ」

「……………そう、だね」

何処か寂しげに返事をしてくる

「じゃあ私そろそろ帰りますね」

「……………ああ。またな」

「はい、また……………必ず！」

そう言って消えてしまった

幻惑・困惑・疑惑（後書き）

街の人に聞いてみた

「葉月さんの息子さんは毎日毎日怪しげな事をしてますね」

「零花？はっ、きにいらねえ奴だ」

「最近変な物音がして何やっているやら……。この間も異臭騒ぎをおこしてたし…」

ゼ「って、人間の時の評価も今と変わってねえ!!」
デ「実際は料理とか発明とかしてるだけなのにな」

悪戯夢 壊れる日常 (前書き)

もっと甘い話を考えたいです

悪戯夢 壊れる日常

「はあ……………はあ……………」

行かなきゃ

「はあ……………くっ……………」

行かなきゃ、皆が

「はあ……………はあ……………」

早く、早く！

「あれ？皆帰らないのか」

「あつ零花。今日はそれぞれやらなきゃいけない事があるから」

「華^{かなえ}娜衣以外はな」

「華娜衣に変な事しないようにね」

「しないって。全く、相も変わらず梨絵は心配性だな」

「親友として心配なだけよ」

「そうかよ」

「そういえば多矩夜は何処行ったんだ？」

「……………ヒント、お前が渡した物」

「ああ……………」

「じゃ、またな」

「おう、また明日」

華娜衣を迎えに教室に行く

「……………また、『明日』か」

「……………英司」

「あつ零花」

「悪い、待った？」

「うっん、今来たところ」

「ならよかった」

「……………何だろっ？」

「……………何か胸騒ぎがする」

「ねえ、零花」

「なに？」

「ちょっと、話があるの」
「そう言い机の上に座る」

「話して？」

「……もし、もしだよ。もし……私が……零花のことが好きって
言ったら……どうする？」

「どうするも何も、今まで気付いて無いと思ってた？」

「え？」

「というか、英司にも梨絵にも多矩夜にも全員に気付かれてたよ」

「ええー！！」

「ふふ、俺も君が好きだよ。君と出会った時から、ずっと」

「……何言ってるんだ、俺」

「この空気に押されて本音がでちまったな」

「……零花／＼／」

「……俺を呼ぶその声に照れと……悲しみの表情があるのはなんで
だ？」

「……ありがとう。零花、零花」

華娜衣の両目からつつすらと涙がでる

「おいおい、泣くなよ」

「零花、ありがとう。……幸せに……生きて」

「？何言ってる……」

バタン！

「……………ごめんね零花、……………さよなら」

「ハッ！」

華娜衣は何処に？

……………胸騒ぎがする

「くっ！」

急いで走る

何処にいるか分からないけど、とにかく走る

「華娜衣…英司…梨絵…多矩夜」

何処に行こうとしてるのか自分でも分からない

だけど、足が勝手に進む

「はあ……………はあ……………」

『……………ラストーロ』

悪戯夢 壊れる日常 (後書き)

城の使い魔に聞いてみた

「エレスナーグ様？魔王様はとても優しい方ですよ」

「民にも私達にも誰でも分け隔て無く接して頂けますし」

「御側にいられて幸せです」

デ「お前とは真逆の評価だな」

ゼ「当たり前だ」

出会い〜アスタノト&mp・ベルゼブ〜(前書き)

今回の話は視点を決めてないので地の文がないですよ

出会い〜アスタノト&ベルゼブ〜

「姫様、次の謁見です」

「レイレイ、確かに私『困ってる民の願いを直接聞く!』』と言ったけど、こんなに多いなんて聞いてないよ」

「明日までですから頑張ってください。それより次の謁見ですよ」

「むう〜」

カツカツ

「どうも。お初にお目にかかります、ゼレカ・ステイルと申します。我が主より託された書状をお持ちしました」

「主って?」

「我が主は《ニンブルケティック》の魔王です」

「ああ〜エレスの」

「はい。今回の同盟締結に賛成するとの事です」

「姫様、いつの間にそんな約束を?」

「ちよっと前に『敵対してるわけじゃないし、同盟結んじゃお』って約束した」

「……………そうですか」

「えっと、ゼレカだっけ。書状を見せてくれる？」

「はい」

「では、私が受け取ります」

「いや、私が読むからいい」

「ですが……」

「私が読む」

「……わかりました」

「……うんうん、……よくわかった。じゃあ私がサインして
同盟締結だね」

「よろしいので？ベルゼブ様に報告しなくても」

「魔王は私だよ」

「そうですね……」

「じゃあこれで同盟……」

「……待て、アスタノト」

「……ベルゼブ様……」

「うゅっどづしたの」

「……同盟なんか結ばなくても大丈夫だ」

「でもいざって時に…」

「……強いのか弱いのかも分からないのに『いざ』って時どうなるか分からないだろ」

「……………」

「……………ふう、あんまし他の世界の事情に首突っ込みたくないけど、同盟を認めてもらえないか『幻惑の大魔王』ベルゼブ」

「……………俺を知ってるのか」

「そりゃ普段は表にでなくても、『大魔王』なら魔力で分かるさ」

「……………お前誰だ？」

「俺はゼレカ・ステイル。『夢幻』のゼレカって言えば分かるかな」

「『夢幻』！？あの男が!？」

「へえ〜」

「それで、話しを戻すけどどうやってたら認めてくれるんだ？」

「……………そうか、『夢幻』か。……………バハムートを殺った……………なら話しは簡単だ。俺と闘え」

「なっ、ベルゼブ様何おっしやって!？」

「ほお、分かりやすいな」

「……………いくぞ」

出会い〜アスタノト&ベルゼブ〜（後書き）

城の使い魔に聞いてみた

「とても冷静で忠実に主にお仕えする姿が、正に私達の鏡です」

「頼まれた事は最善・最速で処理する能力の高さ」

「主様に負けず劣らず信頼が高いです」

ゼ「……………」

デ「凄いな、ソルの人気」

ゼ「俺、何かした？」

デ「さあ？」

水浴び（前書き）

初めて原稿書いて投稿してみました

水浴び

「……暑」

「あついな」

「何だつてこんな暑いんだ？」

「今日は年になんかいかの『熱砂の流動』だから、地表のおんどが急激にじょうしょうするんだよ」

「年に何回かつて、こんなのが何回もあるのか……」
「そうだよ」

「……じゃあその度に今みたいになるってことか？」
「うん」

……『熱砂の流動』の度に一緒に水浴び、か

俺の理性 & amp; 平常心がどこまで持つかな……

今日は暑いから露天風呂の隣に穴を創つて魔力（水）を流し込んで水風呂を造った

エレスに「入れば？」って聞いたら「うん」て言ったから気に入ってくれて良かった………と思つてたら、服を掴まれて俺も入らせられた

「一応タオルをお互い巻いてるから大丈夫（限度があるけど）」

「今更だけど目隠ししなくていいの？／／／」

「む、ほんとゼレカはお風呂とかは照れるよね。部屋ではそんなことないの」

「そういう君は俺とは逆だよね」

「つまり、ここならあなたを弄り放題 ってことだよな」

「……………は？」

ガシッ

「っーかまーえた」

「ちよっ／／／エレス！？／／／」

いきなり肩を掴まれてエレスの方に向き直される

「ゼレカ、私のタオルはだけさせていい？」

「ま、ままま待った、いったたたいなな何を！？」

「ふふっ、やめた方がいい？」

何かを企んでいる目だけど、やめさせないわけにはいかない

「もちろん」

「じゃああ、キスして」

「え？」

格好が格好だから緊張する

「……はい／＼／」

そっと口づけをする

「……部屋戻ったら酔わせてやる」

聞こえるか聞こえないかの声で言った

「ん？」

「何でもないから楽しみにしてな」

「うん？」

水浴び（後書き）

デ「いい加減評価祭も飽きてきたので、いつも通りの後書きに戻します」

ゼ「……俺限定でいろいろえぐられたけどな」

デ「まあ、基本初めてお前のこと見たらドSか鬼畜かにしか見えな
いもんさ」

ゼ「それとこれは別問題じゃね？」

デ「『面接は始まって十秒で決まる』っていうじゃん。それと同じ
で第一印象で大体決まるって事なんだよ」

ゼ「……そんなもんか？」

デ「そんなもんさ」

仕返し(前書き)

祝五十話

仕返し

水風呂から上がって部屋に戻る

「氷解、凍結、凍てつかせる。『ダイヤモンドダスト氷の嵐』」

「詠唱を変えるだけでここまで威力がさがるんだね
「俺が独自に創った詠唱だからな」

「はあく涼しい」

……………ニタア

「エレス、口開けて」

「？」

不思議がりながらも口を開けてくれた

ポイツ

「……………あまい。これっ……………」

目がとろんとなってる

「気分はどう、エレス？」

「え！あ、あのゼレカさん」

前に作ったチョコレートを食べさせたから、今酔ってるね

「あ、あの、ち近いんですけど……」

「さっきもこうしてたじゃん。君の方から」

「そ、それはそうですけど……」

ギョウツッ

「ひあっ!?! な、何して……」

「何って、抱きしめてるだけだよ?」

「あ……う……そうですね／＼／」

「さっきはほとんど裸で抱きしめたのに、これで恥ずかしいみたいだね」

「……あつ／＼／」

顔が真っ赤になって今にも倒れそう

「………ねえエレス。最近よく夢をみるんだ、昔の事の」

「昔、ですか?」

「うん。この世界に来る前の事。なんでだと思っ?」

「私は夢についてはあまり詳しく無いので分かりませんが、夢は願望や思い出等を寝ている時に見るらしいですよ」

「……………願望か。確かに当たってる」抱きしめてる体勢から横になる
「でも、俺は後悔しないように生きるって言ったから。……………君を守るって、誓ったからね」

「ゼレカさん……………」

「と、まあ嘘の夢の話は置いていて」

「嘘だったんですか!?!」

「エレス、今がどういう状況か分かって?」

俺がエレスを押し倒してるような格好

「……………/ / /」

「とっても可愛いよ その怯えた様な潤んだ瞳」

「ぜ、ゼレカさん。何か怒ってません?」

「さっき風呂場で攻められた事なんて気にもしてないよ」

「……………えっと、すいません」

「謝らなくても怒ってないって。でもせっかくだし、このまま朝までじじしてあげよう」

「朝まで!?!?!」

「おやすみ」……お、おやすみなさい／＼／

仕返し（後書き）

ゼ「もう、何も失いたくない。何もしてないのに、ただ在るだけなのに消える運命なんて！」

ア「主……」

ゼ「力を得ても、力が無くても、結局は同じなんて！でも俺は、力が無くては助けてみせる。俺がたすけるんだ！」

ア「主よ。嫌いな物があるからと言って捨てては駄目だぞ」

悪戯夢 終焉と始まり (前書き)

悪戯夢編終わりです

悪戯夢 終焉と始まり

「はぁ……………はぁ……………」

……………走りながら考える

これは夢だと

でも、本当にあつた『葉月零花』の思い出。『葉月零花』の……………最後

「はぁ……………あそこだ！」

身体は自由がきかない

俺の身体じゃないみたいだ

「華娜衣！」

角を曲がって路地に入る

俺の目に飛び込んできたのは赤い水溜まりだった

「!?!」

「あん？誰だお前」

「まあ誰であつても見逃すわけにはいかないけど」

白い服に身を包んだ男が三人いた

「華娜衣！英司！梨絵！多矩夜！」

皆の身体は紅く染まっている

「なら、さつさと始末するか」

「待てよアシユラ。俺にやらせろ」

「止め給えヴァジラ、アシユラ」

「お前等！いったいみんな……なに……」

ザクッ！

斬られた

アシユラでもヴァジラでもないもう一人の男……いや『天使』に

ドサッ

「どうだい？胸を斬られた感覚は」

「はあ……んっ……か」

「はっ、ざまあねえな！威勢のよさはどうした？」

「滑稽だね」

「て……めえ……ら……みんなに……何……しやがっ……た」

「ほう、まだ喋る力があるか」

「でも駄目ですよミカエル様。こんなのに死にますよ」

「散り際の気力でしょう」

ミカエルは少しだけ口元を上げる

「おもしろい。最後の気力とやらを見てみたいな」

「はあ……………はあ……………」

ミカエルは華娜衣を俺の前に連れてきた

「彼女を助けたいか？」

「華娜…衣」

「今ならぎりぎり間に合う。早く治療し給え」

……………

「まだ……………生きて」

「ああ、まだ生きられるとも。今治療すればね」

「くっ……………」

全身に力を込める

無理矢理立ち上る

「はぁ……はぁ……」

自分の胸からも出血してる。関係無い

「華娜衣……今……病院に……」

ドスッ

「がはっ！」

華娜衣ごと俺を貫く

そのまま力無く倒れる

「て……てめ……え……」

「おや失礼」

「相変わらず酷い趣味で」

「ミカエル様、他の奴ら全員止め刺しといていいですか？」

「構わないよ」

「や……やめ……！」

ドスッ

ザクッ

グチャ

「!?!」

「ひっひっひ、どんな気分だ?」

「み……んな……」

「そろそろその彼女とお別れだよ、葉月零花くん」

「なん……で……俺の……名前………知って」

「だって、君が彼女達の友達だから」

アシユラが憐れむような目で見下す

「君が彼女達と一緒にいなかったから、私達は『今』彼女達を楽に消す事ができた。私達にとっては恩人てこと。その恩人の名前を知らないわけないじゃないか」

「……!」

「私からも礼を言う。君が今、彼女達といたらあと十年は消すチャンスが無かったからね」

「つまりはお前がこいつらを殺したんだよ」

「!?!……俺が……殺した……」

「でもお前は運が良い。その罪を償うのに『天使三人』に償わせて貰えるんだからな!」

「……………」

ミカエルが剣を振り上げる

「さらばだ、罪人よ」

……………この時、俺は絶望した
世界の全てに

自分自身に……………」

悪戯夢 終焉と始まり (後書き)

そして始まりの会話へと続く……

対話（前書き）

この話まで書けたので、もう何時でも先に進められます

対話

『……………おい』

ん？誰か俺を呼んでる

『俺だよ、俺』

「マムート、か」

『やれやれ。起きるのにどれだけ時間かかってるんだ？』

「起きるつても、寝てるんだがな」

『そりゃそうだ』

「で、俺を喚んだからには何かあるんだろ？」

『……………強い魔力を感じる。誰の魔力が分からないが、相当な力だ』

「……………大天使の誰かだと？」

『分からない。でも、それが誰であっても一つだけ忠告しておく』

「何だよ。何時に無く真面目だな」

『……………自分に、呑まれるなよ』

「……………ああ」

………自分に、か

『まあそれだけ気になったから伝えておく』

「とりあえず魔力が何なのか調べてみるよ」

『そうしろそうしろ。お前に死なれると、せつかく黄泉帰らせたのに全てがパアだからな』

………

『ん？何か言う事でもあったか』

「何もねえよ。じゃあな」

パアッ

『………本当に、呑まれるなよゼレカ』

………

「『カウント終了ー』………つてか？」

『ハハッ、気ヅいてたのか。よく惑わサレなかつタジヤねえか』

「……俺はもう決めたからな。『俺』として生きるって」

『生意気なこと吐かすな。ダケドナ、決めたカラ何だってンダ？何があつてモ動じないつもりか？』

「そう言つたる」

『フフツ。なあぜレカ。オマエ……………イヤ、止めとこつ。後デオモイ知らせてやる』

「お前こそ、精々俺を揺らす方法でも考えてな」

『スグニ後悔するぜ』

「言つてる」

対話（後書き）

エ「デインさん、何かないんですか？」

デ「んー、ゼレカは使えないし（夢にいるから）戦闘もなあ……」

ソ「でしたら、エレスと私の職務を紹介すればいいんじゃないですか？」

エ「ソル！良い考えだね。それに決めましょう」

デ「確かに、何時もはゼレカが入ってくるから新しいな。よし、それによろしく」

ソ「というわけですので、ストーリーはまだ先に進めませんよ」

番外編『七夕』(前書き)

即興です

番外編『七夕』

これはむかーしむかーしの話

ある所にエレスナーグというお姫様がいた

「あつちに逃げたぞ！」

「追え、追え！！」

「もう、しつこいな〜」

エレスナーグはお付きのソルーティアの目を盗んで街に出掛ける度に、身代金目当ての悪党に追われます

「あつ………！！」

「はははー！やっと追い詰めたぞ」

「おとなしく捕まってもらおう。なに、抵抗しなけりゃ乱暴はしな
いぞ」

「だったら……」

悪党が姫を追い詰めた、その時

「ギャアアアア！！」

『！？』

「何！？」

魔物の大群が顕れました

「ひ、ひい！！」

「あああ！！」

悪党達は逃げ出しました

「くっ……逃げなまぢや」

しかし、魔物達は悪党以外は追いかけてません

「何で………？」

「それは俺が命令したからさ」

そこに現れたのは魔物飼のゼレカでした

「大丈夫だった？エレスナーグ」

「は、はい」

「外はひとりじゃ危ないよ。ちゃんと護衛を付けなきゃ」

「外にでるときぐらいは、『姫』だと忘れたいから………」

「………そうか。でも、護衛じゃなくてもだれかと一緒にいた方がいい
い」

「………」

「……分かった。そんなに護衛をつけるのが嫌なら、俺が付き合
ってあげるよ」

「え？」

「君がよければ、だけど」

「いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます！知っているとありますが、私はエレスナ
ーグです」

「俺はゼレカ。それと敬語は使わなくていいよ」

「じゃあ、私のこともエレスって呼んで」

「はいはい」

こうしてふたりは毎日出会って、毎日楽しく過ごします

しかし、それを知ったソルティーアは別の国の王様に頼んでゼレカを『空の平原』に飛ばしてしまいました

「ゼレカさん、エレスとふたりきりなんて羨まし過ぎます。という訳でベルゼブさん、ゼレカを『空の平原』に飛ばして下さい」

「……いきなりとんでもない頼みごとだな」

「ベル兄ちゃんには恋する乙女の気持ち分からないからね」

「……?」

「ノノノアスタノトさん、余計な事は言わなくていいんです」

「……」

「アラちゃん、転移法陣の準備しといて」

「オツケー」

「……よくわからん」

「あつ、そうだ。メフィストお姉ちゃんが『約束が楽しみ』って言うってたよ」

「……ちゃんといくぞ」

ゼレカは他の国の王様の力(?)で『空の平原』に飛ばされてしまいました

しかしそれからのお姫様は毎日部屋に閉じこもり、食事もろくにとらなくなりました

その姿をみかねてソルは言いました

「エレス、星の力が溜まる日にだけはゼレカと会っていいですよ」

その言葉を聞いてから、エレスは次に星の力が溜まる日を待っていました

そして星の力が満ちる日、七月七日にエレスはゼレカに会いに行きました

「ゼレカ！」

「やあ、エレス。ちょっと待ってね」

ゼレカは星の力を使い、魔力で橋を掛けました

「星で出来た川、『天の川』ってとこかな」

「ゼレカ！」

「久しぶりエレス。と言ってもまだ二日も経ってないけどね」

「でも、たえられなかった。ゼレカと会えないから、毎日苦しかった」

「ふふふ、ありがとう」

と言って、ゼレカはエレスの肩に手をまわした

「俺の魔力でずっと橋を掛けてるから。何でも出来るね」

「え!?!」

そのまま押し倒した

「ちょ、ぜ、ゼレカ!?!」

「大丈夫大丈夫、怖くないから」

そして、そのまま……

「……………あれ?」

「おはよう、エレス」

「ん……………おはよう」

「随分と楽しそうだったけど、何かおもしろい夢でもみてたの？」

「……夢……だったんだ。……あんまりきのうと変わらなかったけど」

「？」

番外編『七夕』（後書き）

デ「随分とお久しぶりです」

ゼ「サボリやがって」

デ「サボってた訳じゃないぜ。試験勉強で忙しくて時間もとれなかったから、全く更新できなかつただけさ」

ゼ「そうかいそうかい」

デ「今週で試験終わるんで、来週からまた更新しますね」

予兆（前書き）

今回から誰視点か記載します

予兆

エレスナーグ vision

「突然だけどゼレカ、ちょっと行ってほしいところがあるんだけどいい？」

「もちろん。それで何処に行けばいいの？」

「ん……『紅月の荒野』にいったきり調査隊から通信がないから……」

「あー、確かに何も連絡きてなかったな」

「同行者は好きに連れて行っていいよ」

「珍しいね。一緒に行くって言わないなんて」

「今日は城の用事でいっしょに行けないんだ」

「そうか……。じゃあできるだけ早く帰るから、それまで待っててね」

「うん、きをつけて」

「……もし。もし何かあったら、俺を呼んでね」

「？」

そう言ったゼレカの顔には不安があった

「寂しくなったり、なんとなく呼んでみたいと思っただけでもいいから」

「ふふっ、じゃあそつさせてもらつわ」

「じゃあ行つて来るから」

「気をつけてね」

「もちろん」

……その時のゼレカの不安を私が知るのは、もう少し後だった

予兆（後書き）

デ「いやあ、楽しみだなぜレカ」

ゼ「何がだよ」

デ「この後の展開が」

ゼ「全く、思わせぶりな事をチラチラと。伏線を散りばめやがって」

デ「回収するのが楽しみだ」

ゼ「回収できなかったらどうするんだよ」

デ「構成は既に考えてるから万事OKだ」

ゼ「試験中にな」

デ「それを言うな」

出発（前書き）

続き物に突入

出発

ゼレカ vision

「アルフォート」

「呼んだか？主よ」

「お前もシェイドがやったみたい、ひと形になれるか？」

「もちろんだ。というよりも、普段からひと形に近いが」

「それはそうだけど、シェイドはぱっと見では魔獣って分からなかったからな。あいつの弟なら似たような事が出来るかなーって思ってたさ」

「その程度なら普段からしてやれる」

そう言っつてアルフォートの体が光った

「……………これでよいか？」

「あー……………。本当に普段とあんま変わらないな」
確かに、普段も魔獣だって全然分かんないけどさ

予想と違っつたな

「まあいいか」

「ところで主。何故我にひと形になれと？」

「もうひとり連れて行きたい奴がいるから」

「もうひとり？」

「ヒント、俺の直属の部下」

「……………ああ。あやつか」

フラワーハウス

「あつぜレカさん、おはようございます」

「おはようさん。で、バルチス。今日は魔物の管理しなくていいぞ」

「本当ですか!？」

「だから今すぐ遠征の準備をしろ」

「……………え？」

「『紅月の荒野』に行くから、大体二・三日の用意な」

「……………ええー!!」

出発（後書き）

デ「相互紹介やっていきます」

ゼレカ エレス

ゼ「特別な恩人であり俺の主で大切なひと」

エ「大好きなひと」

ちょっと休憩？（前書き）

暑い…

ちよつと休憩？

バルチス Vision

どうも、バルチスです

突然ゼレカさんに「遠征の準備をしろ」と言われ、無理矢理連行されました

「どうしたバルチス？独り言が多いぞ」

「……何でもないですよ」

「そうか？」

「主、右方向に数匹の生存反応だ」

「え？」

「オーケー、じゃちよつとバルチスと一緒にいてくれ」

「承知」

「そういう訳だからアルフォートと待ってる」

「あつゼレカさん」

……行っちゃった

「主なら大丈夫だ」

「え、あっあの……」

「申し遅れた、我はアルフォート。主のけいや……部下だ」

「あっどうも。フラワーハウスの管理者のバルチスです」

な、何か気迫がすごいひとだなあ……

「どうした？気軽に接してくればよいぞ」

「そう？」

「……本当に気軽だな」

「あ、ごっごめん……」

「いや、それぐらいで構わないぞ。むしろ主と同じ様に我に接してくれた方がよい」

よ、よかった

怒られるかと思っただよ

怖いひとじゃないみたい

なら、もっと僕を知ってもらおう

そうだ

「じゃあ、僕にも普通に喋っていいよ」

これでどうだ

「折角の提案だが、我はこの話し方が普通なのだ。主が話す様な話し方は逆に難しい」

「そ、そうなんだ……」

まずかったかな……

「ふっ。でも、良い提案だと思っぞ」

「そうだった？」

「ああ」

何か、話してみると優しいひとだなあ

「主」

「じよ」

「どのような戦果だった？」

「魔物つっーか機械人形マシオンが何体かだった」

「機械人形？ 神殿防衛人形じゃなかったか」

「神殿防衛人形で……ゴーレムって言えばよ」

「ふむ、今はそういうのか……」

お話しについていけません……

「どうだったバルチス？」

「どうとは？」

「アルフォートと話してたんだろ。こいつは初対面の奴には警戒を怠らないから、喋るのも一苦労だったろ」

「いえ、そんな事はないですよ」

「……………」

「ほう。珍しいなお前が気迫を出さなかったなんて」

「……………別段出す必要が無かったただけだ」

「ふーん」

「そつそれより、マリオネットなんて倒したんですか!？」

「あんなの一撃だぞ」

「……………」

前々から思っていましたけど、ゼレカさんって化け物クラスですよ

……

「そんな誉めるな」

「く、口に出てました？」

「読心術だ」

「勝手に読まないでくださいよ！」

「はいはい、さっさと行くぞ」

「御意」

「ちよ、速いですって……！」

ちよつと休憩？（後書き）

エレスナーグ ソルーティア

エ「頼れるお姉ちゃん」

ソ「可愛い妹」

寛ぎまじょう(前書き)

バルチス君の秘密公開

寛ぎまじょう

ゼレカvision

「……」

あと丸一日いや、半日もあれば紅月の荒野にたどり着くな

さっさと終わらせて城に戻りたいんだよな……

『強い魔力を感じる。誰のかは分からないが、相当な力だ』

「……」

……マムートに言われた事が変に気になる

「……さん」

やっぱり、早く戻らないとな

「ゼレカさん！聞いてます?」

「何も聞いて無かった」

「聞いてくださいよ!」

「はいはい。で、何?」

「少し、休憩しましょうよって言ったんです」

「構わないけど……」

「はあー、疲れました」

「此処は一部で『マリオネットの処刑場』って言われるほどマリオネットが出て来るから危ないぜ？」

「それを先に言ってくださいよ！」

あれ？言って無かったっけ？

「聞かれなかったから答えなかった」

「それなら先を急ぎますよ」

「おう」

「……………」

「どした？」

「いや、あの者は随分と魔物に気に入られてるなと思ったのでな」

「バルチスだろ？あいつ、魔力も大して無いし身体能力も高く無いけど、魔物に好かれる能力だけはあるんだよ」

「本来ならこの辺りなら機械人形がわんさか出て来る筈だからな。ここまで遭遇しないのは初めてだ」

「あいつ自身自分の潜在能力に気付いてるか知らないけど、その力を使いこなせるようになったら『準魔王』クラスの力は出せるぜ」

「おもしろい者を部下にしたものだな」

「だろ？」

「ゼレカさん、アルフォート。早く行きましょうよ！」

「おっといけないいけない。じゃバルチス、先行ってるわ」

「速過ぎですよ！！さっきまで結構後ろにいましたよね！？」

「はっはっはー」

「はあー」

バルチスをおいて先に宿屋に来た

まあアルフォートと一緒にだから、山賊に襲われても平気だろう

あいつ強いし

ガチャ

「はあ、はあ、疲れました」

「遅かったなバルチス」

「それは、そうですよ。速過ぎ、です……」

「テレポートを使わなかっただけましだろ」

「そういえば、何でテレポート、使わないんですか？」

「何の為に紅月の荒野に行くか知ってるか？」

「調査隊の確認ですよね？」

「何で確認しに行ってる？」

「え……通信がないから……あっ！」

「通信がない、すなわち妨害されてるからだ。妨害されると跳べないんだよ」

「そんな欠点があったんですね」

「万能な魔法なんてないからな。ところで、アルフォートは？」

「宿屋まで一緒だったんですよ」

「呼んだか、主？」

おい……何だその格好……

「何でローブなんだ？」

「シャワーを浴びてきたのだ」
「ですね」

「バルチスも入るといい。汗をかいただろう」

「そうするよ。じゃあ入ってきますね」

テクテク

バルチスが部屋から出ていった

「……………アルフォート、お前結構寛いでるな」

「我はいつもこうだが？」

「そうですか……………」

寛ぎましょう(後書き)

ソルティア アルフォート

ソ「頼れる方です」

ア「信頼に足る方だ」

齋された真実（前書き）

シリアス全開！

糖度が足りない……

齎された真実

ゼレカ vision

「ふう、やっと着いたか」

と言っても、予定よりかなり早く着いたけど

「バルチス、調査隊の手掛かりになるものを探すぞ」

「分かりました……けど、少し休ませてください」

「まあ、あの山越えは厳しかっただろうからな。どこかに腰を下ろして、周りを確認してくれればいいさ」

「ありがとうございます……」
さすがに疲れがみえるな

しかしまあ、バルチスがいてくれたおかげで余計な魔物と戦わなくてすんだぜ

「主、我は上から見てくる」

「ああ、任せる」

「御意」

「さてと、俺も探すか」

……『紅月の荒野』

……『相当な力のようだ』

なんでその二つが引っ掛かるんだ……

「ゼレカさん」

「ん？」

「変なナイフが落ちてたんですけど」

ナイフ？

「何でナイフなん……か……」

……このナイフ、まさか

「『聖堂の短剣』！」

そうか、だからあの時アシュラに『暗黒の楽園』が効かなかったのか……

「何ですか？」

「天使の武器の一つさ。これは悪魔の力を乱す、いわば『悪魔殺しの武器』だ」
デモンキラー

「デ、デモンキラーって神の法具ですよね？」

「ああ」

……ちつ、連合会議の時に刺されてたか

「じゃああいつが……」

「どうしたんですか？」

「ん、ああ。いや、ただ今回の黒幕が分かったただけさ」

「黒幕って、人為的な事だったんですね……」

「多分そうだろうな」

「こりゃあ思ったよりもやばいな……」

「主、やばいぞ。調査隊が神殿防衛人形に追われてたぞ」

「ゴーレム……ああ、そういえばあいつらは身体から電磁波がでてたなあ。じゃあさっさと倒して帰ろうぜ」

「一応は殲滅しておいたぞ」

「おっと」

……アルフォートの一言に転倒しそうになった

「そういうことは先に言えよ。ずっとこけるところだったぞ」

「それは見てみたかったな」

「あははは……」

バルチス、お前の笑いがやけにグサツとくるんだが

「まあいいさ。バルチス、アルフォートと調査隊のところに行つて
る」

「はい」

「御意」

……ふたりとも行つたか

「はあー、全く……」 剣を創造する

ガキンッ

「嫌な予感的中したぜ、アシユラ！」

「そうかい？」

振り向きざまに斬り掛かったが、アシユラの剣に止められた

「ああ、あの時お前が紅月の荒野（この場所）にいたわけもなあ！」

そのまま斬り上げる

アシユラは吹き飛ばされながら体勢を戻し、空中で止まる

「ふっ、本当にか？」

「ああ？」

「本当に全て理解したのかと聞いてるんだよ」

「……………どういう事だ？」

「君が全て理解しているなら、君は僕に斬り掛からなかった。なぜだか分かるかい？」

「知らねえよ！」

……………焦るな、気持ちを落ち着ける

怒りのままに行動したら『あいつ』の思いつばだ

「くっくっく……………、そろそろ教えてあげるよ。そのわけを」

「……………」

「おそらく、僕が此処に居た理由は合ってると思うよ」

「お前が、会議にいた何処かの魔王と手を組んで俺をおびき寄せる為だろ？」

「正解さ」

「……………その魔王は俺達の中の誰かを狙ってた。違うか？」

「ほう、そこまで予測しているとは思わなかったよ」

「それと……」

『聖堂の短剣』をみせる

「俺の魔術が効かなかったのはこれのせいだ」

「あー、そこにあっただんだそれ。あいつ、回収しておけって言ったのに」

「これでもまだ理解してないって言うのか？」

「ああ、もちろん。肝心の事が理解出来てないみたいだ」

何時から掛けてたか知らないが、眼鏡の位置を直す

「肝心の事？」

「もし、君がそれを知ってたら僕に斬り掛かってこなかったってやつさ」

「……………」

「今、こうして僕と話してる事があいつの狙いなのさ」

「ヴァジラの？」

アシユラの眼光が鋭くなった

そして……

「ふふ、あいつが君の主を殺すまでの時間稼ぎ。それが僕の役目さ」

「なん……だと!!」

「それじゃあサヨナラ。ゼレカ」

ふわっ

「……くっ!!」

だから……

「アルフォート!!」

「何だ?」

「バルチスと調査隊連れて戻ってこい。ゆっくりで構わない!俺は先に行く!!」

「承知」

テレポートで城に跳ぶ

「……エレス、無事で居てくれ!!」

齋された真実（後書き）

アルフォート バルチス

ア「おもしろい男だ」

バ「怖そうだけど優しい」

番外編『狼と七人(?)の子山羊』(前書き)

ユニーク10000突破記念です

番外編『狼と七人(?)の子山羊』

デ「昔むかーし、あるところに一人の親山羊（悪魔）と七人の子山羊（悪魔）がいました。山羊なのに一人？って疑問はスルーでお願いします」

ソ「じゃあみんな、私はお買い物に行くからお留守番をよろしく願います」

エ「はい」

アス「きをつけてね」

ソ「はい」

メ「私も行こうか？」

ソ「私一人で大丈夫ですよ。でもありがとう、メフィスト。それと、最近はこの辺りに狂暴な狼がでるから気をつけてください」

アル「凶暴ではなく、狂暴なのか？」

アラ「なんかおもしろいわね」

ソ「私以外の人に扉を開けてはいけませんよ。それでは」

ガチャ

アス「狼か。怖いね」

メ「恐がってないよね」アル「鍵を掛けなくてはな

アラ「どんな狼だろうね」

ベ「……興味は無い」

ゼ「……………」

エ「どうしたの？」

ゼ「誰が狼役だろうって考えてた」

エ「たしかにそうだね。後出てないのは……………」

コンコン

扉を叩く音がします

アス「はい」

メ「アスタノト、あけちゃ駄目って言われたでしょ!?!」

アス「おもしろそうだから開けてみようと思ったの」

アラ「それはそうね」

アル「と言いつつ開けようとするのはどうかと思っが」

するとエレスナーグが聞きました

エ「誰ですか？」

アシ「世界一美しい狼です」

ゼ「……………お前か！」

アシ「さあ、子山羊達。僕の胃袋を満たす為にこの扉を開けてくれ
給え」

ベ「……………偽るところか正体丸だしできたな」

ゼ「基本バカだからさ」

アシ「聞き捨てならないね。なら、待ってなよ」

タッタッタ

アス「帰っちゃったね」

ゼ「まだいると思っ」

アラ「私達を狙ってるみたいね」

メ「ど、どっしよっ？」

ベ「……………恐いのか？」

メ「恐くない、って言ったら嘘になる」

ベ「……………」

ギユッ

ベ「……………だったら、俺の傍に居ろ。……………俺が守ってやる」

メ「ベルゼブ……………」

アス・アラ「……………」

バンッ

アシ「お楽しみ中失礼する」

ベ・メ「……………／／／」

アル「なに！？」アス「わぁー、狼が入ってきた」

アシ「鍵が開いてたから失礼させてもらったよ」

ベ「……………どっするっ？」

アル「ある……………」

ゼ「エレスが恐がってるみたいだからさっさと追い出す」

とゼレカが剣と銃を手にしていました

アラ「よいしょ、っと」

アシ「ん？なに……を！！」

アラクネが扉を開けたらゼレカが狼と一緒に外に行ってしまいました

エ「あっ……」

バゴン！

ガギン！

パンパーン！

アル「派手にやってるな」

アス「何してるんだろ」

アラ「見なくても分かるけど」

ビチビチビチ、バースーン！

ベ「……」

メ「ベルゼブ、どこ行くの？」

ベ「……手伝ってくる」

ガチャ

ガタン

パンパンパン!

ドキーン!

外の音は更に激しさを増しています

エ「ゼレカ……」

ガチャ

ゼ「はあ……はあ……助かったぜ、ベルゼブ」

ベ「ふう……ふう……と言ってももう終わりかけた」

エ「狼は？」

ゼ「ボロボロにしてやった」

家の外

アシ「きよ、今日のところは負けを認めますよ」

と言って帰っていった

家の中

エ「ゼレカ、怪我してない？」

ゼ「大丈夫だよ。心配かけてゴメンね」

エ「よかった……」

こうして、七人の子山羊達は狼を倒しましたとき

そして帰ってきた親山羊と幸せに暮らしましたとき

デ「ふう、疲れた」

番外編『狼と七人(?)の子山羊』(後書き)

デ「ゼレカ視点からエレス視点へ、という時に解析してみたらユニークが10000突破しました！」

ゼ「またうまい具合に区切りがよかったな」

デ「ホントですよ。本編はドシリアスなのに、そんなのお構いなしでふざけてたからギャップありすぎ」

ゼ「直前まで真面目だった奴をふざけて出したしな」

デ「ホントはあの役ヴァジラにやらせようかと思っただけど、流石にそれはなーって事でアシユラにしたんだ」

ゼ「……………それはまずいよな」

デ「それでは」

ゼ・デ『ありがとうございます…!』

緊張？無いですよ（前書き）

シリアスモード突入！………しませんが

緊張？無いですよ

エレスナーグ vision

ゼレカがフラワーハウスにいる時

「はあ、行っちゃった」

「もう出発したの？」

「あつ、ソル。いつのまに」

「いまきたところよ」

「ぜんぜん気がつかなかった」

これでも私、気配を感じるちからはけっくつあるのにな……

「ゼレカは部下をひとり連れて行ってくつて」

「部下……ああ、彼のこと」

「知ってるの？」

「知らないよ」

「あはは……」

「それよりも、貴女宛の手紙がきてたわよ」

「手紙？だれからだろう」

ソルにわたされた手紙を開けてみる

「え〜っと……………」

シャクガからだ

「……………！？」

ガクンッ

私はそのまま床にすわりこんだ

「どうしたの、エレス！」

「……………シャクガ…からの手紙……………だった」

「シャクガ……………妖精族の友達の？」

「うん……………」

手紙の内容が……………私にしょうげきをあたえた

「なんて書かれてたの？」

……………言おうかどうかまよってた

でも、これがほんとうなら言わないわけにはいかない……………

「ソル。私……」

「大丈夫よエレス。落ち着いて」

「私……」

決心してソルに言う

「私、シャクガに胸のおおきさで負けた!!」

「!!エレス……」

妖精族のシャクガに負けるなんて……

「胸の大きさなんて些細な事よ。特に、ゼレカは全く気にしてないでしょ？」

「そうかな……」

その頃

「はつくしよん！」

「風邪か、主よ？」

「体調管理にはきをつかってるんだけどな」

「でも、ゼレカが胸にきょうみが無いのは知ってるけど……………」

「あっ、そういえば胸を大きくする方法ってあるわよ」

「えっ！そんな方法があるの！？」

「ええ 昔から言われてる方法だけど結構効果があると思うわ」

「どうするの？」

「胸を揉むのよ」

……………なんだろう

ソルの笑顔がこわい……………

「それじゃあ早速試してみましょ」

「じ、自分でするからいいや」

……………とりあえずにげた方がいい気がする

「自分でじゃ効果が少ないと思うわ」

「だいじょうぶ……………。それより今日の仕事は……………」

「今日の仕事はありません」

「いつもあんなにあるのに!？」

「ありませんよ」

にげようとしてたのに、いつの間にか背中にも手で手をまわされてる

「久しぶりですね。こうするの」

「ソ、ソル。待つ……」

「大丈夫ですよ」

「だいじょうぶじゃないよ」

緊張？無いですよ（後書き）

バルチス アラクネ

バ「どうか見つかりませんように……」

ア「見覚えが？」

安らぎ（前書き）

更新ペースがばらばらです

安らぎ

エレスナーグ vision

「あははは！それは大変だったね」

「笑い事じゃないよアスタノト」

私とアスタノトはバルコニーでお茶をしている

「確かに昔からエレスって身体は成長してないよね」

「そ、そんな事ないよ！それは背も大して伸びてないし胸だってそうだけだよ」

「でも心は成長した。それは絶対だよ」

「そう、かな？」

自分じゃあんまり分からないけど

「そうだよ。だって昔は他人を信じるなんて滅多にしなかったもん。今じゃ考えられないよ」

「確かに……」

「それって、やっぱりゼレカさんの影響でしょ？」

「そうだと思う。ゼレカと一緒にいて安心はあったね」

「安心………そうだ、エレスに聞こうって思った事があるんだけど」

「ん？」

紅茶をすする

「ゼレカさんとどこまで進んだの？」

「…！ケホツ、ケホツ、いきなり何聞くの／＼／！」

「だってかれこれ三月ぐらいたったでしょ？それに世話係って役なんだからそういう事も……」

「そ、そんな事………してないよ／＼／」

アスタノトは満足したように笑う

「へえ、まさかそんなとこまでしたんだ」

顔が真っ赤になってるのが分かる

「な、何もしてないって／＼／そ、それよりあなたはどつなの？」

「私？私は毎日無理矢理兄ちゃんを拉致して……」

「やっぱりいい！言わなくていい！……」

あのまま話してたらとんでもないことをいいそうだから止めておく

コンコン

「失礼します。アスタノト様、謁見の時間です」

「もうそんな時間？早いな」

「じゃあ私は帰るね。仕事みたいだから」

「あっ送って行くのか？」

「ううん大丈夫。またね」

「うん、またね」

時間を見ると、結構たっていた

早く帰らないと

安らぎ（後書き）

アラクネ メフィスト

ア「頼れる親友」

メ「しっかり者の親友」

魔神の姿・始まり(前書き)

シリアスあんどダーク

魔神の姿・始まり

ソル―ティア Vision

「……………」

…………… 結界ですね

この城と城下街の分離結界ですか

分離結界の用途は周りに見付からず特定の人物のみを閉じ込める

おそらく、狙いはエレスですね

しかし、今エレスはリリードネメスに行っているので好都合です

「……………そろそろ出て来てはいかがですか？」

「ほう、俺に気付くとはな」

バルコニーの上から光と共に声が聞こえてきた

その背中からは白い翼が羽えている

「天使！？」

「ふん、そんなことはどうでもいい。赤血の魔王は何処だ？」

やはり狙いはエレスでしたか……

「何処だと聞いているんだ！あいつがゼレカを引き付けてる間に始末しちまいたんだよ！！」

ゼレカさんを引き付ける？

「……此処にはいませんよ」

なら、少しでも時間を稼いがないとは

「エレスは今別の魔界に居ます。しばらく帰ってきませんよ？」

「……ちっ、なら仕方ねえ」

殺気が消えた

「とりあえずはお前に消えてもらおうか」

……わけではないようですね

エレスナーグ vision

……ちょっと遅くなっちゃったかな？

リリードネメスからニンプルケティックまで戻るのはすぐだったけど、城下街まで戻るのが時間かかっちゃった

「…………あれ？」

誰もいない……

いつもこの時間ならひとがたくさんいるのに……

「……………」『…………もし、何かあったら俺を呼んでね』

ゼレカの言葉を思い出す

「…………早く帰ろう」

急いで城にもどる

ソル―テイア Vision

「はぁ…………はぁ……………」

「はっはは！中々楽しかったぞ女！」

強い……

魔王…………いや、大魔王並の力ですね

「くっ……………」

出血が止まらない

私の足元は黒い水溜まりのようになっている

「あと一息で潰れるな」

「そうですね……」

「魔王を始末しに来たのに、まさかここまで楽しめる奴がいるとは思いもしなかったぜ！」

「そうですね……それは光栄ですね……」

……痛みで気絶しそうですね

でも、今は少しでも時間を……

「そういえば……貴方の……名前を……聞いて……ませんでしたね……。教えて……頂けません？」

「はっ！良いだろう！俺は天使ヴァジラ！」

そういつて羽を散らせる

……エレス

無事で居て

魔神の姿・始まり（後書き）

メフィスト ベルゼブ

メ「愛してるよ」

ベ「……お前は俺がずっと守ってる」

魔神の姿・帰還(前書き)

……眠い

魔神の姿・帰還

エレスナーグ Vision

「……………着いた!」

謁見の間が見えてきた

もう少し!

ガチャ

扉を開けた

……………そこには血まみれのソルと白い羽を散らしている天使がいた

「……………ソル?」

「エレス!?!」

「ふん、やっと来たか」

「エレス、逃げて!」

「……………あなたがソルを傷つけたの?」

「だったら何だ？」

「……許さない。許さない！！よくも私の家族を！」

「……………エレス」

「『魔王化』！！」

魔力を解き放つ

私の体が黒い煙りのようなものに包まれる

パシュー！

「ふん、『魔王化』か……………おもしろいじゃねえかよ！」

「くっ……………」

またあの天使の魔力が強くなった

でも、今の私には魔力の強さなんて無視できる

「全てを包み込む闇の力、在るべきところに在るものを正し、理を示せ。『リフレクトシールド』」

この魔法を使えば少しは時間がとれる

「なんだよ、詠唱したから攻撃してくると思ったのによ。つまらねえな！砕け『ブラストファンク』！」

「……短縮詠唱」

でも、今の私には効かない

バシユ

「なに!？」

「これが私の魔法『リフレクトシールド』の能力。相手の一切の魔法を受け付けない」

もちろん、弱点もあるけどね

「一切の魔法を受け付けない、か……ふ、はは、ふははは!……い
いぜ、気に入った!なら、魔術だけでぶちやぶってやるぜ!」

「結果は見えてるけどね」

『リフレクトシールド』が破れるって、結果が

でも、もう少しで完成するから……

????? vision

「……ちっ、結界か」

直接城まで跳んだのによ

「……………無事で居てくれよエレス、ソル」

城目指して全力で走る

エレスナーグ vision

「はあ……………はあ……………」

「ふん、未だ破れないか。だけど、お前の魔力が持ちそうにないな。せつかく楽しかったのによ」

「やっぱり…破れなかったみたい…だね」

でも、もう終わり

「そうじゃねえ、破る方法が解つただけだよ」

「どうやって?」「教えてやるよ。走れ、奪え!『ライティングフレア』!」

「……………やっぱりばれたか」

「確かにその魔法は強力だけどな、弾けるのは属性が単体の場合のみだ。属性が複数なら弾けないだろ?」

「……………その通り。でもね」

『リフレクトシールド』が炎と雷を飲み込んで消滅する

その魔力が私に流れる

「なっ!!」

「弱点はわかっているから、改良したの。消える時にその魔法を魔力に変換して私に流れるように」

「だが、それでどうする？さっきの魔法はもう効かない」

「だからあなたを終わりにする」

ゼレカ、力を貸して……

「汚れし魂、その術を奪う力を行使したまえ。『冥界の揺り籠』！」

天使の周りから紫色の煙りが立ち上る

「こんな魔法を喰らうかよ！」

天使が上に飛んだ

「それを待ってたの。弾け飛べ『アルテ・エデン』！」

「その魔法は!!」

黒い球体が天使を包む

「ぐああああ!!」

パン

……ありがとう、ゼレカ

「ふう、倒した」

ペタン

「あれ？体に力が入らないや」

「エレス、大丈夫？」

「私は大丈夫だけど、ソルの方こそ危ないよ」

「少しずつ回復させてるから平気。それよりいつの間にあんな魔法
覚えたの？」

「覚えたってゆうよりも『勘』かな。詠唱もあつてたし」

「勘？」

「前にゼレカが使ってるのを見て、とっさにやってみたの」

「だろっな……」

『！？』

煙りの中から声が聞こえてきた

「まだ……倒れなかったの!？」

「あれが…完全詠唱で…魔力を…もっと込めてれば、跡形もなく…消えてたぜ」

「そんな…」

「くっ」

体も動かない…

魔力も尽きた…

「今度こそ…終わりだ!!」『エクスキューション!』」

どうしよう…

「エレス、逃げて!」

「動けない」

どうしよう…

「はぁ…はぁ…始末完了」

どうしよう…

『もし、何かあったら俺を呼んでね』

ゼレカ……

「ゼレカー！」

パスッ

「!？」

「お呼びですか？姫様」

そこには、黒いコートを着た、見慣れた、ひとがいた

「ゼレカ？ゼレカ！」

魔神の姿・帰還（後書き）

デ「やあー、お決まりパーティーンでしたね」

ゼ「そうだろうよ」

デ「というかお久しぶりでーす」

ゼ「そっか、リレーやってもんな」

デ「思い付きでやってみたりレーだったけど、結構長いね」

ゼ「お前が楽だからだろ」

デ「痛いお言葉です」

魔神の姿・カクセイ(前書き)

ダーク指数が！

魔神の姿・カクセイ

ゼレカ Vision

「間一髪だったね」

紫色の光を斬り裂いた

「ゼレカ……来てくれるって、信じてたよ！」

「もちろん。約束だからね」

「ぜ、ゼレカさん……」

ソルが無理に身体を起こそうとしてよろめく

「おっと、大丈夫？」

大丈夫なわけではないけど

……みたところ外傷と出血が原因か

「癒しの力よ。『ファーストヒール応急処置』」

「す、すみません」

「あんまり喋らない方がいいよ。結構重傷みたいだからね」

「そう、ですね……」

「うん……。エレス、ソルの傍にいて」

「わかった」

少し強めに魔力を込めた結界を張る

「さて、と」

後ろを向く

「久しぶりだな、ヴァジラ」

「ちっ、面倒な奴が来たぜ。足止めも満足にできやしねえのか、あいつはよ」

「アシユラなら俺に全てばらして、すぐ帰ったぜ。おかげですぐ駆け付けられたしな」

「たっく、何のつもりだよ」

「それはそうと」

剣を構える

「去る気は無いのか？」

「ねえな。赤血の魔王を殺しに来たつもりだが、お前を殺しても変わらねえしよ！」

カキーン！

互いに剣をぶつける

俺の剣はさっきアシユラに会った時に造った『夢現』

この剣には風の魔力を込めてあるから、振る度に空気を支配できる

「何だ、それ？気流でも生み出してんのか？」

「気流じゃない、『風』さ」

ヴァジラを取り巻くようにして風が生まれる

「祖は永久の罪人。その犯し罪を洗う術は、四方八天浄火のみ。燃え尽きる『バーニングストリーム』！」

中級の炎だが、回りを取り囲む風と交わって爆発的な炎になる

「……………っ、こんなもん喰らうかよ！！！」

ヴァジラが水でつくった巨大な剣を振るう

水と炎がぶつかり、蒸気が生まれる

かかった！

これで奴の視界はゼロ

蒸気目掛けて走る

「ちっ、どこだ……！」

「遅い、『ランサー・ソロ』」

グサツ

槍を象った魔力を心臓に突き刺す

「……終わりだ」

「……てめえがな……！」

「!？」

首を掴まれた

「な……ん……だと？」

確かにランサー・ソロで心臓を貫いたのに

「何も蒸気で視界が奪われたのは俺だけじゃねえんだぜ」

「くっ……まさか……外した……のか」

「左手を代償にな。だが、お前を仕留めるのに左手一本で済めば安いものだよ……！」

くっ、どうする!?

「消し飛べ!!」ハウリング『炎衝撃』!!!」

「かはっ……………」

……………何が起きた?

……………首を掴まれて投げられたただけだぞ?

ドンっ

俺の体は鈍い音をたてて床に叩きつけられた……………気がする

「どうだ、俺の最強の技は?」

「……………はっ……………たい…したこと、ねえ…よ」

「ちっ、やっぱり片腕であれっぽっちの魔力じゃその程度か。……………
それでも充分過ぎるみてえだがな」

……………んだ、あれ?

……………あんなもんまともに喰らったら木っ端みじんじゃねえか

「はあ……………はあ……………」

グサッ

「!?!?!?」

あいつの剣が俺の左手を深々と貫いた

「これで動けねえだろ？待ってな、先に魔王から片付けるからよ」

ガチャン

「待て！！ふたりに手を出すな！！」

「安心しろ、お前もすぐに後を追わせてやる。そういえば『あいつら』とも会えるじゃねえか」

「あいつら……？」

ドクン

………やめろ

「お前を殺す前に殺したやつらさ。良かったな、全員一緒に」

ドクン

………やめろ

「あばよ、『吸血魔王』」

ドクン

「ヤメろー！ー！！」

憎い

みんなを殺したあいつらが

憎い

ふたりを傷つこようとしているあいつが

憎い

……………誰も守れない、俺が

ねえ、誰かを守りたいと思うのは、弱さの証なのか？

みんなを傷つけさせたくない、その為の力は無力？

どんな力も、弱い心のまえでは意味を為さないの？

ねえ、誰か、答えてよ…………

『ああ、オマエの言うトオリさ』

『守りたい、ナンテ考工は弱さのアカシ』

弱さ……

『傷つけない、スナワチ無力ダ』

無力……

『支えきれない心、ムイミだぜ？』

無意味……

君は何でも知ってるね

じゃあ、力を手に入れる為には、どうすればいい？

『簡単サ。復讐、憎しみ、嫉妬、怒り、悲しみ、喪失、狂気。そして絶望ダ』

『オレにはそのスベテが宿っている。全てを破壊シ、無に帰す力がホシイダロ？』

欲しい

どんな力でもいいよ

俺の望みが叶うなら

『なら、オレに手をノバセ。オレの力をカシテやるよ』

カ

手を、のばす……

！

『ヒヒッ。サア、絶望を味わわせてヤロウぜ、アイボウ？』

ふふっ、カだ

力が溢れてくる！

そうだな、絶望をくれてやるか、『零花』？

「……………」

魔神の姿・カクセイ（後書き）

闇は素晴らしい

どんな者も等しく受け入れる

優しく包み込む

安らぎを与える

それゆえに、全ての者は簡単に堕ちる

『自分』という闇に……………

魔神の姿・狂気

s a d k i n g (前書き)

番外編企画

魔神の姿・狂気 s a d k i n g

エレスナーグ vision

カキン！

「ゼレカ……」

ゼレカは今、天使ときりあっている
なにを話しているのかはわからない

ボワア！

「！！！」

突然、大きな炎が燃え上がった

多分ゼレカの魔法だと思う

シュワッ

今度は白い煙りがでてきた

煙り、じゃなくて蒸気かな？

「あっ……」

あれ『ランサー・ソロ』だ

じゃあゼレカが勝ったってこと？

そんな私の考えをあざむくように手がのびる

ガン！

「え？」

ゼレカが吹き飛ばされた

ガシッ

「あっ！」

境界が消える

何が起きたのか意識がついていけない

だめ……

冷静にならなきゃ……

ゼレカが負けるわけない……

うん……

大丈夫……

落ち着いたみたい

でも、落ち着きを取り戻した私の前には光が射していた

「……………っ」

驚きで言葉がでない

逃げることはできない

間に合うわけがない

「ん……………」

咄嗟に目をとじた

「……………ヒヒッ」

……………

……………？

あれ？

何もおこらない

おそろおそろ目をあけてみる

「フフッ」

ゼレ……カ？

！！？

あの姿！！

「ゼレ……」

「アア、心配すんなエレス。すぐ片付けてやるからよ」

「あつ……」

こつちを見たゼレカの目……

『紅』かった……

いつもの目じゃない……

血に飢えた吸血悪魔（私達）みたいな、目……

「久しぶりだなア、ヴァジラ」

「ああ？何言ってるんだ」

「オマエと会うのは『あの時』以来だろ。オマエラが俺達を殺した時、な」

「……狂ったのか？」

「アハハ、25点の回答だ。残りは『怒り・憎しみ・絶望』。それ

ではれて100点だよあ？」

「……………」

「マアイイサ、話しを戻そう。マエから聞きたいと思ってたことがあるんだテンシサマ」

「聞きてえことだと？」

「俺のムネを貫いた感触、どうだった？どんな気分だった？」「ハハッ！そうか、『怒り・憎しみ』だったか！なら答えてやるよ！とつても気持ち良かったぞ？」

「だよな！ヤッパリそうだよな！いやー、よかった。俺と同じ考えみたいで」

「はあ？」

ガシッ

「俺にもやらせろよ。心臓^{ムネ}を貫く感触、考えただけで心躍るぜ」

……………違う

……………こんなの

……………ゼレカじゃない

「っ…」

「サヨナラだ、ヴァジラ！」

「ゼレカ、やめて……！」

パリン

「あ………」

剣が、折れてる？

「やれやれ、全く君は手がかかるね」

「お前が余計なことしたからだろ………」

「おや？噛み付く気力も無いのかい？」

「……………くそっ」

さっきまでゼレカが刺そうとしていた天使の他に、もうひとり天使がいた

「やあゼレカ。『その姿』になっただね」

デ「やあみなさん。しばらく本編で出番がないので集まってもらいました」

メ「そうなの？」

アラ「まだ出番がないのね」

アス「それより、あの子のゼレカさんとエレスが気になります」

ベ「……俺も気になる」

デ「はっはっは。見事意見が分れましたね。というよりもリード兄妹は自分の出番そっちのけで本編が気になるなんてどうなんだ？」

アス「別に心配なんてしてませんよ？」

ベ「……俺が視点の過去話があるからな」

デ「おおっと、爆弾発言。なら話題を変えて、本編いまの時間はみなさんは何してました？」

アラ「さっきの話を詳しく聞きたいけれど、私は自分の魔界で人探しをしてたわよ」

メ「私は魔王の仕事をしてたわ」

ア「お兄ちゃんと遊んできた！」

ベ「……アスタノトと遊んできた」

デ「わあー、性格がでますね。あとリリード兄妹はもう少し魔王と
いつ自覚を持ってくださいね」

ベ「……あいつらだって似たようなもんだろ」

魔神の姿・狂気 n e g a t i v e g o d d e m o n (前書き)

次回からは零花が魔界トリップしてきた話が始まります

魔神の姿・狂気 negative goddemon

ゼレカvision

なんだ……

この気持ち……

この力……

フツ、ハハツ、アハハ！

そうか

懐かしい『魔神』^{オレ}の力じゃないか！

「フツ」

ヴァジラの放った魔力がゴミのようだ

速度だって亀が歩いてるみたい

弱い……

それでも、いまのエレスとソルが喰らったら間違いなく死ぬ

マモラナキヤな、ふたりを。ククツそのための力だからな

バキン

こんな剣一本折れなかったのか、さっきの俺は

アハハ！ヤツパ守りたいなんて思うのは弱いな

さあーて

脚に魔力を纏わせて歩く

一瞬でふたりの後ろに来た

その後ふたりを抱えて横にずれる

フフツ、エレス。怖くて目をつぶっちゃってるよ

アア、可愛いな

目の前に俺がいたらどんな顔するだろう？

おっ、目をあけたな

「ゼレ…」

「アア、心配すんなエレス。すぐ片付けてやるからよ」

全く、怯えてる君をみてるととても興奮する

マア俺は『ヤサシイ』からな

そんなことはしない

もうひとつの楽しみもあるし

「久しぶりだなア、ヴァジラ」

マズハあいさつから、これは常識だ

「ああ？何言ってるんだ」

「オマエと会うのは『あの時』以来だろ。オマエラが俺達を殺した時、な」

フフツ

「……………狂ったのか？」

惜しい！

一つは正解だ

「アハハ、25点の回答だ。残りは『怒り・憎しみ・絶望』。それではれて100点だよお？」

「……………」

アレ？難しかったか

「マアアイサ、話しを戻そう。マエから聞きたいと思ってたことがあるんだテンシサマ」

「聞きてえことだと？」

そう、オレが聞きたかったこと

なんて答えてくれるかな？

「俺のムネを貫いた感触、どうだった？どんな気分だった？」

「ハハッ！そうか、『怒り・憎しみ』だったか！なら答えてやるよ！
！とっても気持ち良かったぞ？」

ヒヒッ、オレの予想通り

「だよな！ヤッパリそうだよな！いやー、よかった。俺と同じ考え
みたいで」

「はあ？」

剣を新しく四本創った

ガシッ

ヴァジラの両手両足に刺した

左手は動かないって言ってたけど、この方が確実だからね

「俺にもやらせるよ。心臓^{ムネ}を貫く感触、考えただけで心躍るぜ」

楽しみだなあ

「っ！」

「サヨナラだ、ヴァジラ！」

元から持ってた剣をヴァジラの心臓目掛けて突き刺す

「ゼレカ、やめて！！」

「っ！？」

エレス、俺を呼んだ？

オマエじゃない。オレだ

いや、俺だよ。何かあったら呼んでって言ったから

マアどっちだっていいだろ？オレには関係無い

お前には無くても、俺にはある。『やめて』って言われたから

！？何言ってるんだ。アイツを殺したいって言っただろ！？

言ってるじゃない。俺は言ってるじゃない。俺は『守りたい』って言ったんだ

……チツ。思ったより早かったな。ん？

パリン

折れてんな

「あ……………」

「やれやれ、全く君は手がかかるね」

「お前が余計なことしたからだろ……………」

「おや？噛み付く気力も無いのかい？」

「……………くそっ」

「やあぜレカ。『その姿』になっただね」

「フフツ、そうだなアシユラ。ご忠告感謝しなきゃなア？」

「別に忠告したつもりはないさ。ただ君のその姿に興味があるだけだよ」

「ナラ、試してみるか？今なら消滅への特急キップもやるぜ。片道限定の」

「それは興味があるね。でも、生憎と今日は帰らなきゃ行けないんだ」

「オレから逃げ切れる…と」

もういい……

何言っただ！アイツラをぶっ潰しちまえよ！

エレスが言っただろ？やめてって。だから、逃げるなら見逃す

オマエは！自分の目的を忘れたのか！

忘れてない。だけど、今の俺は『ゼレカ・ハツキ』。お前が言うてる目的は『葉月零花』の目的だ。俺じゃない

だからオレが出て来たんだろ！？

エレスの前では『ゼレカ・ハツキ』で居たい。もう彼女に『葉月零花（あんな俺）』を見せたくないんだよ

このバカヤロー！！

シュウウー

「……見逃してやるよ」

「あれ？戻っちゃったのかい？」

「だったらどうした？」

「アシユラ、俺は帰るとは言って……」

「『あの方』からの御命令だ」

「……わかったよ」

「いや、何でもない。では、これにて失礼」

アシユラとヴァジラは光に包まれ、消えた

「ゼレカ、戻った？」

弱々しい声で聞いてくる

「うん、戻ったよ」

エレスの頭を撫でる

「だから……安心……して……」

ドサッ

そのまま力なく床に倒れる

「ゼレカ!？」

意識が飛ぶ前にエレスの声が聞こえた

魔神の姿・狂気 negative goddemon (後書き)

誰かが呼んでる

今の俺の知ってるひと

今の俺の大切なひと

今の俺の……

my borderline

始まりの時

my borderline (前書き)

番外編どこでやるのかな……

my borderline

……………あれ？

俺、どうなったんだ？

『やっと目が覚めたか』

「マムート……………」

久しぶりに会ったような気がするな

『そうだな。それより、せっかく封じ込めてたのに何でつかつたんだ？』

……………

「ふたりを守ろうと思ったたら声が聞こえてきたんだ。そしたら、その声に導かれるように意識が同調した、それだけさ」

『……………わかってるか？』

「何がだ？」

『その意識が誰の意識か』

「その事か。もちろんわかってる」

『そうか』

「あれは俺の……いや、ちょっと前の俺だ。そうだろ？」

『その通り。お前が今と昔を決別するために隠した、まごうことなきお前自身だ』

「……………隠した」

『お前のあの時の気持ちさ』

「……………」

みんなを殺された時（あの時）、か

『その思いを忘れる、とは言わない。生物には、頭で理解出来ても体ではわからない事だ』

「そうか。珍しく神らしい事言ったな」

『これが本業だからな』

「……………なあ、マムート。『魔神化』をもう一度制御する方法を教えてください」

『……………ぶっ』

「何だ？」

『なにを言ってるんだお前は。一度は制御出来たんだ、教えるものにも答はお前の中だろ』

「俺の……中に……」

『もうひとりのお前に頼らずに魔神化をつかう決心はついたか？』

「
ああ」

『よし。なら行ってこい！そして思い出せ！』

フワァ

my borderline (後書き)

アスタノト ゼレカ

ア「お兄ちゃんに似てますね」

ゼ「エレスを無邪気にした感じだね」

g e a o f d e s t i n y 出会い・始まり(前書き)

糖度不足につき、番外編鋭意製作中です

g e a o f d e s t i n y 出会い・始まり

これは何時の記憶だ？

とても懐かしい

でも、そんな昔の記憶じゃない

そうだ……

これは、俺が初めてニンプルケティック（この世界）に来た時の記憶だ

g e a o f d e s t i n y 運命の歯車

……………ここか

片膝をついて下を向いている

「召喚成功です」

顔を上げる

周りには見知らぬ服装をしたひとが数人程いた

その中でひとりだけ違った服装をしたひとが近付いてきた

「ようこそ、異界の方。私はソルティア、そしてここはニンブルケティック魔界です」

「……ああ」

「貴方をお呼びした理由ですが……」

「いや、その辺の説明は要らない」

どうせ俺の目的は一つだけだ

「そうですか。それなら……」

「せいこうしたの？」

ソルティアと名乗った女性の後ろから聞こえた

「エレスナーグ様。いらっしやったのですか？」

……

なんかぎこちないな

「とりあえずはよろこそ。私はこの城の主のエレスナーグ・クルスト・エル・ニンプルケティック。あなた、名前は？」

「……ゼレカだ」

「そう……ゼレカね。一応はせつめいしておくわ。あなたを召喚したのはこの世界を救ってもらうためよ」

ありきたりだな……

「具体的に何をすればいいかは私が指示するから、それをこなしてそれとあなたに拒……」

「わかった」

「！……そう」「拒みなんかしない

『アイツラ』をぶっ潰せるなら

「それなら明日から働いてもらうから今日は休みなさい」

「……ああ」

「それでは、お部屋までご案内しますね」

ソルーティアについていく

g e a o f d e s t i n y 出会い・始まり（後書き）

デ「リレーも一段落ついたところで、新しい事でも始めよう！」

ゼ「本当は？」

デ「このままだとシリアス過多でほのぼの不足です」

ゼ「そうかよ」

エ「具体的には何をするんです？」

デ「ゼレカとエレスさんと今日は居ないけどソルーティアさんである頃の感想を」

ゼ「……あの頃って……俺はやさぐれまくってたから今とは別人みたいだぞ？」

エ「ん〜、私も悩んでたから、今とは別人みたいだと思う」

デ「それが今はらぶらぶと……」

g e a o f D e s t i n y 神話(前書き)

前書きのネタが……

「こちらのお部屋をおつかい下さい」

「ああ」

「それと明日の朝になったら、先程の『儀式の間』の隣にある『玉座の間』にいらして下さい」

「……………わかった」

「あと、わからないことがあれば…」

「それなら明日にでもきくよ」

「承知しました。それでは、ごゆっくり」

パタン

「……………」

随分と普通の部屋だな

目立つ物がベッドしかない

「……………まあ、べつでもいいけど」

そのままベッドに横になり目を綴じる

………

………何処だここ

『お前の意識の中だ』

………ああ、自称『神』か

『自称言うな。俺は本物の神様だ』

………それで、何だ？

『いろいろ話し忘れたことがあるからな』そうか、そついえはまだ具体的に俺の力について話してもらって無かったな

『他にも伝えることがあるけど、先ずはお前の能力説明をすろぞ。まず一つ目、お前の身体能力を上げた。これは基本的な運動能力をこの世界に合わせて強化したんだ、この世界で言う魔王クラスまでな』

運動能力の強化………

『二つ目、魔力を付与した。この世界では魔力がつかえるからな。お前の本々の魔力を数十倍にしておいた。それだけの魔力なら誰が

相手でもボロ負けつつーことはないだろ』

魔力、か

『そして三つ目、物質を創造する力。お前の魔力をつかい、物質を想像して創造する能力だ。ただし、生物は創れないからな』

……分かった

『お前の能力説明はこのぐらいだろ。次は魔力の説明だ。一応お前には全ての属性を扱えるようにしておいた。全ての属性を扱えるなんて滅多にいないんだぜ？』

……属性っていうと『炎』や『水』のことだろ

『属性は火・水・風・地の基本属性と、光・闇の特殊属性、時・空の次元属性がある』

……『氷』や『雷』なんかはないのか？

『氷は水と光か闇、雷は風と地を複合してつかうとできる。いわゆる複合属性ってやつだな』

……成る程な

『魔法に関しては自分で試してみ。お前の得意な属性を見付けたりしてな。後はなんかあるか？』

……俺やみんなを殺したあいつらは誰なんだ？

『……………』

そうか、神にもわからないことがあるのか

『天使だ。それも普通の天使じゃない、大天使』

……大…天使……

『とは言っても、今のお前じゃ勝てない。絶対にな』

……どうすれば勝てる

『まずはお前の力を理解しろ。そしてその力を操れ。その為に、今はこの世界に慣れる』

……ああ

『よし。これで伝えることは全部伝えたぜ』

……一応礼は言っとく

『お？どんな心境の変化だ？』

……ありがとな、自称神

『おい！いいけどよ、別に』

……ふん

『……………頼んだぞ』

⋮
?

デ「はい、それじゃあゼレカとソルーティアさん、あの頃はどんな第一印象でした？」

ゼ「俺は前言った通りやさぐれたから『城のメイド』ぐらいにしか思っ
てなかつたぞ」

ソ「ゼレカさん私の事そう思っていたのですか……」

ゼ「いや、あの頃は本気で周りに興味なかつたからさ」

ソ「……まあいいですけど。私は面白そうなひとだと思いま
したよ」

ゼ「あの俺を見て？」

ソ「ええ。そう思いましたよ？」

ゼ「そうなのか……」

ソ「今では本当に面白いですけどね」

ゼ「面白いか……確かに『あれ』で半殺しにされた覚えは……」

ソ「ゼレカさん、ちょっと血の池地獄で遊泳してみますか？」

ゼ「遠慮しておきます……」

g e a o f d e s t i n y 準備中(前書き)

今日の天候の変わりやすいこと……

g e a o f d e s t i n y 準備中

「……………」

まだ薄暗い……

「…………『想像創造』でも試してみるか」

柄の青い剣を想像する

刃、鞘、形、色、重さ、必要な情報を想像して意識を集中させる

「…………できた」

想像した通りの剣が創造されていた

「…………便利な力だ」

他にも武器を造っておこう

そして次に先端の黒い槍を想像する

必要な情報を想像した後、先端の方に水のイメージを付け加えてみた

「…………水の魔力が宿った槍か」

後は消耗品として剣を五本程造っておこう

如何にも普通の剣を造った

「次は魔法を試すか……」

手に力を入れる

……何も起きない

「詠唱でもいるのか？」

そんなもん知らないぜ……

「……魔法は後回しにして、もっと武器を造るか」

……で、これ何処にしまうか？

間に合わせて剣が五本、槍が一本、短剣が十本、銃が四丁

魔力を込めて造ったのが闇の剣、水の槍、炎の短剣、風の銃

普段つかう予定の青い剣、刃を増やした短剣、少し長めの紅い短剣、
黒い杖

「……こんなに持ち運べないぞ？」

ん、そういえば『空』って空間のことだよな

魔法はつかえなくても杖に『空』を付与すればいいんじゃない？

黒い杖に異空間をイメージする

「……………できた」

振ってみると空間が割れた

その中に普通の短剣をいれてみる

もう一度杖を振る

空間が消えた

違う場所でまた杖を振る

割れた空間の中に手を入れる

すると短剣があつた

「これは便利だな」

その中に普段つかう武器以外を入れる

杖を振る

「……………服もこっちの世界っぽいのにしておこう」

今の俺は制服のままだ

死んでから着替えるあれも無かったからな

確か、周りのやつらはローブを着てたからそんなかんじの服がいいのか

俺は羽織るタイプの黒いロングコートと青いトップス、黒いボトムスを想像する

ある程度の衝撃は和らげるように属性を指定しないで魔力を込める

「こんなもんだろ」

今着ている服は異空間に入れて、創造した服を着た

腰に剣を差してコートの内側に二本の短剣を入れ、ボトムスの足の部分に杖をしまう

「……そろそろ行ってみるか」

g e a o f d e s t i n y 準備中(後書き)

デ「お前しかでてねえ」

ゼ「そうだな」

デ「このまま語らせると一人で喋る危ない子になるから……」

ゼ「誰が危ない子だ！」

デ「とは言ってお前これみよがしに部屋で一人喋ってたよね？」

ゼ「!!」

g e a o f d e s t i n y 主の問題(前書き)

早いところいつもの日常編に戻したいです

g e a o f d e s t i n y 主の問題

「……………昨日の部屋の隣だったよな」

俺に与えられた部屋から昨日の部屋に向かう

「……………『玉座の間』、ここか」

扉を叩こうとする

……………ん？

「もう一度言ってみなさい!!」

「だから、『赤の宝心』レット・ハートをとって来たら女を下さいって言ったんですよ。それともお姫様、あんたが相手をしてくれるか？」

「マローニ様、誰に口を聞いて…」

「俺は魔界連合軍結集組織『空撃部隊』隊長だぞ？そっちこそ誰に口を聞いているか分かってるか？」

「くっ……………」

「いい、ソル」

「わかりました……………」

「マローニ、一応あなた達は私の部下。それだけは覚えておくこと」

「へっ、はいよ」

「報酬の件も考えておくわ」

「おっ、期待してもいいってことか？」

「それは働き次第」

「ならさつさと『赤の宝心』をとってくるな。というわけで行くぜ」

扉が開く

「ん？誰だお前？」

「……」

「ああ、お前が例の『救世主』か。へっ、弱そうな奴だぜ」

「……失礼する」

扉を閉める

「ああ、いらっしやいましたね」

「一応はよろこそ」

「……どうも。それで、俺はどつすねばいい？」

「話しが早いよね。まあいいわ、とりあえずあなたには『赤の宝心』

をとってきてもらいたいの」

「それは何処で手に入るんだ？」

「『レッドファング』という魔物の体内にあるわ」

「わかった」

さっきの奴と同じ仕事か

後ろを向いて扉に向かう

「待つて」

「……………何か？」

「あなたは報酬をよこせとは言ってこないのね」

「……………興味ないからな」

「そう」

扉を開ける

「……………な……………」

「？」

扉の向こうでエレスナーグが何か言っていた気がした

そういえば『レッドファンク』というのは何処にいるんだ？

自室まで来て思った

まあいいか……

外に出よう

……外はどっちだ？

「あの一……」

誰かに後ろから声をかけられた

「……何か？」

「もしかしてお客さんですか？」

「……そんなところかな」

「あっ、やっぱり！はじめまして、私クレアと言います！わからないことや不便があったら何でもお申しつけ下さい」

……声が大きい

まあ、こいつに聞いておくか

「……なら、『レッドファンク』は何処に行けばあえる？」

「レ、『レッドファンゲ』！？何しに行くんですか！？」

「……………『赤の宝心』をとり」

「『赤の宝心』ってことは姫様の頼みですか。それならこの城の裏口から出たところの荒野を真っ直ぐ行った森にいますよ」

「……………そうか。後もう一つ、裏口って何処だ？」

「裏口はその階段から下の階に行つて右側に進んだところにあります」

「……………ああ、助かった」

「いえいえ、これが私のお仕事ですから」

クレアと名乗った女性とわかれて階段を下り、裏口に向かった

ゼ「あはは、全く今と雰囲気違う……」

エ「お互い暗いね」

ソ「二、三ヶ月前の出来事ですよ？」

ゼ「そうか、まだそんな……と言っても魔界まじちと下界あじちじゃ四倍ぐらい時間の進み具合が違うから俺の感覚で一年は経ったかな」

ソ「一年ですか……人間の体感速度は早いですね」

ゼ「悪魔（魔神）になっても体感速度は変わらないけど」

エ「あつ、そうか。この頃のゼレカはまだ人間だったんだよね？」

ゼ「そうだよ。『あの時』から魔神になったんだから」

エ「『あの時』か。客観的に見てみたいな」

g e a o f d e s t i n y 共通(前書き)

今回は少し長めです

「…………ちっ」

城を出てからどのくらい経った？

走っていないから確かに遅いと思うが結構経ったぞ

「……………ん？」

視界の端に緑がちらついた

「……………着いたか」

真っ直ぐ歩いてたつもりが少しずれたな

「……………さあーて、狩るか」

剣を抜いて森に入る

ところどころの木に爪の跡や尻尾らしきものがぶつかった跡がある

「……………そういえば『レッドフアング』ってどんなやつだ？」

さっきのメイドにそれを聞くのを忘れた

「グルルル」

「……………」

目の前に赤いトカゲみたいなのが現れた

「……………わぁーお」

別に驚く事でもないけど……

「グワアア！」

「……………おっと」

噛み付いてきた牙を剣で押さえ……

スパッ

簡単に切断できた

「……………脆い」

「グアアア！！」

レッドファンクが痛みで尻尾をぶつけてきた

「……………くっ」

まともに脇腹に喰らいそのまま左に飛ばされた

「……………ん？」

そんなに痛みが無い

これが『身体強化』……

魔法……そうか

「アアアア！」

「………奔流、激流、全てを洗い流す水。『スプラッシュアウト』」

レッドファングの周りから水の壁が出て、レッドファングを飲み込む

「………すげえな」

シューー

水が引いたらレッドファングは倒れてた

「………こいつの体内にあるのか」

剣を真心突き立てた

グチュ

真っ黒の液体が飛び出る

「………ん」

心臓ら辺に紅い宝石があった

「……………これが『紅の宝心』か」

拳より少し大きい澄んだ紅い色の完全な球体が採れた

「……………他には」

試してみたら爪や牙、尻尾の中にも宝石があった、けど色も濁った赤だった

「……………一通りは持つて帰るか」

丈夫な硬度の袋を想像する

その中に宝石を入れる

「……………後何体か狩るか」

「……………ふう」

十数体程狩ったな

魔法も少しだけつかえるようになったし、いい訓練になった

「……………帰るか。……………速度、流れ、突き抜ける風。『リードフロウ』」

さつき覚えた風の魔法

これを足に纏えば三倍の速度で歩ける

「……………」

「……………あつという間だったな」

走ってみたらあっさり城の裏口に着いた

ガチャ

扉を開けて中に入り階段を上がる

「……………そうだ」

杖を取り出して振る

重いから異空間に預けておいたんだった

「……………重い」

拳より少し大きいぐらいのが数十個と小さな石ころのカケラみたいなのがどっぷりつまった袋を引きずる

ズルズル

玉座の間に着いた

「どうですか姫様？『紅の宝石』をたくさん集めてきましたよ？」

「私が頼んだのは『紅の宝心』のはずよ？」

「冗談言わないで下さいよ。あんな物妄言の代物ですぜ？」

「……まあいいわ。宝石の方でも数十個でそれなりの物になるから」

「数十個？五個集めてきただけで大したものだろ？このカケラ一個だつて集めるのに此処の一個小隊何チーム遣うと思つてんだ」

「それもそうね……」

「エレス……」

「あんなんかに頼まなきゃいけない程、今は衰退してるわ」

「言うなー、姫様。で、報酬は？」

「はあー。しばらく分のお金を……」

「それよりよ、『あれ』くれよ、『あれ』」

「……何？」

「王家に伝わる秘宝『黒け』」

ダン！

「あなたは一体どれだけ私を馬鹿にすれば気が済むの！」

「マローニ様、姫様に対しての宣戦布告ととっても？」

「はっ！この俺にそんな事言つて大丈夫か？今だつて命懸けで姫様の頼みを真つ当してるんだ。俺が聞かなきゃ誰が聞くんだ？」

……………むかつく

話を聞いて確信したが、こいつはむかつく……………

エレスナーグを馬鹿にして……………あれ？

むかつく？

俺がむかっていたのはみんなを、俺を殺した天使だ

他の誰かの為にむかつく必要はない

でも、なんとなくむかつく

だから、助けてやりたい

そう思うのはなんでだ？

ガチャ

「…失礼する」

気付いたら扉を開けてた

「あっ？」

「……つく。ゼレカ、何の用」

エレスナーグの座っている机に近づくと

重たい袋をひきづって

ドサッ

袋を机の上に置く

「……頼まれた物だ。この紅い球でよかったか？」

「え！？」

「はあ！？」

「……『紅の宝心』。こんな、こんなにたくさん……」

「これで間違いないか？」

「……うん。確かに、あってるよ」

「……そうか」

「おい、まて！お前あれを何処で……」

「……狩ったんだよ、『レッドファング』を」

「狩ったって、俺も狩ったぞ！？」

「……お前は牙や尻尾を斬ってびりながら集めてたんだろ。その証拠に転んだ跡や牙が少しだけ折れたレッドファングもいたからな。お前はびびってた、それだけだ」

「なんだとこの……」

「……それでゼレカ。報酬は何かいいか言ってみなさい」

「……別にいいよ。強いて言えばこの世界について教えてくれればいいさ。それじゃあ」

後ろを向いて扉に近づく

「じゃあ後でこの部屋に来て。この世界について教えてあげる」

「……ああ」

ガチャ

「……それで？」

「……わかった。金でいい」

「そっ……」

……とりあえずすっきりした

……誰かの為に怒る、か

ゼ「なつかしいなあー」

エ「この時はホントにおどろいたよ」

ソ「まさかあんな量を持ってきて……別にいい』ですもんね」

エ「あはは、そっくり」

ゼ「俺が聞いてもそっくりだと思った……」

エ「この後って、ふたりで話すところだよな？」

ソ「エレスが私に『少しふたりで話しがしたい』って言うから私出てきませんよ」

ゼ「へえー。あの時から俺に興味がわいたと」

エ「……ん、ん／＼／＼」

ソ「凶星ですもんね」

PV100000突破記念『特別対談』(前書き)

デ「100000……励みになります！」

PV100000突破記念『特別対談』

デ「やあー、暗い！ということまで番外編でー…」

コッソソ！

デ「痛っ」

ゼ「バカヤロー、何本編シリアスの真っ最中なのに雰囲気ぶち壊してやがるんだ」

デ「だからだろ？連続してあんなことやってると気分が沈むしょ」

ゼ「はあ。まあいいか、とりあえずは一段落着いたからな」

デ「今回の番外編は何にしようか迷ったんだけど、とりあえずシリアスモードになる前みたいにはのぼの・あまあま・コメディー路線で進行しようと思う」

エ「ホントに最近は少なかったですもんね」

デ「書いてるこつちも『糖度たりねー！』と何度思ったことか」

ゼ「あー、まあいいんじゃないか」

デ「ということまで、この話は普段の話の何倍かの長さを予定してます」

デ「っと、まあ前置きも終わったところで何する？」

ゼ「それを考えとけよ」

エ「後書きでやってたりレーを本人の前で言うとかおもしろそうじゃないですか？」

デ「いや、それだとひとりだけネタバレするから」

ゼ「言う相手をランダムにすればいいだろ？」

デ「ああ、それもそうか」

デ「それじゃあ参加者はこんな感じで」

ゼレカ・エレス・ソル・アルフォート・メフィスト・ベルゼブ・ア
スタノト・アラクネ・バルチス・シェイド・マリーナ

デ「シェイドとマリーナが新しく加わったね」

ゼ「それはいいが、あのふたりと会ったのって俺だけじゃね？」

デ「気にしない気にしない」

エ「どうやって決めるんです？」

デ「くじで決めようと思う」

エ「完全にランダムですね」

デ「そこがおもしろくなると思いますよ」

ゼ「……………一応聞くが、誰がそのくじをひくんだ？」

デ「俺が……………といたいところだけど、絶対仕組んでると思われそうだからエレスさんにひいてもらおうと思もつ」

エ「私ですか？」

ゼ「それなら安心だな」

デ「さあ、それではひいちゃってくださいー」

エ「ん〜っと、よつと」

ゼ「誰だった？」

エ「フートだよ」

ゼ「……………？」

エ「アルフォートがそう呼んでいって」

ゼ「あいつが……………ほあ……………」

アル「我が」

デ「じゃ、その部屋で待機しててください」

アル「ふむ」

エ「それじゃあフートの相手は………っと」

ゼ「おっ」

デ「へえ」

対談部屋

シ「おっと、お前かアル」

アル「ご無沙汰でしたな兄上」

シ「堅苦しいな。昔みたいに話せよ」

アル「そうか？なら、そうする」

シ「変わり身早いな」

アル「それもそうだが兄さん。こんな長話していていいのか？」

シ「ああ。別にゆっくりでいいってゼレカに言われた」

アル「……主らしいや」

シ「とは言っても、あんま時間かけんのも悪いか」

アル「そうだな」

シ「何を言っただっけ？」

アル「相手に対して思ってること」

シ「そうだったそうだった」

シ「お前は、立派に誇れる弟だよ」

アル「……………そんなことを改まって言われると照れる」

シ「ふっ、お前の番だぞ」

アル「……………兄さんは、とても弟想いの兄さんだ」

シ「……………ほんと、照れるな」

アル「そうだよな」

スタジオ？

デ「いきなり兄弟の感動の再会でしたね」

エ「ホント感動的でした」

ゼ「アルフォート……俺はお前がわからないぞ」

デ「それでは次、いってみましょう」

エ「次は、つと」

デ「あはは」

ゼ「まあ妥当だろ」

デ「面白みは無いけど」

対談部屋

マ「あら？」

シ「マリーナ？」

マ「貴方でしたの」

シ「まあお前相手なら言うことは決まってるけど」

マ「私もよ」

シ「俺の」

『大切なひと』マ「私の」

スタジオ

デ「短い会話になったけど」

エ「お互いの信頼が伝わってきますね」

ゼ「……これを公開していいのか？俺もこれをやると思つて憂鬱な
んだが……」

デ「公開しなきゃわからないだろ？誰が誰に何を言うのか」

ゼ「……悪趣味」

デ「それじゃあ次いつてみよう」

エ「えい、あれ？」

ゼ「おい、接点あるのか？」

デ「どうでしょう？」

対談部屋

アス「やつほく、久しぶりマリリン」

マ「アスちゃん！わあー本当に久しぶり」

アス「まだ放浪してるの？」

マ「ええ。でも今は家に帰ってるわ」

アス「そっか、確かニンブルケティックにお家があったんだっけ」
マ「またすぐに旅にでるから、その時にリリードネメシスに遊びに行くね」

アス「うん！楽しみに待ってるよ！」

マ「私の初めてのお友達」

アス「命の恩人さん」

スタジオ

デ「知り合いだった、というね」

ゼ「（そういえば遊びに行くって言ってまだ行ってなかったな）知らなかった」

デ「お前結局遊びに行ってないし」

ゼ「……お前、マムートの親戚か友達？」

デ「いや」

ゼ「そうか」

デ「さあーて……」

ゼ「おいディン。エレスは？」

デ「ん」

ゼ「ん？」

対談部屋

アス「あはっ 私、友達に恵まれてる」

エ「そうだね 私も同じ」

アス「お互い魔王になってから昔みたいに会えなくなっちゃったけど、今でも約束忘れてない？」

エ「もちろん。『ずっとずっと友達で、親友でいよう』」

アス「親友で、幼なじみで、同僚で、ずっと昔から一緒だったね」

エ「これからも一緒でいよう」

アス「何があっても」

スタジオ

ゼ「えっと……ベルゼブ、お前どう思うっ？」

ベ「……百合」

ゼ「そうじゃなくて、なんで同性同士なのに今までで一番ラブいの

か……って百合だから？」

ベ「……ゼレカ、一つ言っておくがこの世界は女性同士と重婚は可能だからな」

ゼ「それは知ってる、というかお前に名前で呼ばれたのってすげー久しぶり」

ベ「……今は隊長じゃないだろ」

ゼ「そうだけど」

デ「投げました」

ゼ「いてっ、何しやがる」

デ「ふっふっふ、見るがいい」

ゼ「何を見ろって……」

デ「ははは」

ゼ「……消せよ？カメラ」

ベ「……さっさと行ってこい」

アス「ゼレカさん、楽しみに見えますから」

ゼ「……」

対談部屋

ゼ「カメラが廻ってると思うと憂鬱だ……」

エ「まあいいじゃない。だってみんな条件おなじなんだしさ」

ゼ「………何だかすごく楽しそうにみえるけど？」

エ「そう？なんでだろう」

ゼ「………周りにつつぬけの状態で言えと？どう思ってるか」

エ「もちろん」

ゼ「（完璧Sモード入ってるな）………ホントに俺が恥ずかしいと思う時はSだよねエレスって」

エ「そうかな？私は困った顔をみるのが好きなだけなんだけど」

ゼ「そのわりには一緒に寝てる時とかは目をあわせないよね」

エ「だって、恥ずかしいから」

ゼ「まさに今その気持ち………あっ」

エ「どうしたの？」

ゼ「（………この会話外につつぬけだったんだ）………ふう、忘れてた。エレス、俺の大切で主で助けてくれた俺のお姫様」チュッ

エ「ふふふ。だったら、貴方は私を籠から出して世界を教えてください
た大好きなひとだよゼレカ」

スタジオ

アス「ゼレカさんて結構大胆な事するんだ」

ベ「……ヘタレではないな」

アス「それはお兄ちゃんでしょ」

ベ「言わなくていい」

エ「ただいま」

アス「エレス、結構誘ってたね」

エ「そうだった？いつもとあんまり変わらないよ」

アス「そうなの！？いつもあんな感じ！？」

エ「あ、でもお風呂の時よりはそうでもないかな」

アス「お風呂？」

エ「みんなで入れるシャワーみたいなもの」

アス「~~~~！！！！／／／／／／」

プシュー

エ「あれ？アスタノト？」

ベ「……ははっ」

デ「果てしなく面白いけど、次始まつてるよ？」

対談部屋

ゼ「ってことかな」

ソ「そうだったんですか。私の予想とは違っていました」

ゼ「大体は間違ってたけどね」

ソ「いえ、おおまかな部分は合っても基本概念の違いは決定的ですから」

ゼ「ははは……。君……貴女らしいや」

ソ「……ゼレカさん。私、一応は貴方より年下ですよ？」

ゼ「そうだけど……雰囲気的にさ」

ソ「私に限らず女性は実年齢より高い年齢だと思われるのをよしと
はしません」

ゼ「ふーむ。なら、俺を呼び捨てで呼んでみてよ」

ソ「呼び捨て……ですか？」

ゼ「エレスといる時の雰囲気なら十分年下に思えるからさ」

ソ「そう……ですか。えーと……ぜ、ぜ、ゼレカ／／……」

ゼ「よく出来ました」

ソ「へ、変じゃなかったですか？／／／」

ゼ「大丈夫だよ。君とエレスって本当の姉妹みたいだよ。いつもしてるのが恥ずかしいなんて」

ソ「ゼレカ……さん、貴方にだけお話ししておきますね」

ゼ「何を？」

ソ「実は……」

スタジオ

デ「ストップー!!」

エ「ど、どうしたんですか!？」

デ「あははは……次、いってみようか？」

エ「え、でもゼレカまだ戻って来てませんけど？」

デ「それは大丈夫、次の相手はメフィストだから先に対談してもらえばいいさ」

エ「じゃあメフィストの相手を選びますね」

デ「(びっくりしたぜ)」

エ「よっと、うん。ピッタリ」

デ「面白い結果になりました」

対談部屋2へ続く廊下

ベ「……メフィスト？」

メ「あら、ベルゼブ。貴方もその部屋に呼ばれたのね」

ベ「(……まさか対談じゃないよな。ふたり同時に呼ばれたし)……
……ああ」

ガチャ

ベ「……」

メ「誰も居ない？もしかして、対談？」

ベ「……多分そうだろうな(……ゼレカ、すまんお前の気持ちがよ

くわかった」

メ「ははは！よかった。ベルゼブが私をどう思ってるのか聞けて」

ベ「……言わなきゃ駄目なのか？」

メ「私が先に言おうか？」

ベ「……笑うなよ。……お前は俺が生涯を通して守ってやる。……だから、お前を好きでいていいか？」

メ「もちろんよ。……嬉しい。貴方に、私の運命の王子様に言われるなんて」

ベ「……／＼王子って、俺は大魔王だ」

メ「照れてる」

ベ「……／＼否定はしない」

スタジオ

デ「ラブラブだなー」

エ「大人な関係ですね。いいなあ……」

ゼ「結構進展してたんだ」

エ「あれ、ゼレカいつの間に帰ってきたの？」

ゼ「結構早い段階で帰ってたよ」

エ「そうだった？」

デ「カメラだけきつてもう少し待てばよかった」

ゼ「そういえば次は誰だ？」

デ「一応ベルゼブとアラクネ何だけど……」

ゼ「だけど？」

デ「カメラみてみ」

ゼ「？」

対談部屋2

メ「あははは、ベルゼブ」

ベ「……カメラ廻ってるんだぞ？／／／」

メ「別にいいじゃない。それよりも……」

スタジオ

デ「終わる気配が一切無い」

ゼ「……………だな」

エ「アラクネの相手も一応決めたけど……………」

ゼ「……………残ってるのってたしか……………」

対談部屋3

バ「……………」

ア「ねえ」

バ「は、はい！」

ア「貴方って、どこかで私と会ったことある？」

バ「い、いえ、今日が初対面です」

ア「そう……………。貴方によく似た人が知り合いにいたものだから、ごめんなさいね」

バ「いえ……………」

ア「何処に行ったのかなあ……………」

バ「……………その人ってどんな人なんですか？」

ア「……………あの人は私を人としても、悪魔としても理解してくれた、たった一人の大切な人。『私と同じひとは何処にも居ない！』って

言った時も『この世界にお前と同じひとが沢山いたら、俺は誰を愛せばいいかわからなくなるだろ？だから、お前はひとり。俺が愛するお前はひとりさ』って」

バ「……そうなんですか。ありがとうございます、話してくれて」

ア「うふふ、何か貴方になら話してもいいかなーって思ったの」

バ（ボソツ）「……悪いなアラクネ、もう少し待っていてくれ」

ア「ん？」

バ「何でもないです」

スタジオ

エ「ばれなかったね」

ゼ「ちょっと本性でてたけど」

デ「さあーて、いよいよ大詰めになってきた。それと、全員終わったらどつきりしかけるから」

ゼ「……どつきりしかけるって言うていいのか？」

対談部屋 3

バ「はあー」

アル「どうした？」

バ「のろけ話を聞いてた」

アル「ふっ、それは災難だったな」

バ「いやあ、ただののろけならいいんだけど、内容がね……」

アル「過激だったと？」

バ「それなら恥ずかしいで済むから全然大丈夫。ただ、その相手がね……」

アル「……苦労してるんだな」

バ「ホント、助かるよアルフォートが居てくれて」

ア「ふっ、お前は面白いからな、特別だ」

スタジオ

ゼ「……なんか今までで一番スムーズかつ清々しく進んだな」

エ「友情みたいなのが伝わってきます」

デ「さて、一通り終わったかな」

ゼ「どつきりか？」

エ「どんなびつくりがあるんですか？」

デ「ふっふっふ。それは……」

ゼ・エ『それは？』

デ「それは……」

PV100000突破記念『特別対談』（後書き）

ゼ「びっくりしたわ！後書きまでひっぱるな！」

エ「もしかしてこれがどつきりですか？」

デ「まさか。どつきりってのはこの番外編について

ゼ「番外編？」

デ「この番外編って実は本編が暗いからって理由じゃないんだぜ？途中まではそれが理由だったけど」

ゼ「どつちだよ……」

エ「じゃあ何かの記念なんですね」

デ「大正解！PV100000記念だぜ」

ゼ「おおー、それはありがたい」

エ「読者の皆さん、ありがとうございます」

デ「それではー」

g e a o f d e s t i n y 種族と魔法(前書き)

夏が……終わる……だと!?

「よくきたわね」

「……一応来いと言われたからな」

「とりあえず座って」

促されるまま椅子に座る

「さっきはありがとう」

「……別に、なんかむかついたから」

「……それで、この世界の事を教えてほしかったのよね？」

「……ああ。全く別の世界に来たわけだから」

「この世界は魔界『ニンブルケティック』。あなたが元々何処の世界にいたのかは知らないけど、ここには悪魔しか住んでないわ」

「……悪魔って一くりにしてもどのぐらいの種族が住んでる？」

「種族のことは知ってるのね」

「……自称イタい奴に知らされてたからな」

「まず、私やソルをはじめとした『吸血悪魔』」

この娘吸血鬼だったんだ……

「次に、好戦的なのが多い武闘悪魔とも呼ばれる『不死悪魔』。でも不死と言われてても死ぬけどね」

「……………不死なのに死ぬのか？」

「不死と呼ばれるゆえんが回復速度だから。回復速度を上回る力で攻撃されれば、あっけなく死ぬわ」

「……………ふーん……………」

「そして一番多い種族が城下街で暮らしてる『吸収悪魔』。空気中の魔力を吸収して魔力を補充してるから、戦闘能力はほとんどない」

「……………なるほど、種族について大体分かった」

「後は……………それぞれの在り方かしらね。さっき言ったように『吸収悪魔』は空気中の魔力を吸収して生きてる。『不死悪魔』は体内の魔力を回復させつつ外部からも魔力を補給できるわ」

「……………吸血悪魔は？」

「その名の通り血をすって魔力を得ているの。血は魔力の塊みたいなものだから。でも、中には『赤血』の持ち主もいる」

「……………『赤血』？」

「血が赤い悪魔のことよ。普通の悪魔は血が黒いわ。だから、赤血の悪魔は昔から狙われ続けてきた。同じ赤血の悪魔からも、普通の

悪魔からも」

.....

「話しが逸れたわね。『吸血悪魔』で『赤血』っていうのが一番厄介なの。赤血の場合は赤血をすわなければ力が衰えてくし、普通の血をすっても魔力が大して得られないから」

「.....そうなのか。それで、君は一体どのくらい血を吸ってないんだ？」

「えっ!?!」

「赤血.....なんだろう？君は」

「.....よく分かったわね。私が赤血だって」

「話している君の顔が怯えてたからだ」

「.....ニンブルケティック家は代々赤血なんだ。だから王でいられた、あいつが来るまでは.....」

「.....?」

最後の方はわざと小さな声で言ったらしい

「そんな感じかな。他には？」

「.....魔法について聞きたいかな」

「魔法？いいけど、つかうのは難しいよ」

「……………構わないさ」

それで『あいつら』を倒せるなら…………

「魔法…………魔術とも呼ばれてるけど、呼び方が違うだけでほんしつに変わりはないわ。それで、魔法の発動には詠唱と魔力が必要になる。これが魔法の基本概念よ」

「…………詠唱はどうやって知ればいい？」

「すでに完成された魔法にはあらかじめ創られた詠唱がある。それは魔術書なんか載ってる」

「…………なら、完成されてない魔法の詠唱は？」

「それは普通の魔法がつかえてから考えればいい。…………そうね、『中級以上の魔法』がつかえるようになったら教えてあげるわ」

「…………そうか。中級ってゆうのがどの程度かは知らないが、漆黑、迷走…………」

「！？」

「鎖された道を探す愚者に安寧なる眠りを込めて。『深闇の羽衣』ディルトロヒューラ」

辺りに真っ黒な膜ができ、この部屋を包む

「…………大した魔力も込めないで殺傷能力もゼロにしておいたから心

配は無い」

「うそ……これって……」

「これは中級以上なのか？」

「……上級魔術。それも大昔につかわれた『対大型魔物用捕獲魔術』
……何処でこれを？」

「……部屋にあった本に書いてあった」

「……それが魔術書よ。その本に別の魔法も書いてある」

「……そうか」

「それなら、さっそく教えてあげる。新しい魔法の創り方」

「……これで、少しは勝利に近づいたのか」

デ「ボツシーンやってみようか」

ゼ「……………何を怯えているんだ？」

エ「……………何が？」

ゼ「……………そうか、これだけは言うておく。俺は君と敵対するつもりはない」

エ「信用できない、って言ったら？」

ゼ「……………俺には目的がある。その目的の為に、俺は力がほしい」

エ「……………わかった。新しいまじつを教えてあげる。……………噛んじゃった」

ゼ「言いにくいもんな」

デ「と、まあこんな具合とどっちにしようかなって思いました」

エ「ホントに噛んじゃうかと思った」

ゼ「そういえばあえて魔術じゃなくて魔法って言うてたね」

g e a o f d e s t i n y イケニエ(前書き)

学校があったので停滞してました

「……っていうこと。わかった？」

「ああ。教えてくれてありがとな」

「手柄をたてた者にはそれそうおうの報酬をあげるのが王族のつとめだから」

「そうか。それじゃあな」

「あつ、言い忘れてたけど陽がおちたらまたさっきのところに来て」

「……わかった」

カチャ

……魔術も覚えた

これで勝てる……はずだ

確証がないのが不思議だ

なぜ？

これだけ力があれば勝てる、そう思ったのに

『絶対に勝てない』そう思う……

ああ、そうか……

理解した

誰も俺を信じてないからか

俺を信じてるのは俺だけ

だから確証が無いんだ

此処に居るやつらも俺を救世主なんて思っていない

昨日の夜に聞いたあの会話……

「エレス、今度の救世主は頼れそうじゃない？」

「別に、どうせ頼る気もないしどうでもいい」

「……ねえ、そろそろ『あいつ』をこの世界から追い出す事を考えた方がいいわ」

「それが出来たらくろつしないよ。いちいち『イケニエ』を召喚したりしない」

(……………)

「『イケニエ』か……。でも、これじゃあ何時まで経っても『あいつ』の支配下」

「……私には、どうする事も出来ないもん。ただ、あいつに従って
機嫌をとるだけ」

「エレス、私以外のひとに頼ることも大切よ。だから、今回は仕事を彼に任せてみたら？」

「……あの『イケニエ』に？」

「貴女の為にも、誰かに頼ることは必要。それが私の気持ち」

「ソルがそこまで言うんだったらそうしてみる」

扉の向こうから聞こえてきた会話。それが異様に耳に残った

イケニエか……

そんなもんだと思ったださ。俺の扱いなんで

それでも、誰からも信じてもらえないよりはマシだ……

だから、俺は逃げない

g e a o f d e s t i n y イケニエ（後書き）

何処にいる？

話していると周りを笑顔にしてくれた君は

照れて優しさをみせないけど、本当に優しい貴女は

掴み所が無く、フワフワと浮いてるようで誰とでも打ち解ける君は

そして、俺を必要と、信頼して、愛してくれた貴女は

一体、何処？

g e a o f d e s t i n y 新たな決意（前書き）

前話のゼレカとギャップがありますが、まだ夢から覚めてません

俺は今湖にいる

城から少し、いや結構離れた赤く濁った湖だ

「…………ぐえ」

みているだけで気持ち悪くなりそうな色だったので、早いところ用事を済ませる

まず適当な石ころを投げ入れ水面下に振動を伝わらせる。その後革袋（異空間から取り出した）の中から何かの生肉を沈める

「…………気付いたか」

その直後湖の中に黒い影が現れる

その影は徐々に大きくなり、そして水面から出て来た

「*カ*……」

「悪いな、説明するのが面倒なんだ」

水面から出て来た青い魚の様な生き物を槍で仕留める

魚は優に20メートルを越えるぐらいの大きさだったが、魚の急所であるエラ（？）に相当する部分を狙ったから大きさ関係無く、一たまりもないだろう

「ちとと……」

魚を地面に引っ張り出して口の中に入る

……真っ暗だ。わかってはいたけど

そのまま動で進んで肝(?)に到着した

途中槍で無理矢理道を作ったが、気にする程でもないだろ

左手で持っていたペンライトを着けて周囲を確認する

「これが『秘薬の肝』^{エリックハート}か」

ただの肝にしか見えないけど……

早速その肝を無傷のまま取り出す。一応ダミーと変えながら

この肝が無くてもこいつは死なないらしい。だからダミーとすり替えて、治療してやれば元通りってわけだ

「……にしても肝のダミーの色がなぜに真っ青？」

普通肝って言ったらピンクっぽいイメージだけどなあ……

なんてことを思いつつ『秘薬の肝』を丁寧に紙(もちろん頑丈なように造って)で包んで異空間ボックスに入れる

「さあ、戻るか」

来た道を引き返して外に出る

……………息が苦しい

どうやら治療する前に目を覚ましたらしく再び水中に戻ったようだ
随分タフなんだな

「て、感心してる場合じゃねえ」

急いで地上に戻る。が、

「あれ？息出来てる？」

水中なのに普通に喋れるし苦しくもない

ま、いつか。分からない事があればまた聞いてみよう

「ふうー、結構深く潜ってやがったな」

水面から上がり服を乾かす。その間に魚もどきの体内で見つけた物
を見ている

「……………よくわからん。という事で全て土産にして渡すか」
革袋を取り出してその中に……………

「……………随分と肉が余ってるな」

確かこの生肉は持ち帰ってこなくていいって言ってたな

「という訳で残りはこの湖に投げ入れていくか」

余っていた全ての生肉を放り込む

「じゃ、帰りましょうか…」

「ギョルルルル」

「ん？」

何かの鳴き声が背後から聞こえてきた

「あれ？まさか怒ってる？」

『いえ、怒っていませんよ』

………はい？

「もしかして言葉通じてる？」

『もちろん』

………うん、まあ生き返ったり異世界に來たり魔法が使えたりしてるわけだから、今更誰と言葉が通じようが驚かないさ

「えーっと、怒ってないなら何用で？」

『お礼に参りました』

「お礼？」

『貴方のおかげで仲間の『秘薬の肝』が抽出された事と食糧を与えてもらった事にです』

まさか肝を抽出して感謝されるとは思ってもしなかった

『一般に『秘薬の肝』と呼ばれる物は、私達の身体に良い影響を与えません。ですので、私達の群れにいる肝を持つ仲間の肝を抽出してもらい、本当に助かりました』

「そうなのか」

『ええ。それも命を奪うわけでもなく肝のみを抽出するなんて、普通の悪魔では考えられない行動です』

だって俺人間だもん。悪魔では無いから

「別にいいってことさ。じゃあ、俺は帰るんで」

『わかりました。ではこれを』

そう言って小さな青い笛が目の前に浮いていた

『この笛をこの湖で吹いていただければ、おもてなしをさせていただきます』

「どうも。また来る事があればそうさせてもらうよ」

空中に浮いていた笛を受け取り礼を言った

後はいつも通り（といっても二回目だが）『リードフロウ』を使い速さを上げて城に向かう

「はあー。どうせ戻ってエレスナーグに渡しに行ったら、あいつがいるんだろうな。まあ、すぐに黙らせてやるけどさ。なんか険悪な感じだし。そういえばソルティーアもあんまし好意的な態度ではなかったな、あいつに対して。いよーっし、今回はフレンドリーな感じで話すか。なんて独り言言ってる間に到着」

裏口から入る

……：「そういえば何で俺は毎回裏口から入ってるんだ？まあ裏口と言っても城下街の裏門を通って入っているわけだが」

「おかげで街のひととは一回も会ったことがない」

「次からは正門から入る……」

「とかなんとか考えてると玉座の間が続く廊下まで来たわけだ」

扉を開けず聞き耳をたてる

「今度はちゃんと『秘薬の肝』を採ってきましたよ？」

「随分小さいわね」

「そんなことはないですよ。それだけあれば不治の病だって完治できるとは」

「色が灰色なのは？」

「もとからそんな色でした」

「……………はあー。偽物ね、これ」

「言い掛かりはこまりますよ、姫様」

やっぱりな。まーたあいつがでかい顔してる

「『秘薬の肝』の色は灰色じゃないわ。それに、ところどころ傷ついている。これがもし本物だとしても、価値はない」

「はっ、何言ってたんだ？なら自分で採ってくればいいだろ。仮にも魔王なんだからよ」

そろそろ準備しておくか。どんな反応するかな

「まあ、仕方ないか。所詮形だけの姫じゃ、空撃部隊（俺達）に頼るしかないよな？」

「……………エレス、始末してもいい？」

確かな怒気がこもった声が聞こえた。多分あいつには聞こえてないだろ

「だめ。それはだめだよ」

「だけど……………！」

「それで、姫様よう。“あれ”はいつになったら貰えるんだ？」

「渡す気なんてない。特に貴方には」

「へえ、そう言っちゃうか。なら、少しは痛い目を見てもら……」

「しっつれーい」

勢いよく扉を開けた

「ちっ」

「どうしたの？」

「いやあ、頼まれた物を持ってきましたよ」

異空間に手を突っ込んで紙包を取り出す

「よっ、と」

大体樹齡二百年の木の切り株程の大きさ

「もしかしなくてもそれって……」

「『エリクハート』だけど？」

「やっぱりっ？」

その会話を聞くなりマローニとかいう奴の顔が青くなる

「ちゃんと無傷で手に入れてきたから」

「ふふっ、ご苦労様。褒美は何がいい？」

「とりあえず何もない。まあ思いついたらでいいや」

「そう、わかったわ。それじゃあ後でまた呼ぶから」

「了解」

なんてやり取りをしてる内に隣にいたあいつがいなくなってた

「じゃあ」

「ええ」

部屋から出る

「おい」

そのまま自分の部屋に向かう途中呼び止められた

「……………何だ？」

さっきの奴が話し掛けてきた

「お前、自分が何の為にこの世界に呼ばれたか知ってるか？」

ここからなら玉座の間まで声が届かないだろう……………

「別に、興味ない」

「教えてやるよ。お前は……」

「『イケニエの為』だろ？知ってるよ」

鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔になってる

「……なっ、なら何で……!!」

「居場所があるから。それだけだ」

自室に向かう

「誰かが俺を必要としてくれるなら、どんな目的でもいい。たとえばイケニエでも、復讐に駆られて全てに絶望してるよりは」

「……ちっ、駄目だったか。なら……」

微かにそんな声が後ろから聞こえた

g e a o f d e s t i n y 新たな決意（後書き）

ゼ「漸く俺らしくなってきた場面だな」

エ「正直私も依頼を頼んで、ゼレカが帰って来た時に別人かと思っ
た」

ゼ「いやあー、誰かに必要とされるっていいね」

ソ「……」
「応あの場合に私も居ましたよ？」

g e a o f d e s t i n y 門(前書き)

スランプ気味になってしまいました

g e a o f d e s t i n y 門

ベッドの上に腰掛ける

「……………ふう」

……………やっぱり、『居場所』があるだけで落ち着く

どんな必要のされかたでも、ただがむしやらに突っ走って自信を無くして無力を噛み締めるより全然居心地がいいや

「……………目的を忘れるつもりはないけど」

それは俺が黄泉がえった意味だから。必ず果たす目的だから……………
胸に掛かっているペンダントを握りしめる

コンコン

「ゼレカ、居る？」

「ああ、居るよ」

カチャ

「何か用事？」

「うん、まあ」

イスに座る様にエレスナーグにうながす

「そついえばさっきに比べてずいぶんと明るくなったね」

「んー、まあイロイロと決めたから」「ふーん……。話しを戻すけど城下街って行ってみた？」

「全くと言っていい程行ってない」

「やっぱり。なら、ちょっと私と行ってみない？」

おおーこれはいわゆる『デート』ってやつですかな

「……褒美としてね」

あっさり否定されちゃいました

「たしかにどんな所かわからないからお願いしようかな」

「じゃあ早く準備して。場所は正門で」

そつ言ってさっさと部屋を出て行った

「……………正門でどこだ？」

そついえば裏口からしか入ったことないから、正門がどこなのかわからん。それに『正門』なのに『裏口』っておかしくないか？普通『裏門』だろ？それとも俺が勝手に裏口と呼んでるだけであって実は裏門なのか？でも昨日のメイドは『裏口』って言ってたぞ？

「ん？『さつき』？」

たしか今エレスナーグは『さつきと比べて』って言って無かったか？

そして俺は一つの答に行き着いた

「……………時間の流れが違うのか」

そう考えれば納得できる

俺が居た世界、『人間界』と『魔界』とでは時間の流れが違う。そういうことにしておこう

……………まあ後で聞いてみるか

「今はとりあえず準備して正門をみつけるか」

というわけで鏡を造る。一からではなく創造で

「！！！？」

鏡を見て気付いた

「左目が緑色になってる……………」

多分自分を神だと言ってる奴が変えたんだろう

「それにしても気付かなかったな」

他にも身体に何かされてないか調べたいが、エレスナーグを待たせ

るわけにはいかないからやめる

「む、胸に穴があいてる……」

とかだったらかつこよかったのにな……

部屋を出て一階まで降りる

おそらく、裏口とは真逆の方向に進めば正門につけると思ったからだ

「えっと、こっちが裏口だからあっちに行けばいいのかな？」

そのまま進むと思ったとおり正門らしき場所に着いた

「なるほど、ここが正門か。たしかに堂々としているな」

門が高くそびえ立っている

軽く50メートル以上はあるんじゃないやね？いや、確実にそれ以上あるよこれ……

「……いったい誰が入るんだ？この城の半分の高さまであるだろ」

門に心を奪われた俺は漸くここに来た理由を思い出し、エレスナーグを待つ

女の子だから準備が長いんだろうな……

g e a o f d e s t i n y 門（後書き）

ゼ「あー、そういえばこの時鏡見て初めて左目が緑になってるって気付いたんだった」

エ「そうなの？てっきり初めから気付いてるとばかり思った」

ゼ「……そっか、その事については話さずにいたんだった。つっても、瞳の色なんか気にしてな……くは無かったけど初対面から緑だったから、話さなくてもいいかなって」

エ「いまはもう知ってるからいいけど、あの時に話してほしかったな」

ゼ「ふふふ、そう？」

デ「最近出番がないぜ」

gea of destiny 探索(前書き)

デ「はっはっは、お久しぶりです、ちょっとさぼっちゃいました」

ゼ「さぼりすぎだ!」

デ「まあまあそんな怒らないで」

ゼ「毎日毎日睡眠時間削ってゲームばっかやりやがってよ!あげくに学校までさぼる始末、やりすぎだ!」

デ「もうプレイ時間80時間越えたからそろそろ続きを書くこと思ってた」

ゼ「発売してから十日ちよいで80越えかよ……」

デ「基本全作そんなかんじだ」

ゼ「……駄目作者」

「……………長い！あれから何時間経った？どう考えても忘れてるとしか思えないんだが！さっさと準備をしろって言ったわりには俺がいつもの十分の一程度の速さで行動してもまだ時間が余ってるぐらいだぞ？」

「早かったわね」

なんてことを考えていたら後ろから声が聞こえてきた

「そうだった？」

「ついさっき来たところだ、と言わないのは俺なりの抵抗

「それより、早く街を案内してあげるわ」

「ああ、頼むよ」

エレスナーグが門番に門を開けるように言う

「……………へえー」

門から城の外に出る

そこには如何にもRPGにでてくるような街だった

空の色は灰色で、太陽が陰も形もみえないことを除けば

「……………何っーか、思ったたより普通だな」

「そっなの？」

「俺の想像ではゴツゴツした岩に家を創って、その岩のてっぺんからマグマが流れてるってイメージだったから」

「ふふっ、何そのイメージ？」

「意外と普通の街だったな」

「悪魔に対してのイメージ、かわった？」

「うん」

「っと、まずはいい」

屋根にとてつもなくでかい牙が乗っかってる建物に来た

「……………」

「早くはいるよ」

「あ、ああ」

建物の中にはいると酒場のような場所だった

「ようこそ『悪魔達の眼』へ。デビルズアイ あら、新人さん？」

「どつども……………」

「此処はギルドよ」

「ギルドか……」

依頼人の依頼を請けて盗賊や魔物を倒したり、道具や武器なんかを納めたりするの？

「私はメトリア。悪魔達の眼の受付をしてるわ」

「はづk……ゼレカです」

あぶねえ……本名乗るところだった

「ゼレカ君、ね。貴方、どこかのギルドに所属してる？」

「いえ、無所属ですけど……」

「だったら、悪魔達の眼に所属しなよ」

……人間が入ってもいいのだろうか？

「あれっ？」

俺が入っても大丈夫かエレスナーグに聞こうと思っただら姿が見えない……

「どっしたの？」

後ろから声が聞こえる

「なんでもないよ」

『君を探してた』なんて言えないさ……

「どこ行ってたんだ？」

「いろいろあるの」

「そうですか。それより……」

「入らないの？」

「ギルド？」

「入っておいて困ることもないし、むしろ入って損をするってことはないわ」

「そうなのか」

後ろを向いていたからもう一度後ろを向く

「入る？」

「はい」

「わかったわ。………はいっ、後はそのギルドカードに名前を書いて」

「………随分簡単な手続きだな」

ゲームと同じくらい早いぞ？

「書きました」

「じゃあそのカードが貴方の証明書だから」

「はい」

「登録はおわった？じゃあ次行くわよ」

デビルズアイから出る

「どうだった？」

「んー、まあ普通にギルドだった」

「ギルドだもん」

「そついえば聞いてなかったけどデビルズアイは何のギルドなの？」

「基本『何でも屋』。特にこれと言ったかたよりはなわ」

「便利屋ってことか」

「そついうことね。次はここよ」

「武器屋？」

……俺に武器も防具も必要ないんだけどなあ

「そついえば貴方、武器や防具はどうしてるの？」

「……………造ってる」

「造るって、鍛冶屋だったの？」

「いや……………想像で」

「……………」

「……………」

絶対病んでるって思われてるよ。少なくとも俺だったらそつ思っね

「……………本当だよ？」

「……………そつなの？」

「じゃあ今から造るから見てて」

何を造るっか……………

あんまし弱い武器だと『造れても使えない』と思われたくないしな
刀身が蒼く発光して、水の属性を付与した刀……………

「……………つと、ほら」

「ほ、ホントだ。どこから取り出したわけでもないし、ホントに

造ったんだ……」

「一応属性も付けたし、魔力もまあまあ込めたからそれなりの性能だと思っぞ？」

「へえ……」

そんなに驚かなかつたな……。もっと驚くと思ったんだが

「それなら武具は必要ないわね。後は装飾屋でも……」

その時、激しい轟音と吹き飛ばされそうな風が吹いてきた

「きゃっ!？」

「くっ!」

……収まった、みたいだ

「なんだ今の？」

「闘技場のほうから……まさか!」

「あっ、おい」

彼女に何か心当たりがあるみたいだったから後を追う

エ「そういえばこの時が初めてのデートだったね」

ゼ「そうだな。そして初めて弄られたのが顔合わせた直後だった
け」

エ「そうだった？」

ゼ「俺と目が合ったら『眼中になんかありません』みたいな目をし
てたぞ」

エ「あははは……」

ゼ「あの時から『この娘DSかもしれない……』って思ったけど、
ドではなかったな」

エ「そう？いじめるのが好きだけど」

ゼ「……（アルコールを摂取したら一切そんなそぶりは見せないけ
どな）ボソッ」

エ「？」

g e a o f d e s t i n y 黒い血の刀(前書き)

このままいくと後三、四話ぐらいで《運命の歯車》が終わり、それから二、三話(気分が増えますが)で日常にもどります

g e a o f d e s t i n y 黒い血の刀

「……………くっ！」

思ったより早いな……

風の魔術でも使ってたんか？

「エレスナーグ、この先に何かがあるんだ？」

「闘技場。そこに……………」

「？」

「……………っ」

「エレ……………」

「ウオオオオア！！！」

「！？」

「何だ、今の！？」

「まずいつ……………」

ガチャン！！

闘技場の扉を蹴り開ける

「じつちー！」

「ああ！」

階段を駆け上がり観客席についた

「くっ！」

「……」

……酷い有様だ

観客席から下を見るとそこら中に猫の様な薄赤色の『何か』が転がっていた。それには所々鎧の様な物や青い布がついている

「まさか……」

「ええ、これみんな此処の兵士よ」

やっぱり……だけど血が壁や床にすら付着していないっていうのはどういうことだ？悪魔の血液は一部のやつを除いては黒いって言うてたから、あの赤色は血液ではないはず

「……………この感じ」

「じれって……」

……………確か、空撃部隊の隊長とか言ってた奴の魔力

「アハハハ！！コレデオレハサイキョウダ！！」

「あれは！！！？」

「どうしたんだ？」

「あいつの持つてる『刀』……」

「『刀』？」

この世界にも刀があるんだな

「あれはこの国の王に代々受け継がれてきた『黒血刀』」

「ヒヤッヒヤヒヤヒヤ！」

「その刀はとてつもない力を秘めているけど、資格が無いものや赤血じゃないものが手にすると刀に自我を支配されてしまうの」

「なるほど、だからこの国の王に代々受け継がれてきたわけか」

「こうなると破壊衝動のむくままに破壊を繰り返すわ。だから、その前に刀と本体を引き離す」

「わかった。なら、俺がやるよ」

さつき造った剣を構える

「刀を離せばいいんだろ？」

「ええ」

「じゃあ、此处で見てて。よっと」

観客席から飛び降りる

「ハハハハ、オマエモシヌカ？」

「悪いが一度死んだ身なんでね、また死ぬわけにはいかないんだ」

次元から短剣を一本取り出し、詠唱にはいる

「顕れる焰。『ファイヤーボール』」

小さな火の玉をマローネに放つ

「ナンダ？コレ」

すると、刀を振り上げてその風圧で火の玉を掻き消した

「……………顕れる焰。『ファイヤーボール』」

もう一度火の玉をつくり、放つ

「ナンドヤツテモオンナジダ！」

再び刀を振り上げて火を消しにかかった

「引っ掛かったな」

「ナニ？」

火の玉の中から、さっき俺がだした短剣が出てきた

「アタラナイ」

「どうかな」

風の魔術をつかい後ろに周りこんだ

そのまま剣で刀を持っている左手を斬る……が

「ヒツカカッタノハドツチダ？」

グニユ

まるでスライムを斬った感触、つまり手応えが無かった

「偽物！？」

「ゼレカ、後ろ！」

「オソイ」

「ふっ」

振り下ろされた刀が弾かれる

「セーフっと」

さつき火の玉と一緒に投げた短剣が当たって、弾いた

その短剣に風の魔力を流し込む

「チイツ！アアアアア！」

一気に間合いを詰めて斬り掛かってくる

それをかわしながら新しい短剣を三本取り出し、それぞれ火・水・土の魔力を流す

「これで準備完了」

四本の短剣を空目掛けて投げる

「そおらよっ！」

振り下ろされる刀を下から力一杯斬り上げる

「クツ、ウオオオオア！！」

「なんだ？」

……確かさつきの爆発の時の掛け声

「キエローー！！」『ダークネスミスト』！！」

辺りから黒い霧が立ち込める

「これは………そうか！伏せろ、エレスナーグ！」

「う、うん」

「キエエエエー!!」

次の瞬間、さつきと同じ爆発が起こった

「ハハハハ！シンダカ」

「誰がだ？」

「風の魔力をつかって跳躍していたのさ」

あいつは無事みたいだな……

「我、元素の加護を受け、世界の理を使役する。破壊と創造を行使し、守護する力をほつする」

空中で四本の短剣を持ち、マローネを囲むように投げる

「ナラバモウイチド……」

「遅い。『アブソリユートエレメンタル』!!」

短剣からそれぞれの魔力を解き放ち包囲する

「自分のしたことを悔いる」

そして、火に焼かれ岩に刺さり風に刻まれ水に流された

「ギイヤアアア!!」

カランカラン

完全に刀と本体に分かれた

「やれやれ、結構魔力消費したな」

足元に落ちた刀を拾う

「ゼレカ!?それに触ったら貴方も……」

「ん?やばかった?」

「え……………?」

赤血なら大丈夫って言ってたから試しに持ってみただけ、ホントに強い力を感じる

もしかしてこれがあれば……

「おっと、何考えてんだ俺は」

さっさと観客席に戻らなきゃな

近くの扉から出て階段で上に上がる

「ゼレカ、大丈夫?」

階段の途中でエレスナーグが心配そうに言う

「大丈夫大丈夫、はいっ」

黒血刀を渡す

これでとりあえずは安心だな

「ありがとう」

「あいつ、どうするんだ？」

「後で話しを聞いておくけど、今は動けないだろうからこのまま」

「わかった。それなら城に戻った方がいいんじゃないか？」

「そうね、貴方も疲れただろうからゆっくり休んで」

「そうさせてもらおう」

さっきの魔術で魔力つかいすぎた……

「それじゃあ戻るわよ」

「ああ」

ゼ「……………」

エ「どうしたのゼレカ？」

ゼ「そういえばこの頃のエレスはあんまり俺を名前で呼ばないと思
って」

エ「そう？」

ゼ「今はほとんど名前だけど、この頃は『貴方』とか『ねえ』とか
で呼んでたまに名前を言ってくれるじゃん」

エ「それを言うならゼレカだって、『エレスナーグ』とか『お姫様』
あつ、それは今でも呼んでるっけ。とにかく、エレスとは呼んでな
かったよ？」

ゼ「ふっ、それもそうだね」

エ「ゼレカ」

ゼ「エレス」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0191t/>

吸血魔王と赤血魔神

2011年9月23日00時33分発行